

4. 災害の歴史

4. 災害の歴史

1 概要

津軽は、北奥最果ての積雪寒冷地で気象条件にはけっして恵まれた土地柄ではありませんが、岩木川によって造られた平野では、古くから稲作が行われてきました。

この間には、くり返し発生する洪水や、冷害、あるいは地震などによって多くの人命財産を失うことも度々ありました。

津軽地方を襲った災害の数は、実に夥しいもので、いつか、どこかで、何かが必ず起っているのです。中には、度重なる凶作で、“地逃げ”といわれる田畑を捨てて他領へ逃げ出す者や、地震の発生によって一瞬のうちに家を潰され、その下敷きになって死亡した人などが多くありました。

また、津軽最大の災害といわれた天明の飢饉では、山野の草を喰いつくし、犬猫牛馬はもちろん恐いことに人間を殺してその肉を食べ、それが親子兄弟のあいだにもあったというのは、さながら地獄図絵であります。飢饉時には、必ず疫病をまねき、死者の数を一層多くしました。

数ある記録の中に、天明4年のこととして、「(前略) 村々の富豪の者、耕作制道の為佩刀御免にて駆け廻り申候。田野広々として郷人なく、白骨死人^{わかとき} 嫩を埋申候 (後略)」とその惨状を伝えています。

昔は、各領内の米など、食料の融通が思うようにできなかったのも、災害が発生するとそれが飢饉に直結したのです。

昭和の年代に入ってからでも、不作時の一般農家の生活はみじめなものでした。飯米にも事欠く有様で、小学児童の欠食や、多くの小作農家では娘の身売りがありました。彼女等は、小さな風呂敷包み一つで泣き泣き家族と別れていったのです。そして薄幸な一生を終えたといえます。

津軽地方を襲った災害の中では、岩木川の洪水災害が最も多いものであります。その度に人々は深刻な苦しみをしました。しかし、家を流し、生命を奪い、せつかく耕やした田畑を流す洪水は憎いものでしたが、広大な水田を潤す岩木川の恩恵を忘れることができなかったのです。

このような自然の仕打ちにもめげず津軽の人々は、営々と努力を重ね、今日見る耕地や資産を増加してきました。



昭和10年8月洪水 濁流の後の大鰐駅構内

2 水害

1) 概要

津軽平野は、地殻の変動や、大雨、洪水氾濫によって、土砂が高い所から平地に流れ出し、長い間に一面に堆積して現在の沖積平野が造られました。

平野の中央を流れる岩木川の流域は、古くから開発が進められ、そこに住む人々の生活を支える基盤として農業を中心に発展してきました。今日では、全国有数の穀倉地帯、リンゴの生産地としてその名が知られています。

しかし、「津軽の母」と呼ばれ、限りない自然の恵みを与えている岩木川は、ひとたび洪水になると、手に負えない暴れ川となり、その度に大きな被害をもたらしています。中には、潰滅的な打撃を受けたこともありました。

津軽地方を襲った災害の中には、水害が最も多いことは前記のとおりですが、過去江戸末期まで、年1回単位で数えても、130回にも及んでいます。

水害発生の原因としては、次のことが挙げられます。

- 流域の平均降雨量は1,600mm程度ですが、上流山地部は2,000mmにも及ぶ多雨地帯で局地的に豪雨が発生すること。
 - 上流域は、流路延長の割に流域面積が大きく河川勾配が急で、洪水流出が短時間に集中しやすいこと。
 - 下流域は、河川勾配が緩いため、洪水が川を流れ下る時間が長いこと。
 - 小河川や水路が入り交じり、岩木川主流や、河口十三湖の水位上昇が安易に中小河川への逆流をひき起こすこと。
 - 昔の岩木川は、河川改修がなされておらず原始河川であったため、大雨のたびに氾濫があったこと。などであり
- ます。

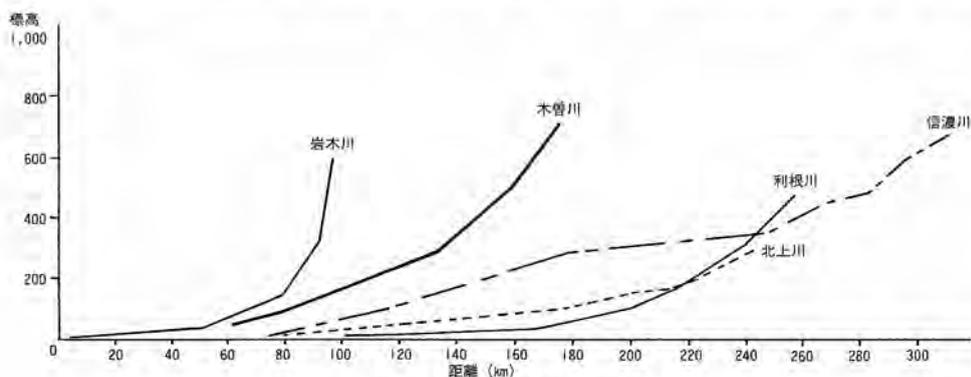


図4-1 主要河川の勾配

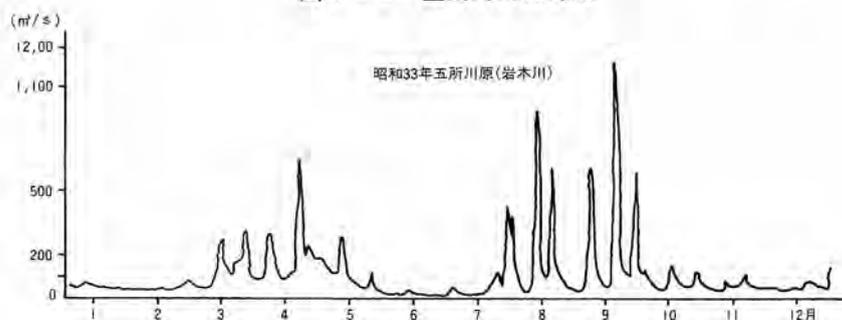


図4-2 年間流出のパターン

また、岩木川の洪水は、多雪地帯であることから、春の融雪によるものと、夏の豪雨によるものとに大別されます。過去の洪水記録を見ますと、3月～4月の融雪洪水、夏期では7月～9月の前線性集中豪雨型の大洪水がほとんどであります。

大正7年岩木川改修事務所開設以来、治水事業が進んだことにより、洪水氾濫区域は大きく減少して被害が少なくなったので、流域の土地利用が高度化してきました。

反面、開発の進展により洪水の流量が増し、また氾濫区域内の資産が大きく増えたため、水害時のダメージはむしろ大きくなっています。



融雪洪水（昭和25年4月2日、新十川左岸
現五所川原市姥瀬）

2) 藩政期以前の洪水

大昔は、土地の隆起や陥没がくり返され、その度に山海の津波が発生し、または洪水によって一つの集落が壊滅するなど、多くの生命・財産が失われたことなどが記録されています。

しかし、津軽藩成立以前の被害状況については、資料が乏しいため、その多くは不明であります。次のような記録が見られます。

応神55年(300)の津波、『新釈青森県史資料編』、寛治元年(1087)、延元元年(1336)、興国元年(1340)、永享元年(1429)の津波。天文3年(1534)、永禄10年(1567)、元亀3年(1572)の洪水、(以上『岩木川物語』)などがあります。

① 津波

津軽地方を襲った津波については次の記録があります。

(イ) 応神55年(300)の津波

山津波、海津波があり、陸地が陥没して日本海と陸奥湾が出現した。

(ロ) 寛治元年(1087)の津波

第73代堀河天皇の時代(1087~1110)と伝えられている。〝白髭水、といわれる大津波が起こり、津軽六郡の内、奥法(現在の黒石、藤崎、浪岡地方)、江流末(現在の鶴田付近から十三までの西北津軽地方)、馬の郡(現在の五所川原市原子付近の山岸通り小泊まで)など津軽地方が陥没して海となる。また、このとき外ヶ浜(現在の青森市から北の陸奥湾沿岸)田名部間も海となる。

小川が大河となり、波によって岡になった所を浪岡、山崩れで土砂の積った所を高岡と言った。このようなものすごい大津波で、藤崎より北の方は皆流されたり、潰されたりで、十三の福島では数千軒の町が亡んでしまった。

(ハ) 延元元年(1336)の津波

5月に大津波が起こり、十三城壊滅、水戸口変形、商家の多くが流されたり潰された所を高岡と言った。このようなものすごい大津波で藤崎より北の方は皆流されたり、潰されたりした。十三湊は衰えてしまった。

(ニ) 興国元年(1340)の津波

山海の津波が起こり津軽は入海となる。六郡の内、奥法、江流末、馬の郡、その他とも山崩れで津軽は変わってしまった。

外ヶ浜、南部の間も海となり、藤崎より下の通りは皆絶えてなくなる。

小川も大河となり、所々に沼が多く出て、田光沼もこのとき出来たとされています。

また、この大津波によって、鎌倉時代、日本の大きな港の一つとして夷船や京船が出入りし大いに賑いを極めていた十三湊は、一瞬にして壊滅しました。このとき津軽地方の死者は10万人といわれています。

(ホ) 永享元年(1429)の津波

大津波に見舞われ転退した村落があった。

② 洪水

以上の津波のほかに流域内の洪水として次の記録がありますが、具体性に欠けています。

(イ) 天文3年(1534)の洪水

5月に大洪水、以来3年続き洪水があった。

(ロ) 永禄10年(1567)の洪水

6月に洪水があった。

(ハ) 元亀3年(1572)の洪水

5月4日夜大雨があった。5日~6日は晴れたが、大洪水となり所々の橋が流れた。

3) 藩政期の主な洪水

昔の岩木川流域の各河川は、右往左折して流れる原始河川で、一旦出水をみると各所で氾濫が起こりその都度被害が発生していました。十三湖水戸口も度々閉塞して日本海への流入を妨げ、行きどころがなくなった水は、付近一帯にあふれ出し大きな被害を与えていました。

このような状況から歴代藩主は、次第に治水事業に目を向けてはきたものの、その事業は今日のようなものではなく、洪水で没した土地は長い間放置されていたといわれています。

天正18年(1590)為信が初代津軽藩主になったころの水害記録は、ほとんど民間で記録されたものであり、以後3代藩主信義の時代までの藩公式記録からも、水害の状況について知ることは極めて困難であります。

しかし、4代藩主信政は、寛文元年(1661)にはじめて藩日記を記録させるようになったので、藩庁の政治に係ることや、領内の変事に至るまで記録され、水害についても民間記録と合わせてその状況は、かなり詳しく知ることが出来るようになりました。

表4-23 (P162)に見られるように実に夥しい記録で、流域内河川の暴れぶりを伝えています。

以下、藩政期に発生している主な洪水を、便宜上初期〔天正18年(1590)～延宝8年(1680)〕、中期〔天和元年(1681)～明和8年(1771)〕、後期〔安永元年(1772)～慶応3年(1867)〕として記してみます。

① 藩政初期の洪水(1590～1680)

ほとんど連年発生しています。主なものとしては、次の記録があります。

(イ) 慶長11年(1606)、降雨が続き、堀越川(平川、大和沢川)の洪水で、町屋の床まで水が上がり、材木など多数流れる。

(ロ) 寛永16年(1639)7月の洪水で、原子(現五所川原市)より下通り金木まで破損、田地残らず泥に埋まり前代未聞の洪水といわれた。(注、寛永15年(1638)としている記録もある)

(ハ) 正保2年(1645)正月28日、岩木川大洪水、三世寺林(現弘前市)より下は水の深さ7尺～8尺(注、『津軽史事典』には慶安元年(1648)として同様のことが記録されている)

(ニ) 慶安2年(1649)8月16日～17日の大雨で大洪水、大川(岩木川)筋の家が多く流され、死者も出る。

(ホ) 万治3年(1660)この年は、7月14日より雨が降り続き、閏8月20日には、弘前の土手町、紺屋町で大きな材木が家の中に流れ込んだり、橋が流されるなどの大洪水。町田、船水、三世寺では床上3尺の水となり船で往来した。

(ヘ) 延宝6年～8年(1678～1680)と、この年は連続3年洪水がありましたが、被害の大きいものとしては、7年、8年の洪水があげられます。

(③) 延宝7年(1679)は、8月26日から9月6日までの3回の洪水があり、山崩れが起きて人や馬が多く死亡、家、橋の流失、田畑の作物が半作になる程の大きな被害が出ています。

(④) 延宝8年(1680)この年は、1月、8月と洪水が発生しています。1月16日、岩木川洪水、五所川原の土居(堤防)10間(18m)破損。8月26～27日大雨が降り続き、岩木川は大洪水となりました。弘前の下町残らず床上浸水、土手町の橋流失、在所の35ヶ村水没、田畑の損害4万9千石、家屋の流失75戸、死者35人、牛馬の流失89匹など大被害が発生しました。「白髪水」といわれています。

(注、『青森県史』は「津軽領9月まで大風雨大洪水、35ヶ村水びたし、死者33人、田畑4万9千石の減収」としている)

また、この時期から藩直営の新田開発や、本格的な治水事業も進められました。

② 藩政中期の洪水(1681～1771)

このころになると「藩日記」などもあって洪水の記録も多くなります。ほとんど連年発生しており、この期間90年のうち54年洪水があったことが記録に見られ、実に夥しい回数となっています。

中には、年に7～8回も連続して発生し、地域住民を悩ませていました。

この時期は、新田開発振興期の中頃で、開発の進展に従い、流域の各所に続々新村が誕生していました。開発の前提として、用水確保と排水の面から用水路開削や、治水事業が盛んに行われたため、村々では、大量の人夫が動員されていました。「岩木川沿岸改修の労役激しく百姓苦しむ」という記録もあります。

また、この間の元禄、宝歴期などは、数回の凶作があり、大洪水と飢饉が重なって人々は大変難儀した。と伝えられています。この時期の主な洪水として、次の記録があります。

(イ) 貞享4年(1682)6月15日、大風大雨で浅瀬石川筋人多く流死、とくに温泉場に損害があった。またこの期間は2年～4年と連続発生しています。

(ロ) 元禄年間の洪水。この期間は、元年～11年(1688～1698)、13年～14年(1700～1701)、16年(1703)と実に毎年のごとく洪水に見舞われています。また、5年からはじまった大凶作も重なり、住民の苦労は大変なもので多くの餓死者も出ていました。

この中で被害の大きかった洪水としては、6年、11年、13年、16年の洪水があげられます。

(⑤) 元禄6年(1693)2月13日～14日、大雨洪水、駒越川で橋が破損し往来が出来なくなったので船で通行した。岩木川下流部では、溺死者が多く、罹災者は、新田を捨て古村へ帰った。また、この年は天候不順で「青立ちの飢饉」といわれる凶作であったので新田を捨てた人が多かったものと思います。

(⑥) 元禄11年(1698)は、5月～7月と続けて洪水がありました。5月4日からの洪水で田153町歩余、畑53町歩が川のようになって植付けしたばかりの苗がくさったり、大豆や粟なども押し流された。そのほか、堰口水門2ヶ所破損、堤防11ヶ所破損、川除出し26ヶ所破損、ため池施し1ヶ所破損、仮橋2ヶ所流失、樋脇8ヶ所破損、街道3ヶ所川のようになる。堰留4ヶ所破損、山堰9ヶ所破損など数え切れない程の被害がありました。

6月23日より大雨が降り、27日、7ツ時(4時)から増水して洪水となりました。

藻川、鶴ヶ岡、川山、種井、桜田など各村(いずれも現五所川原市)の田畑約62町歩が水の底になる。大川(岩木川)の水は、その後次第に引いていったが、問手川(十川)から水が入り込み、これらの村々は、増水して水が引か

ず、田畑に被害があったのです。

広田組の村々では、5月から再度の洪水で、青田一面に冠水し、種籾もなくなる状態で、他の村から借用して蒔付けをしました。また、鶴ヶ岡や藻川では、飯米がなくなったので、11月15日から2月1日までの104日間、1人につき1日3合ずつ給付されたといわれています。

7月になって、またまた洪水がありました。23日から大雨で24日大洪水。弘前の新町、石渡、馬屋町の橋流失、駒越の堤防が欠壊して住家が押し流されるなど、「百年來数度あった洪水にも増した洪水」といわれ、川筋では多くの被害がありました。

また、この洪水で藤崎の五所川原堰留切脇が、長さ25間(45m)、破損しました。

㉔ 元禄13年(1700)1月には「慶安元年(1668)及び延宝8年(1680)以来の大洪水」という記録もありますが、詳しい被害程度は不明です。

㉕ 元禄16年(1703)5月の洪水に続き、6月1日大雨が降り洪水になりました。

上流地区では、流された家や、牛馬の流死も多く、鶴田村から下流では、青田の上を船で往来する程の洪水でした。この洪水のため米価は高騰し、村々では、餓死者があったと伝えられています。米価の高騰は、米商人が藩と結託して、大量移出したのが原因とされています。

また、頻発する洪水のためかどうか不明ですが、津軽藩では、村々農家の雨乞い祈禱を禁止しました。

㉖ 享保年間の洪水。この年間も実に多く、4年(1719)、8年～9年(1723～1724)、12年～15年(1727～1730)と、2年あるいは4年と連続発生しています。

この中の主なものとしては、4年、13年の洪水があげられます。

㉗ 享保4年(1719)7月、20年來の洪水で、駒越川増水、鶴ヶ岡、藻川、芦野(現中里町)、川口町(現金木町)で被害、とありますが具体的な状況は不明です。

㉘ 享保13年(1728)7月13日から9日間大雨が降り続き、大洪水となりました。

弘前で橋や家屋の流失、板屋野木村(板柳)、青女子(現弘前市)より下通り(下流)でも軒に水付き船で往来する程の洪水でした。大川(岩木川)の堤防が数十ヶ所破損したほか、新田地方では、数日間の床上浸水など、各面に亘り大きな被害が出て、延宝8年(1680)以来の洪水といわれました。

また、享保年間、凶作が続いたり、疫病が流行したことや、ひでりなど、多くの記録が見られます。例えば、4年(1719)「6月、20年來の大雨凶作、大雨は、城ぶしんの石伐り出しのためとうわさされる。」5年(1720)「凶作、4月赤田、広田組に救米。」10年「前代未聞の大ひでり。6月ひでりのため板屋野木、前田屋敷で水けんか。」ほか、疫病の流行も実に多く、「死者多数」の年も度々ありました。

大雨が降れば直ちに氾濫し、ひでりが続けば水不足を来たし干ばつになり、一旦発生した疫病は止まることを知らなかったのです。

㉙ 寛保2年(1742)7月2日大雨があり、領内の方々に洪水となりました。

中山通り(津軽半島地区)の各河川が出水し、飯詰、金木辺では津波が起こり、特に飯詰川は大洪水で、飯詰村では、家屋53軒、蔵3棟流失、人死63人のほか牛馬も多く死亡。その他外ヶ浜通り(津軽半島陸奥湾沿岸)でも田畑の損耗や、人馬の死亡が多く出ました。

(注、「飯詰の町屋40軒余、水死60人」としている記録もある。)

㉚ 宝暦9年(1759)閏7月2日より7日までの大洪水で、真土領(現岩木町)の堤防300間(540m)欠壊、弘前の各町内では水押し、平川筋の碓ヶ関、大鰐までの村々で40軒余り流失し、人畜が多く死亡などこのとき、田畑の損耗高5万7千石余、流失した家屋278軒、男女65人死亡、橋大小700余り流失、被害がありました。

被災地の状況は、まさに惨澹たるものであったと思います。また、このときの被害状況については、「閏7月、平川筋大鰐方面洪水、減収5万5千石、死者6名」としている記録や「閏7月6日大水、碓ヶ関、大鰐より弘前まで橋残らず流れ落ちる。川添えの田畑大いに損害、碓ヶ関より蔵館までの間、村々にて家40軒余り流れる。西浜より湯治に来ていた夫婦共流失、弘前下町は近年覚えなき大水」。など記録によつては一樣ではありませんが、いずれにしても「近年覚えなき大水」であったことには違いありません。

③ 藩政後期の洪水(1772—1867)

この時期は、新田開発の振興期後半から完成期にあたり、歴代藩主は治水に力を注ぎ、事業は進展していました。しかし、この間95年うち、43年の洪水記録がみられ、中には3～4年と連続発生もあり、中期に次ぐ高い頻度となっています。

せっかく築いた堤防が破壊され、その復旧のため「まことに古來覚えなき大人夫」が動員されたこともありました。寛政10年(1798)には、復旧人夫として、広田組だけでも、1万5千人余の割当があり、その他各村々の割当も多く、この時の割当総人員は4万5千人にも及んだと伝えられています。また、この期間の一時期(天明、天保期)には、大

飢饉に見舞われていました。このため災害復旧の余力がなく放置されたままの状態であったので、洪水の度に被害が多く出ていたのかも知れません。

この時期になると「岩木川〇〇分の出水」とその水量を記録しているものや、内容についてもかなりくわしく記録されるようになりました。主なものとして次の洪水があげられます。

(イ) 安永8年(1779) 5月下旬よりの長雨で7月まで3回の洪水がありました。

岩木川、平川筋で被害、大罌22戸、蔵館15戸流失、溺死9人、所々の田畑で損害も多く、木造、五所川原新田地方でも被害。田川、藻川の堤防8ヵ所破れ往来が断たれた程で、百姓共が大いに難儀したといわれています。

(注、「6月6日領内大洪水、岩木川、平川その他の河川洪水、流死14人、流失破損家屋229軒、流失橋120ヵ所、田畑冠水多し。7月5日岩木川二重留3ヵ所破れる。大罌16軒流失、新田藻川堤防5ヵ所欠壊」とした記録もある)。

(ロ) 安永9年(1780) この年の被害状況については、前年(安永8年)と一部同様の記録もありますが、『津軽史事典』には「7月5日より大雨。岩木川、平川大洪水、城下の諸橋流失、死者4人、流失家屋31軒、潰家38軒、橋流失268ヵ所、田畑損耗大」と書かれています。いずれにしても、当時の人が「古来覚えなき大洪水で、往古の“白髪水、以来の洪水」と言ったとされる大洪水でした。

(ハ) 天明元年(1781) 正月25日大風雨、27日岩木川大洪水、五所川原新田の赤堀(現五所川原市田川)堤防2ヵ所、鶴ヶ岡1ヵ所及び木造新田地方でも堤防多く破損。この洪水で男女21人、馬176匹が溺死、家屋の流失も多く、その他、広田、飯詰、金木の各組でも大きな水害となりました。

また、天明年間には、2年～3年、5年～7年と連続洪水があり、それに2年からはじまった大凶作も重なって、まさに世相は暗い時代でした。

(ニ) 寛政9年(1797) 6月2日からの雨で、5日昼すぎから洪水、夕方から岩木川は10分の出水となり(注、「9分の出水」としているものもある)、所々の堤防が崩れ、弘前の各町では、家に水が押し上って命がけで逃げる者もあり、数十人の水死者も出ました。所によっては鴨居を越す程の大水で大小の橋はほとんど流されたので、下町と上町では2日間も往来が出来なくなるほど近年にない洪水といわれました。紺屋町では、橋を通ったところ俄かに水勢が強くなり、逃げようとしているうちに橋が流され2人死亡した。この状況は「不憐言語に絶す」と伝えられています。

また、新田地方一帯も大水害で、木造・広須新田の堤防35ヵ所、五所川原では、10ヵ所程欠壊し、一面水浸しとなり田畑や家屋の損害はもちろん、人馬の溺死も多く出ました。

藻川村などでは、屋根の上に1日半避難し、家の窓から船で往来して、ようやく食事をするような状態でした。木造新田地方の人たちは、山岸へ逃げたので死亡者は割に少なくて済みましたが、家屋や田畑には大きな被害が出ました。金木新田地方でも18ヵ所が水浸しとなり、一見海のように、船で往来したと伝えられています。また、この時は、十三湖水戸口も埋まってしまう状態でした。前代未聞の洪水といわれています。

(ホ) 寛政10年(1798) 6月4日よりの雨は、5日になってますます激しさを増して各河川が増水し、昨年に続き大洪水となりました。

弘前では橋々の流失、紺屋町・春日町あたりは床上4～5尺の浸水、樋口村領並びに誓願寺裏通りの岩木川堤防200～300間(360～540m)欠壊、そのため人馬の溺死が多く出ました。その他各方面にわたり大被害が発生しました。

この時の状況について、藩の役人が破損箇所を見分した際、樋口村の庄屋が「私祖父の話に、昔白髭水の節、の板付下まで水押し上りたるも床に上らず、故に如何なる洪水にでも決して立退きに及ばずのことであったが、今日の水は御覧の通り裏口まで水押ししたり」と述べた。また、清水三郎という人は、「宝曆9年、閏7月の出水は床下切りにて、今回は作業場に置いた白も外庭に流れたり」と話したことが記されています。(『岩木川物語』)

また、下流部の広須、木造、五所川原新田地方も堤防が欠壊し、せつかく穂がはらみ出したころの稲が水浸しなり、家や橋の流失、用水施設の破損などに被害がありました。

五所川原では、高瀬、鶴ヶ岡、藻川の堤防数十箇所破損、前年(寛政9年)よりも1尺もの増水、五所川原喰川あたりの道路は、2尺余りの深さで通行不能となりこれより下通りも同様な状況でした。

これらは一例で「6月に大雨、岩木川洪水、水高1丈3尺(約4.3m)城廓、町、被害甚大」や岩木川60年来の大洪水、死者5人、流潰家屋25軒、半壊57軒、橋流失293ヵ所、堤防欠壊865ヵ所、流し木流失8万9千石、田畑損耗1万7千3百石の被害」としている記録もあります。

藩は、この災害復旧のため4万5千人を動員しました。

(ヘ) 文化2年(1805) 6月5日大洪水。弘前の下町は残らず水押し上り水死者も出ました。

(ト) 文化8年(1811) 7月16日大雨洪水。岩木川9分、平川10分の出水で堤防決壊や、田畑水浸し、人馬の流死、新田地方の52ヵ村皆無作などの被害が出ました。

(チ) 天保元年(1830) 8月大雨、岩木川洪水。樋口村の堤防及び二階堰が決壊し弘前の下町通りのほかでも流失家屋が多く出て、死亡者39人。また、岩木川流末の村々が流失したほか、平川も大水にて所々破損しました。

このような状況から藩主も、「ことのほか心を痛め」色々な指図をしたといわれます。

俗にこの洪水は“下町流れ、”といわれています。

(9) 弘化元年(1844)7月8日、北西のはげしい風がだんだん雨となり、10日まで降り続き増水しました。

平川筋の碓ヶ関村湯の沢で山崩れがあり、谷が塞がれて大沼ができ、これが決壊して一時に流れ出し、急に大高水が襲ってきました。大鰐付近では、水が地上3間程も高く盛上がり、このため、大鰐、蔵館、小金崎などの村々では流失したり破壊された家屋は200軒にも及び、死者49名その他川沿いの村々でも田畑の損害など多くの被害がありました。

このときの被害状況は次のとおりです。

流失家	104軒	押破家	174軒	橋流失	110ヵ所	流死人	49人
怪我人	多数	街道欠崩	78箇所	並木松流失	161本	川欠	150ヶ所
田畑埋没	或いは川欠	225町、(但し藤崎まで)		山崩	6ヵ所	堰崩	56ヵ所
土蔵流失	3ヵ所	米流失	370俵2斗	馬流死	2匹	古着	200枚余
味噌	14樽	銭	1貫80匁、(1貫は銭20貫)				

また、このときは、平川筋の大氾濫だけではなく、大洪水となった河川は岩木川、浅瀬石川、金木川、薄市川、今泉川、相内川、六羽川など、流域全体の河川が平水にくらべて3m前後の水嵩があったと伝えられています。この大洪水でとくに被害をうけた村は大鰐で死者51人が出ました。藩が幕府に提出した被害届によると「流死57人、流壊家屋土蔵151軒、半壊家屋土蔵294軒、流失橋240ヵ所、破損橋608ヵ所、流失水門用水樋1万55ヵ所、半壊樋数409ヵ所、田畑損耗4割2分5厘、堤防決壊など数え切れないほどの被害内容である」という記録もあります。

この年に、弘前で江戸角力の興行がありましたが、喜多村監物久隆(1,200石、家老手付役)の息子の富弥(10余才)が、これを見物しようとして、家来に棧敷を買うよう申しつけました。父監物は、「この度の洪水で死亡した人、家を失った人も多く、人々は歎き悲しんでいる中で、監物の倅が角力見物などしているということは、これらの人々に済まないことであるから、やめるように」と言いきかせたところ、富弥もこれに従って取りやめにしたという。まことに殊勝な子供のことが記されています。(『岩木川物語』)

以上は、藩政期までの主な洪水とみられるものをあげましたが、勾配の急な弘前を中心とした地域と勾配の緩い下流域に大きな被害がみられます。

これ以外にも数々の記録があります。記録されない洪水もあったかも知れません。

記録によっては、同一年の洪水でもその内容が異なるものや、別な年になっているものもあります。いずれにしても洪水があったのは事実で、被害をもたらしていた事には間違いありません。その度に人々は苦しみ、あるいは災害復旧に動員されていました。

(注、月日は、すべて旧暦)

4) 明治、大正期の主な洪水

藩政初期からの新田開発政策によって、治水事業も進められてきましたが、所詮藩の力では、部分的な改修や、災害復旧程度で、流域住民は数知れない水害に悩まされてきました。

明治に入り、新政府は、各種行政の近代化政策を進め、治水事業においてもその重要性を認識し諸施策を講ずるようになりました。

しかし、明治期の岩木川は、ほとんど治水工事は行われず、調査のみに終始していたので、大雨の都度氾濫し被害を与えていました。

このため流域の人たちは、くり返し改修促進の陳情をしてきました。その結果、ようやく大正7年、国の直轄事業として改修工事が行われるようになったのです。

① 明治期の洪水(1868~1911)

この期間44年のうち28年が洪水で、中には4~5年と連続発生していることもあり、藩政期におとらず実に多くの記録がみられます。

主なものとしては、次の記録があります。

(イ) 明治11年(1878)この年は7~10月と連続の洪水で、大きな被害がありました。

7月16日からの雨は、1週間以上も続き、この間雷を伴った大雨があり、岩木川は大増水しました。このため橋が流失するなどの被害で弘前の浜の町では、船で往来したといわれています。

8月7日五所川原に行った人の話として、尻無川(旧十川)があふれ道路が水浸し、横漕(現鶴田町)より下流は大部分が水浸しであったと記されています。

五所川原付近と、西青女子(現弘前市)、東藤崎を通りでは、稲が大部分出穂して所々でスズメ追いをしている程の作況となっていたが、水浸しとなった所では出穂せず、高瀬、川山、藻川、鶴ヶ岡(いずれも現五所川原市)の村々

は、もっとも被害が甚しかったといわれています。

また、青森街道沿いの下十川（現浪岡町）、福島、福佐内、水木（いずれも現常盤村）、館越（現浪岡町）などでは十川の堤防が欠壊し、その水が夕顔関、牡丹森（いずれも現板柳町）、瀬良沢（現鶴田町）、中泉（現五所川原市）の村々まで達し、所によっては、田畑が残らず流失しました。

その他の川や堰なども壊れ、特に、五所川原堰が大破損したので、五幾形（現板柳町）より下流は一面の水浸しとなりました。年寄たちは“未曾有の大洪水、と言ったと伝えられています。

その後も9月28日の雨で浅瀬石川が洪水となり、付近の村々に浸水し死者3人、流失家屋2戸、浸水家屋多数の被害が出ました。

さらに、10月3日にも大雨がありました。川々が増水して尾崎村（現平賀町）では、死者2名、流失家屋2戸、ほかにも往来が止まるなどの洪水で、住民は難儀したと伝えられています。

(ロ) 明治18年（1885）この年の春、雪国の特殊な災害原因である融雪による大洪水がありました。

岩木川右岸、大巻（現鶴田町）の堤防が決壊したのでその水は、立っていた樹木を隣村の姥池（現五所川原市）まで押し流す程の勢いでした。このため、下流一带は海のような状況になり、五所川原の繁華街喰川町あたりは、船や筏で往来したといわれている。

また、藻川地区の堤防が決壊したため、三好村（現五所川原市）のほとんどの家屋が床上まで水が上り、せっかく田圃に運んだ堆肥も全部流されるなどの被害が出ました。十和田沼は、このとき出現したものとされています。

さらに、繁田村流木巻（現稲垣村）地内の堤防が650間（1,170m）決壊したため、西津軽地方の稲垣、館岡（現木造町）、車力の3ヵ村3,630町歩が水浸しになり、ここも一見海のようなようであったといわれています。

(ハ) 明治29年（1896）この年は、5月、7月、9月と洪水がありました。

5月には、車力村大字豊富地内の堤防180mが決壊したため、稲垣、館岡、車力の3ヵ所が、1,180町歩余に及ぶ被害がありました。

また、7月21日午後2時頃より盆を覆したような雨が降り、岩木川、平川、浅瀬石川が洪水になりました。大鰐付近平川の堤防が決壊し、奥羽本線の列車が運休するなどの被害がありました。

9月にも、4日から休みなく降り続いた雨で、特に土淵川は近年にない洪水となりました。徒町、川端町などはまるで水に包まれたようで、道路には、水が4尺も上り川沿いの家々は襖の引手まで水が押し上がったといわれています。

また、この年に、毎年のように十川の氾濫でおこる水害防止のため、小野忠造ら旧三好村の人たちは、8月末からわずか10日間で1,800間（3,240m）の堤防の大半を築きました。しかしこの堤防は、翌年3月県によって取りこわされています。いわゆる“私設堤防事件、です。

(ニ) 明治36年（1903）7月24日岩木川の大洪水で、稲垣村豊川地内の新堰水門破損や、堤防が250mも決壊したため、稲垣、館岡、車力の3ヵ村で3,864町歩に被害がありました。

また、このときは、津軽各地で被害があったらしく、「数日降り続いた雨で津軽4郡は橋流失7ヵ所、堤防破壊57ヵ所、道路決壊19ヵ所、水田冠水3,000町歩、家屋浸水1,000戸などの被害」としている記録もあります。

(ホ) 明治44年（1911）4月6日の豪雨で飯詰村（現五所川原市）の范ノ沢溜池が決壊し、飯詰村で家屋流失19戸、溺死4人が出るなど20年来の変事といわれた災害がありました。

また、岩木川も洪水となり西北津軽地方に大きな被害が出ました。

（注、范ノ沢溜池決壊を4月8日としている記録もある。また『岩木川物語』の年表は、6月洪水としている）

② 大正期の洪水（1912～1926）

明治期までの岩木川治水事業は、統一された計画に基づいたものではなかったので、洪水になるといたる所で氾濫をくり返していました。

大正時代に入り、いよいよ国の直轄事業として開始されることになりました。

大正10年9月起工式が行われた当日の五所川原は空前の賑いであったといえますから、地域住民はいかにこれを待ち望んでいたかを物語っています。

しかし、この時代は、工事ははじまったばかりで、堤防などは完全なものでなかったので、度々水害が発生していました。



水びたしの北辰高等学校々舎

（明治40年代初期、五所川原町）

【ふるさとのあゆみ 五所川原】津軽書房

主なものとしては、次の洪水があります。

(イ) 大正2年(1913) 6月28日、全県下にわたった豪雨で、流失埋没したものや、濁水のため収穫が皆無になったものも多く出ました。

8月27日にも暴風雨があり、県下一円に大きな被害がありました。この時の降雨量は、2時間半で坪当たり(3.3㎡当たり)6斗4合(108リットル余)もあったとしている記録もあります。

また、三好村の災害記録には次のことが記されています。

「6月24日から降り続いた雨で、28日正午から大川及び十川が出水。夜になって十川堤防の種井村のしも端及び福井三番割付近以北部並びに、大川堤防は、藻川五ツ沼から越水。三去という所の堤防も決壊。」このようなことで、近來にない洪水となりました。

三好村の全水田500町歩がすべて冠水し、その期間が1週間以上の長きにわたり、水底にあった稲は、倒伏したり腐敗したりして、ほとんど収穫が見込めない状態で、数十年來の凶作となりました。

米に次ぐ作物、大豆も同様で、平年の半作以下にも及ばず村民は食べ物もなく、着る物とてなく村を去っていく者が多数出ました。三好村だけでなく、五所川原以北はすべてこのようであったといわれています。

この年は、歴史に特筆される大凶作で、餓死者はなかったものの娘の身売りなどがありました。

(ロ) 大正9年(1920) 8月9日以来の降雨のため県下各河川が増水し、特に岩木川、平川、浅瀬石川、馬淵川流域で大きな被害がありました。

また、このときは、青森県と岩手県を連絡する青岩橋の流失や、東北本線の不通もありました。

5) 昭和期の主な洪水

昭和に入ってから、戦争のため工事が停滞した一時期もありましたが、本・支川の河川改修をはじめ上流部にダム建設など、治水努力を続けてきた結果、その効果はあがってきました。

しかし、自然は、時々“稀有”の大雨を降らせ、“未曾有”の大洪水を発生させて計り知れない猛威を振るっています。この時代の記録も実に多く、いつか、どこかで発生しています。

昔から数え切れない程の水害で、水防に対する意識は、高くなっているものの、近年は、流域内の資産も増大しているため、水害は一向に減少しないばかりか災害時の被害額はむしろ大きくなっています。時には壊滅的な被害が出たこともありました。

① 終戦までの洪水(1927~1945)

この期間には、昭和6年、9年、16年、20年と凶作があり、特に9年は大凶作で農村では欠食児童、娘の身売りなどがあり、その生活は悲惨なものでした。

この窮乏から抜け出すため農家の二、三男は、新天地を求めて満洲(中国東北部)へ渡って行ったのです。

さらに、日中、太平洋戦争が拡大するに伴い、すべてが戦時体制下におかれ、兵員徴発、軍需産業への動員で働き手の不足はもち論、経済統制のため食糧をはじめ、諸物資の不足で苦難の時代でした。このような時期に幾度も水害が発生したのです。

主なものとしては、次の洪水があります。

(イ) 昭和7年(1932) この年は、春先から2ヶ月以上も雨が降らなかったため、水不足が生じ各地では、植え付けのできない田も出て渇水騒ぎが起きていました。

ところが、8月1日、九州方面を中心を持つ台風は、北東に向い、4日午後日本海中部へと進んできました。

この影響で本県一帯は、3日夜から雨が降り続き、4日の夜からは豪雨となり6日の午前5時頃まで続きました。このときの雨量は、弘前工業試験場の調査によると、5日午前から6日まで175mmにも達しています。

岩木川流域の各河川は増水し、中でも浅瀬石川が増水がひどく、藤崎町地内の五所川原堰取水口上流堤防が決壊したため、濁水は一帯に広がり、五所川原町ではほとんどの町内が水浸しとなりました。

また、中川、三好村(現五所川原市)地内の十川堤防も数ヶ所欠壊したため、両村はじめ付近一帯は冠水し、水の高さは稲の上3~4尺にも達しました。

朝になって、岩木川は減水しましたが、十川は減水せず、その差が6尺(1.8m)以上もあったので、旧藩時代からあった藻川の排水口が新堤防でふさがれ水が引かない状態となりました。これでは数十日間も滞水することになると三好村民は、堤防を切断したが、全部の退水には一週間ほど



三好村の水害
【ふるさとのあゆみ 五所川原】津軽書房

かかり、同村の水田のうち、皆無作が9割3分にも及び悲惨な状態となりました。

一方、西津軽地方の新堤防が築かれた地区では、洪水が押えられ水田を守り、治水工事の効果を発揮していましたが、車力、館岡、稲垣村などの下流では、堤防が出来ていなかったことと、逆流のため2千数百町歩が浸水しました。

このとき村の人たちは、川除村芦屋（現木造町）で、岩木川改修工事に使用していた巨大な掘削機械が、濁流の中に置き去りにされている姿や、樹木が激流に巻かれている状況を堤防の上から呆然と眺めていたといわれています。

また、このときの被害は、岩木川本川の中、下流域をはじめ、十川、浪岡川流域の各村々にわたり、その内訳は、浸水戸数4,880戸、倉庫貯蔵の払下米浸水610俵、水稻7割以下5割以上の被害反別3,105町歩余に及びました。

10月に入り、農林大臣は、北海道及び本県の水害状況を視察し、その際、被害の最もひどかった三好村の漢川で農村の陳情を受けました。その前後にも中央関係各官庁係官の視察があり、その結果内務省は、沖浦ダムや、飯詰川拡張工事を実施することにしたのです。

(ロ) 昭和10年（1935）この年は、春から順調な天候が続いていたため、昭和6年以来の打ち続く凶作からようやく抜け出せるものと豊作を期待していたところ、8月になって、県下を豪雨が襲い各河川が氾濫し、未曾有の水害が発生しました。

オホーツク海高気圧と南洋上の高気圧の谷を、不連続線を伴った幾つもの低気圧が通過し、東北地方の北部は、8月21日正午過ぎから雷を伴った雨になり次第に勢いを増してきました。

特に岩木川流域は、夜半から豪雨になりました。翌22日朝方には勢いがやや弱まったものの、午前5時過ぎに再び豪雨となり、23日の午前1時過ぎまで続きました。その後、雨は断続的でしたが、24日午前まで続き、青森測候所でまとめた、21日から24日までの県内各観測所の降雨量は、最も多い所で、十和田湖畔休屋の457.7mm、次に十和田村澤口の400.2mm、五戸369.5mmで、岩木川流域では、碓ヶ関333.7mm、黒石303.1mm、弘前298.6mm、五所川原290.6mm、板柳291.3mm、木造267.7mm、金木155.8mmと、同測候所開設以来の記録となりました。『東奥日報』によると、黒石地方では、「22日午前10時まで降った雨量は、坪当たり2石3斗で、時間から推せば、驚くべきものであった。」としています。

22日から河川の氾濫がはじまりました。その時の大鰐地方の状況を『東奥日報』は、「22日午前11時半頃平川が氾濫し正午迄には出水5尺余に及び上流から押流されて来る橋梁及薪材夥しく、河岸に住居する人は戦々競々たるものであった。蔵館大日堂前に通ずる中ノ橋、大鰐署前と湯ノ川原を連絡する月見橋は危険に瀕したので、大鰐署では遂に警鐘も打鳴して…」また、『岩木川物語』には22日午前、10時頃より本流及び支流平川、浅瀬石川、十川等増水し、午後5時頃には平川の増水により、碓ヶ関村久吉国道の橋梁流失し、更に同村に於て工事中の貯水池が決壊し、蔵館村、大鰐町の住家は床下浸水する有様となった……。と平川の出水のものすごさを伝えています。

以後、各地で続々と氾濫がはじまり、これまで記録に残されているものとしては、最大の水害となりました。

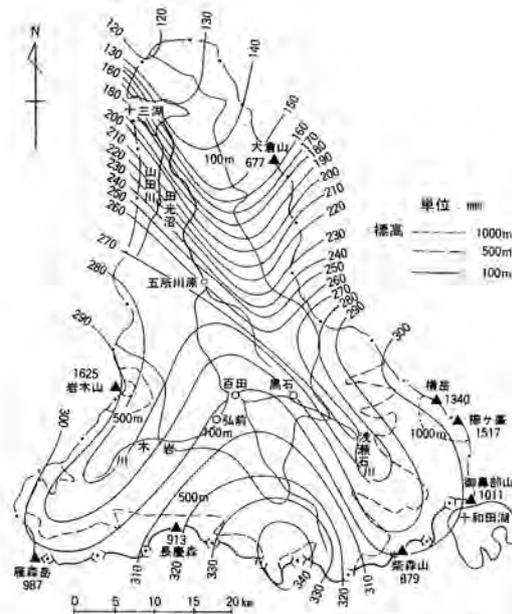


図4-3 昭和10年8月洪水の等雨量線図
(21日～24日)

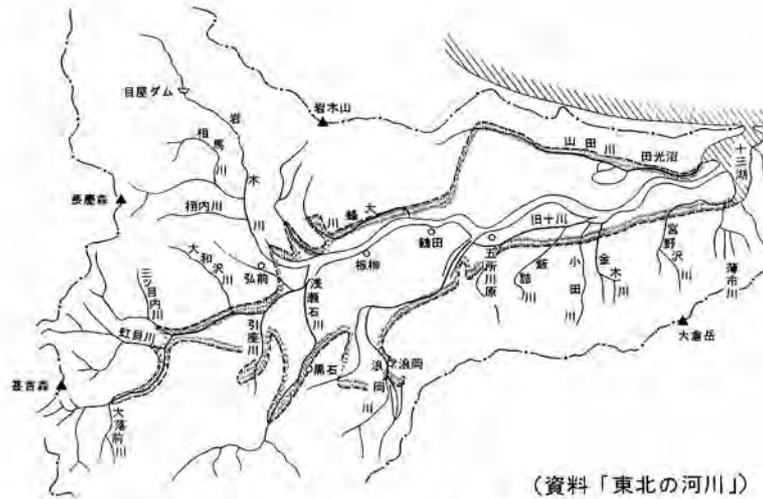


図4-4 昭和10年8月洪水の氾濫状況模式図

最も大きな惨状をきわめたのは、大鰐を中心とする町村で、『東奥日報』（23日夕刊）は、「大鰐家屋流失続出、死傷者数十名、阿鼻叫喚の惨事」として「23日午前1時頃になって、大鰐、蔵館は全部に浸水し、午前2時には大鰐付近の浸水6尺に達し家屋の流失するものが続出し（中略）町民は戦々兢兢としている。死傷者は50名以上の見込で電柱の倒れるもの、屋根の流れるもの等全く水地獄である。」と伝えています。

また、「木橋は全部流失」、「町は濁流の大河」、「溺れる母を抱へて屋根に掴まり漂流」などとその惨状を伝えていますが、この地区の被害を大きくした原因の1つには、23日午前零時半頃、平川流域の碓ヶ関、大鰐間に架設されていた橋が流され、それが相生橋に引っかかって川の流れを妨げて右岸堤防を破壊したことがあげられます。

表4-1 このときの大鰐町及び隣接町村の被害（『岩木川物語』より）

	大鰐町	石川町	蔵館村	碓ヶ関村	計
死者	男 9人 女 9人	—	—	—	18人
行方不明	女 2人	—	—	—	2人
家屋全壊	37戸	4戸	2戸	5戸	48戸
家屋半壊	71戸	35戸	10戸	4戸	120戸
家屋流失	33戸	10戸	5戸	4戸	52戸

その他各地の状況は次のとおりでした。

弘前市では「師団長官舎前の濠があふれ、公園入口の道路が氾濫し、弘前工業学校付近の道路も水浸しとなった。市内の新町、駒越町、馬屋町等の家屋に浸水した。他に土淵川、平川流域も田畑及び家屋に浸水した。」「東奥日報22日夕刊」



洪水の大鰐町（『東奥日報』）



箱詰のリンゴが流れる。新和村（現弘前市）

黒石地方では、浸水家屋が千数百戸となり、浪岡・女鹿沢地区の田畑、家屋も浸水し、追子野木（現黒石市）の部落民が尾上へ避難しました。また、南津軽郡～中津軽郡、弘前間の交通が途絶えるなどの被害がありました。

藤崎町白子では、五所川原堰取入れ口付近の堤防50間が欠壊し、リンゴ園は一带泥沼となりました。

23日夕方、板柳町では枝川冠水・五所川原両堰の洪水のため200戸が浸水し、ひどい所では、床上4尺位にもなりました。

また、午後6時頃、同町小幡、掛落林、灰沼付近の岩木川堤防から水が越しはじめたので、部落民が土俵を積んでようやく決壊を食い止めた程の大洪水でした。鶴田町の亀



北郡農会事務所に避難した五所川原の人たち



浸水の五所川原町、田町
（『ふるさとのあゆみ 五所川原』津軽書房）

ほとんど全町が水浸しとなりました。中には、ものすごい濁流で危険となり公共の建物や安全な場所へ避難したところも多くありました。

道路や鉄道も不通となったので船で往来するなど、各方面にわたり大混乱となりました。

三好村では、十川の堤防が決壊し、人々は新堤防に300頭の馬と共に避難しました。避難後5日が過ぎて水はようやく4尺ばかりの減水となりましたが、まだ窓下まで濁水が押し上っている状態で家が潰れ、食事も満足にできないなど惨憺たるものでした。水田の水が引いたのは、20日後であったといわれています。



水害におののく人たち（金木町大字蔦田）
（『ふるさとのあゆみ 北津軽』津軽書房）

田新田でも、24日朝になって50戸が窓から浸水し、全住民が避難するなど大騒ぎになりました。

翌25日の朝になっても、まだ水の深さはへそまでであったといわれています。

栄村（現五所川原市）各部落では、22日の出水以来247戸が床上浸水、水田430町歩のうち300町歩が2昼夜も浸水する状態でした。

また、松島村（同）も546戸のうち300戸、梅沢村（現鶴田町）は538戸のうち200戸、中川村（現五所川原市）は426戸のうち30戸が浸水しました。

五所川原町では、23日から続々浸水し始め、一部を除き



濁流に吞まれる民家、三好村藻川
（『ふるさとのあゆみ 五所川原』津軽書房）

23日、濁水は金木町神田橋上流より金木川へ逆流し、同町蔦田地区堤防よりあふれ出しました。地域住民必死の努力で決壊はまぬがれたものの1500町歩が冠水しました。岩木川左岸稲垣方面では、24日になって増水したため田畑一面が海となり、千年・繁田・沼崎の家屋が浸水しました。

また、23日午後7時豊川小学校付近の堤防が危険な状態となったので村民総出で警戒に当たり、ようやく事なきを得ましたが、同村の野末水門も危険になっていました。これもようやく喰い止めていたところ、24日午前ついに繁田付近の、堤防10間（18m）が決壊しました。村民必死の努力で午後3時ごろまでに復旧しましたが、田光沼方面より

の逆流が加わり1300町歩余の水田が浸水しました。

このほかにも被害は、流域内全市町村の各方面に及び大惨事となったのです。

五所川原警察署管内だけでも5日間の炊き出し配給人は、五所川原町32,120人、三好村6,800人、中川村2,580人、栄村5,500人、鶴田村2,250人、梅沢村2,350人、松島村9,000人に及びました。

内務省社会局の視察官が、「約10年間水害地を見たが、湛水の長びいた惨状は日本一だ」と言ったという程のすさまじい洪水でした。

この時の被害は、前記大鰐町を中心とした町村及び、各市町村を含めて死者20名、行方不明4名、負傷者181名のほか被害家屋や、浸水耕地は数え切れない程で未曾有の大被害でした。その洪水氾濫量は、約2億 m^3 といわれ、想定氾濫区域は、流域2,540 km^2 の約4分の1にあたる600 km^2 と考えられています。

このときの水害は、子供達の心にどう写っていたのでしょうか。（『昭和10年8月、青森県水害実記』東奥日報社編）から一部を紹介します。

●「22日の夜」大鰐小学校尋常五年 幸山 悟

「玉川ダシのトメが破れたそうダアッ」と叫ぶ消防手の声で不安な私達は、なお一層不安になった。もう午後10時をとくに過ぎた。間もなく警鐘の乱打が、おそろしく不気味にひびいて来た。30分ぐらいもたって、遂にトメも破れたと見えて、ずんずん水量が多くなった。

向い側の家では、皆、畳の上に水がいっぱいになったとって20人ばかり僕の家へ逃れて来た。大きい男の人達は5、6人で雨戸をさきえて、水が入るのを防いでくれた。けれども僕の家は右側を6mも離れず、平賀川が流れ、左は2筋に分れて水が流れているので、雨戸の少しのすきまからも皆水が入り、流木の雨戸にぶつかって行く音の大きいこと、音のする度に体がブルブルとする位だ。

奥の八畳間の方から「畳に水がついたぞオッ」といふ声がきこえて、直ぐ僕の立っていた前の畳のすきから、シューッと水が吹き出た。5分もたたぬうちに畳が浮き上ってきた。その時はもう地下室の階段が流されてしまっていた。そして僕と、弟や妹は、一番高い方の2階に移された。

家中きってのきかん坊な弟も真青な顔をして心配そうに目ばかりパチパチさせている。低い方の2階では、お祖母さんやお母さんが何かゴソゴソやっている。しばらくして「南無妙法蓮華経」と合掌している声がひくくきこえてきた。お母さん達は、僕達よりももっともっと心配しているのだ。早く水がひけてくれるように、僕達も3人で一生懸命神様をお願いした。けれども水はだんだん多くなるばかりだ。雨戸は流木のため破れ、とうとう皆流されてしまったとって若者が全部2階にあがってきた。窓をそとあけて覗いて見たら、相当高い醬油会社の土蔵の窓にゴウツと押し寄せる波は1mも高くなっている。

突然、バリバリッという大音響と共に直径60cm位もある大きな水道の鉄管がくずれ落ち、それと同時に青柳橋は音もなく流されてしまった。ひざがしらがガクガク震える。

さっきよりも、またまた水が増してきた。お祖母さんが細引を持って僕等の部屋にきた。お家が流される時は、その細引に皆を結へて一しょに流れ、一人もはぐれないようにする為だといった。

お祖母さんの目には涙が一ぱいたまっていた。けれども弟も妹も泣かなかった。「皆一しょに死のう」といっていた。

お母さんは、また佛様を拜んでいるらしく「南無妙法蓮華経」の音が、外の物凄しい音にまじって遠くなったり近くなったりして静かにきこえて来る。

2階の柱時計は、いつもとかわりない音で「ポーン」と1時を打った。

●「大水」鶴ヶ岡小学校尋常4年 川浪 イサ

降りに降った雨は、旧7月23日の晩から24日まで降り通しました。おとうさんは、「今夜は大水だ」といってとこにつきました。

夜12時頃「大水だ、俵をもって出ろ」といふ人の叫び声やら、半しょうの音やら大きわざになりました。おとうさんは、はねおきて俵をもって、土手のきれのをふせぎに行きました。私たちは心配して夜が明けるのをまっています。

夜があけてから、新土手に水を見に行きますと、人が大ぜい集って「この水なら昭和7年度の水より大きいな」といっています。

俵を運ぶ者もあれば、飯を運ぶ者もあれば、皆一生けんめいになってふせぎましたが、午後6時頃おとうさんは、「土手がきれい」といって顔色をかえて帰って来ました。それから皆で家の中をかたづけました。そしているうちに日がくれてしまいました。

おとうさんは、「今夜水が来るから気をつけろ」といってねました。

26日の朝1時頃「大水だ早く家をかたづけろ」というおとうさんのこえで目がさめました。おきてみると家の庭に水が一ぱいになっていました。水は見る間にずんずんとよけいになって、ゆかの上にあがりました。「もう橋がこわれて出られなくなるから早く出る」とおとうさんはさけびましたので、いそいで出ようとしたが橋がこわれて出られなくなりました。それでおとうさんのおぶって、おじいさんが先になって道をしらべしらべして、やっと土手にげました。

あとにおとうさんとおかあさんがのこってたくをしましたが、とてもはこぼれなくなって私たちの本や、つけものまで皆流してしまいました。

夜が明けて見わたせば、あの広い田んぼは海のようになっていました。それから本家にとまりに行きましたが、本家にも水がつきそうになったので、まやのまぎに行って3日ばかりくらしました。(注、まやのまぎ…馬小屋の上に馬ぐさや藁などを置いた二階のような所。村の若者たちのたまり場としても使用されていた。また、馬小屋は大ていの農家では、母屋の一部にあった)

それから少し水が下りぎみになったので家へ来て見ると、家にも蔵にも入ることが出来ないので土手ぎは(堤防のかたわら)にのま小屋(苫小屋)を立て村から御飯をもらって食べて居ました。

小屋に居る間も、妹や弟の泣き叫ぶこえや、おじいさん、おばあさんのくどきにどうしていいかわかりませんでした。四方から水見舞をいただいて、今までやっとくらしました。ありがたいもので東本願寺からも御見舞をいただきました。

だんだん水が下って家にも行くことが出来るようになりました。家へ入って見ますと、さまざまなのがこわれ、やさいはみんなしんでしまい、何もありません。

今、家のこわれた所をこしらえています。たんぼへ出て見れば、いねはくさってしまい、しだもとられなくなったといって大くどきです。(注、しだ…完全に実が入らない稲穂のこと。くどき…愚痴、なげくこと。)

おじいさんは、どんなに心配していたのだろう。毎晩のようにねごとをします。

土手を歩く人々も、口々に「これからどうしてくだらう」というくどきばかりです。私たちもこれからしんぼうしなければならぬと思います。

●「水がいがい」 嘉瀬小学校尋常4年 木立 忠

ぼんのうちは、風がふいて村の人はみんなこまったといっていました。

ぼんがすぎてからは、風がやんで大そうあつくなりました。それからある晩にいなびかりが光り出して大雨になりました。一晩ふってその次の日もまたふりつづいた。その日は外へ出られなかった。

晩方半鐘がなった。僕はあのかねの音が大きらいだ。かねの音は、なかなかやまない。外をあるく人たちはみな「なんぼこまったば」といいます。それから少しすると「あそこの土手もきれた、ここの土手もきれた」といっている間に田んぼ一ぱい海のようになってしまった。

僕は、農家の子どもだから田んぼをまわってあるくたび、稲をなでて見ていた。あの青々としていた田んぼが一日のうちにいかってしまったのだ。(いかって…冠水してしまった)僕のうちの田も1町歩くぐった。(冠水した)くぐらない田は、4段(反)あるばかりで、冬食ふ米をこしらえるに、なかなかむづかしい。

農家は、こういうことがないとよいが、こんなことがあるからいけないのです。僕のうちでは冬に食ふ米がないといつてくどいています。

このほかにもたくさんの子供達が、必死になって逃げまわった人のことや、泣きながら跡片付けをしていた姿など記しています。

(イ) 昭和18年(1943)8月13日午後6時頃から、金木町一帯に山容が一変する程の集中豪雨があり、金木川沿えの同町下町一帯は、みるみるうちに泥水が床上に上がり甚だしい所では、二階まで上がるという大洪水となりました。

山から丸太や、根付きの原木が流れ出し、それが下流の家をつき破ってまた流れたり、また橋に引っかかり流れを妨げたため、付近一帯は泥水の海と化し、言語に絶する状況となりました。

損害は、金木、喜良市に集中し、建物、耕地ばかりでなく牛馬の溺死、その他にも及びその損害額は、当時でさえ数億円に達したといわれています。

この集中豪雨により、上流の相ノ沢溜池が破壊したので、被害を一層大きくしたのです。

表 4-2 昭和10年 8月洪水五所川原下流水位

年 月 日	時間	水 位(m)		年 月 日	時間	水 位(m)		年 月 日	時間	水 位(m)		
		五所川原	繁田			五所川原	繁田			五所川原	繁田	
昭和10. 8. 22	11	2.32	—		19	4.79	6.00		3	3.60	6.05	
	12	2.59	—		20	4.70	5.95		4	3.52	6.01	
	13	2.90	—		21	4.60	5.90		5	3.42	5.96	
	14	3.10	—		22	4.51	5.86		6	3.33	5.96	
	15	3.30	—		23	4.45	5.81		7	3.24	5.88	
	16	3.45	—		24	4.43	5.78		8	3.16	5.85	
	17	3.55	—		昭和10. 8. 24	1	4.46		5.74	9	3.08	5.80
	18	3.70	—			2	4.45		5.71	10	3.03	5.75
昭和10. 8. 23	19	3.80	3.84		3	4.48	5.71		11	2.98	5.71	
	20	3.93	4.18		4	4.51	5.73		12	2.87	5.66	
	21	4.07	4.36		5	4.55	5.75		13	2.81	5.62	
	22	4.19	4.50		6	4.63	5.79		14	2.76	5.56	
	23	4.32	4.69		7	4.66	5.84		15	2.72	5.53	
	24	4.47	4.85		8	4.68	5.88		16	2.67	5.48	
	1	4.61	5.06		9	4.72	5.92		17	2.62	5.44	
	2	4.72	5.27		10	4.68	5.95		18	2.58	5.40	
	3	4.81	5.44		11	4.68	6.00		19	2.54	5.35	
	4	4.90	5.54		12	4.66	6.03		20	2.50	5.30	
	5	4.96	5.61		13	4.62	6.05		昭和10. 8. 26	21	—	5.27
	6	5.01	5.68		14	4.58	6.09			22	—	5.22
	7	5.08	5.73		15	4.54	6.12		23	—	5.16	
	8	5.11	5.81		16	4.49	6.13		24	—	5.12	
	9	5.17	5.88		17	4.42	6.13		1	—	5.07	
	10	5.21	5.95		18	4.38	6.15		2	—	5.03	
	11	5.22	6.03		19	4.31	6.14		3	—	4.99	
	12	5.22	6.12		20	4.23	6.13		4	—	4.95	
13	5.21	6.20	21	4.15	6.12	5	—	4.91				
14	5.15	6.25	22	4.07	6.12	6	—	4.89				
15	5.09	6.25	23	3.98	6.12	7	—	4.86				
16	5.02	6.25	24	3.83	6.11	8	—	4.82				
17	4.95	6.10	昭和10. 8. 25	1	3.77	6.09	9	—	4.78			
18	4.90	6.05		2	3.68	6.07	10	—	4.75			

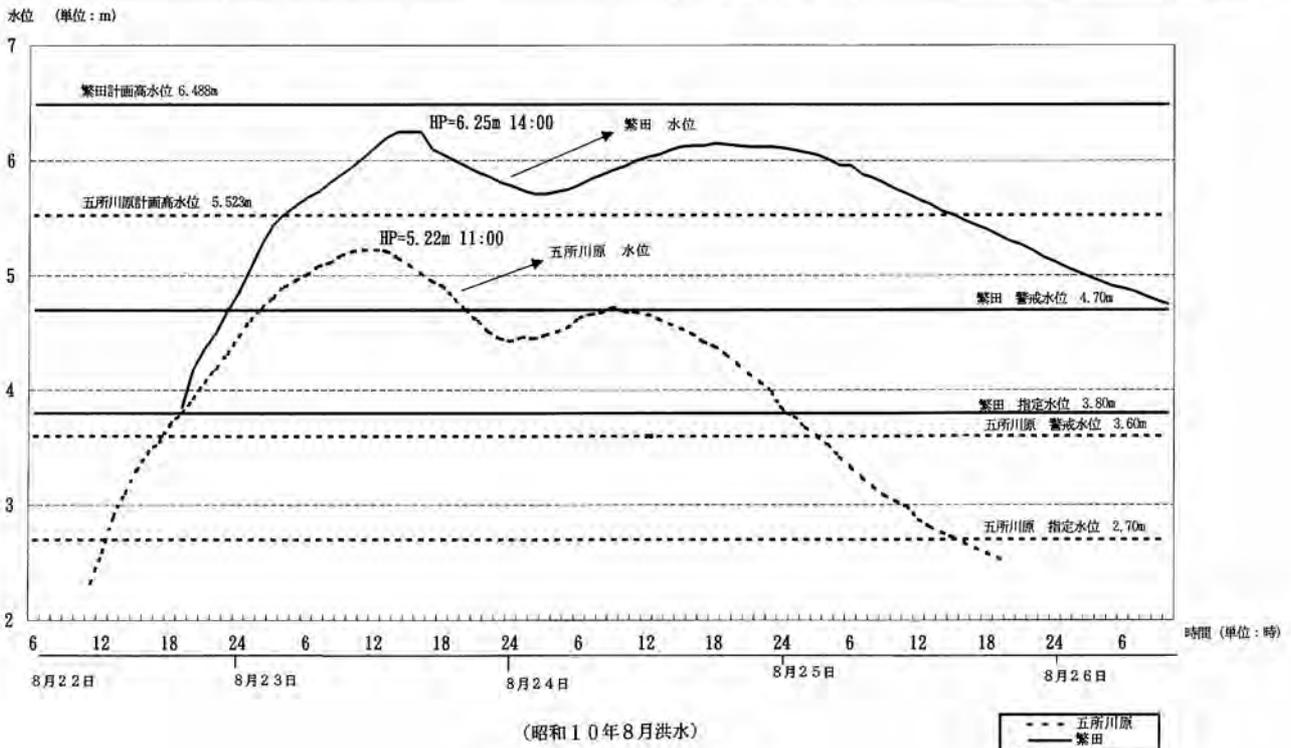


図 4-5 水位時間曲線図

② 戦後の洪水 (1946～1988)

昭和20年8月、長かった戦争が敗戦という結果で終わり、人々は抑制された暗い時代から開放され、平和で豊かな生活造りに励んできました。

昭和30年代からはじまった我が国の高度経済成長は、開発ムードを盛んにし、岩木川流域もいちじるしく変貌しました。

一方治水事業は、戦時中は停滞していましたが、ただちに再開され、以後、本支川の改修をはじめダム建設など、着々整備促進をしてきました。

しかし、この時代も実に多く洪水が発生しています。中には未曾有といわれた昭和10年を上回る水害もありました。天は時々大きな試練を与えるのです。

主なものとしては、次の洪水があります。

(イ) 昭和33年 (1958) この年は、7月から9月まで連続5回の水害でその被害は、昭和10年を上回る大惨事となりました。

表4-3 昭和33年の洪水被害 (単位：万円)

月	7月下旬	8月中旬	9月上旬	9月中旬	9月下旬
被害額	4億7千	22億146百	1億5千4百	27億8千3百	56億8千8百

(資料『岩木川物語』)

㊦ 7月災害。台風11号が過ぎた後に、奥羽中南部の停滞前線が再び活動を始め、本県まで張り出してきたので、7月19日頃から断続的な降雨となっていました。さらに、26日から27日にかけて、中国東北部に発達した低気圧が東進して前線が活動し、28日午後9時頃から29日夜明けにかけて激しい降雨になりました。日中は、一時小降りになっていましたが、日本海北部に小低気圧が現われて、また前線の活動が激しくなり、29日再び強雨となりました。

29日までの3日間に、八甲田の135mmをはじめ、朝日奈岳(子田町)134mm、毛無岳(黒石市)98mm、四兵衛森(西目屋村)62mmの降雨量を示し、主として馬淵川水系及び岩木川水系の平川、浅瀬石川、十川の流域を中心に豪雨に見舞われ被害が出ました。

㊧ 8月災害。太平洋南方の低気圧と、シベリヤ、中国東北部方面の冷たい大陸高気圧による前線が、日本海を北東から南西にかけて停滞していました。この前線は、8月11日、朝から中弘、西北地方に雷を伴った豪雨を降らせ、13日9時まで四兵衛森の378mmを最高に、西目屋308mm、鱒ヶ沢133mm、深浦83mmと各所とも短時間に記録的な降雨量を示しました。

特に、岩木川上流の四兵衛森方面では、12日午前1時から5時までのわずか4時間に、150mmという局地的な豪雨となり、岩木川、中村川、大童子川等の各河川は急激に増水しました。そのため、至るところで決壊や氾濫が起り、道路の決壊や橋の流失、耕地の冠水、住家の全壊など、中弘・西津軽郡を中心に大きな被害が出ました。

その後、停滞前線は一時的に衰弱して南下しましたが、気圧の谷が近づくとつれ、また活発になって北上し、さらに、波動性低気圧が接近したので、18日朝から大雨となりました。

低気圧の接近に伴い雨の勢いが増し、18日・19日の2日間に佐井村172mmを最高に、岩木川流域の四兵衛森では158mmの降雨量で、岩木川はまたも氾濫して、大きな被害が発生しました。

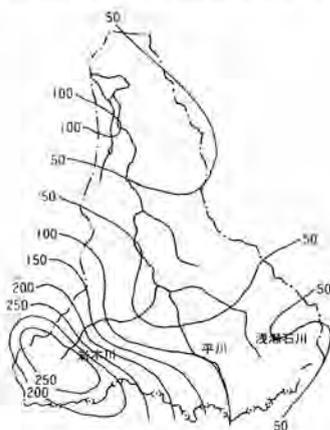


図4-6 昭和33年8月洪水の等雨量線図



(資料『昭和62年度岩木川総合治水計画検討報告書』)

図4-7 昭和33年8月洪水浸水実績模式図

表4-4 昭和33年8月洪水の被災状況及び最高水位表

河川名	観測所名	零点高	指定水位	警戒水位	計高水位 ^画 m	最高水位m
岩木川	五所川原	4.896	2.70	3.60	5.523	4.87
〃	出 精	0.0	5.80	6.80	8.646	7.88
〃	繁 田	0.0	3.80	4.70	6.627	5.71
〃	上長泥	0.0	2.90	3.80	5.164	4.86

(資料『岩木川洪水記録』S33.8.12・13)

表4-5 被災状況

人的被害 (人)	死者・行方不明	負傷者	罹災者
	7	296	11,421

家屋被害 (戸)	全 壊	半 壊	流 失	床上浸水	床下浸水
	21	96	76	1,759	5,316

排地被害 (ha)	水 田		畑	
	流失埋没	冠 水	流失埋没	冠 水
	5,007	1,134	307	967

(資料 「昭和62年度岩木川総合治水計画検討報告書」)



弘前市内を濁流となって流れる岩木川

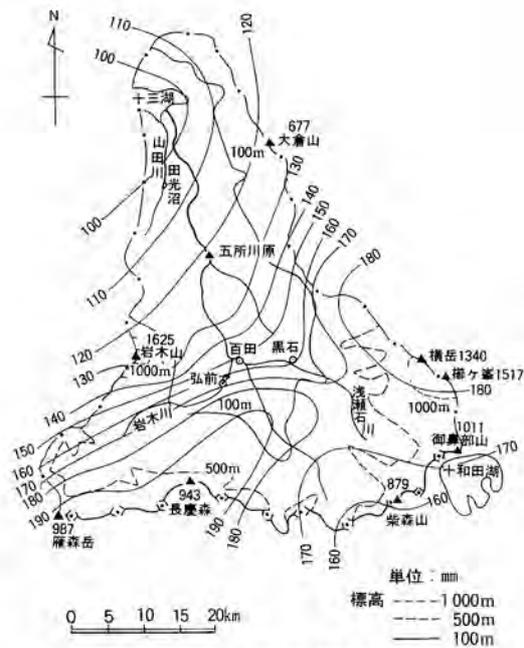
◎ 9月災害。7月、8月の豪雨で、その被害額は27億円にも達し、復旧の方途も定まっていない9月5日朝方から7日にかけて、日本海中部にあった低気圧の東進により、またまた県下は豪雨に見舞われ、四兵衛森の158mmを最高に、八甲田152mm、深浦109mm、朝日奈岳（馬淵川上流）と青森94mm、田名部79mmの降雨量を記録し、各地に大きな被害をもたらしました。

この低気圧は、6日午前中に北海道西岸より太平洋に抜け、一時雨は止みましたが、南西に伸びていた前線は、対馬海峡を通り熱帯性低気圧となったため速度が速まり、7日再び降雨となりました。

打ち続く洪水氾濫で、人々が呆然としているところへ台風21号が接近し、9月17日午後4時ごろから全県下は豪雨となりました。

翌18日午前から風を伴った雨は、午後6時まで三笠山（碓ヶ関村）の182mmを最高に、舟打鉾山（相馬村）175mm、上北鉾山166mm、弘前159mm、八戸155mm、青森152mm、田名部107mm、四兵衛森124mm、と西海岸地方を除いて記録的な降雨量を示しました。

午後4時過ぎ、台風が八戸沖合を通り、北海道南東洋上に達して、ようやく小降りになりましたが、県内各河川は刻々増水して氾濫のはじまり、災害を一層大きくしました。特に被害の大きかったのは、青森市、弘前市、八戸市ほか8町村で、この地区には災害救助法が発動され、青森市、浪岡町、常盤村には知事の要請により、青森陸上自衛隊が出動する程の大水害となりました。



(資料「東北の河川」)

図4-8 昭和33年9月洪水の等雨量線図(17日～19日)



土のう積で越水を防いだ岩木川右岸堤防(上長泥)

さらに、台風21号通過後の9月22日に高気圧が北東に進み、本州南方洋上にあった前線が北上し、23日・24日にか
 かなりの降雨がありました。

その後、台風22号が本州に接近した26日晚から、青森県は暴風雨圏内に入り、翌27日夜にかけて最大瞬間風速は八
 戸38m、田名部33m、深浦32m、青森28m、平均20～25mの暴風を伴った豪雨となり、降水量は26日9時から28日9
 時まで、上北鉾山323mmを最高に、千曳249mm、八甲田247mm、八戸165mm、田名部137mm、青森101mm、弘前76mmを記録
 しました。

県下各地では、7月以降5度目の大水害となり、収穫期を控えたリンゴの落果、交通機関の大混乱など、その被害
 は各方面にわたり大災害となりました。



(資料「昭和62年度岩木川
 総合治水計画検討報告書」)

図4-9 昭和33年9月
 洪水浸水実績模式図

表4-6 昭和33年9月洪水の最高水位表 (単位:m)

河川名	観測所名	零点高	指 定 水 位	警 戒 水 位	計 画 高 水位	最 高 水 位
岩木川	幡竜橋	0.0	14.10	15.00	16.722	16.80
〃	五所川原	4.896	2.70	3.60	5.523	5.33
〃	出 精	0.0	5.80	6.80	8.646	8.44
〃	繁 田	0.0	3.80	4.70	6.627	6.30
〃	上長泥	0.0	2.90	3.80	5.164	5.24
平 川	百 田	17.00	2.50	3.40	5.037	4.67

(S33.9.19～21「東北の河川」)

表 4-7 昭和33年 9 月洪水の被災状況

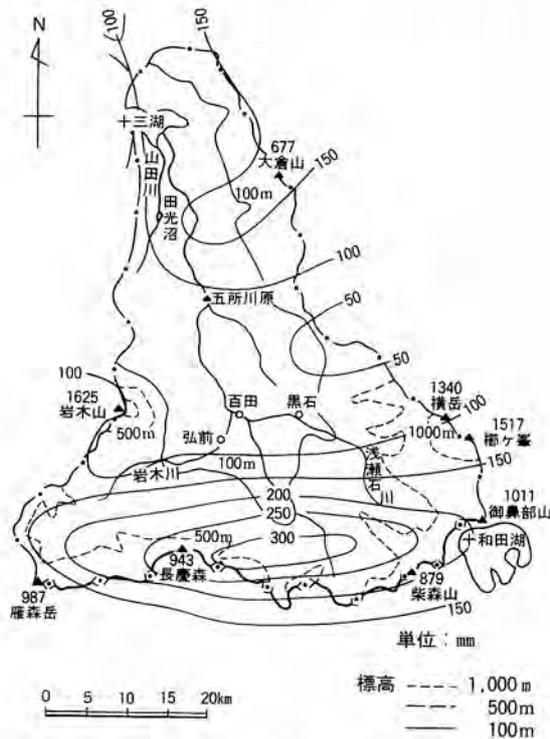
人的被害 (人)	死 者		行方不明		負 傷 者	
	1		12		不明	
家屋被害 (戸)	全壊	半壊	流失	床上浸水	床下浸水	非住家
	22	20	21	4,197	9,822	1,840
耕地被害 (ha)	田			畑		
	流失埋没		冠 水	流失埋没		冠 水
	9,592			2,846		



浪岡川の氾濫により水面下に没した橋梁

(ロ) 昭和35年(1960) 8月2日、千島北部に発生した低気圧から南に延びる前線が北日本を横断して、中国東部の低気圧と結ばれ、前線付近は雨の降りやすい気圧配置となっていたところを高温で湿潤な気団が入り込んだため、昼前から県下各地で雷を伴った雨となりました。

津軽地方は、2日から3日朝にかけて中南部と北部が局地的な豪雨となり、日雨量は、碓ヶ関321mm、早瀬野324mm、砂子瀬186mm、金木182mm。総雨量は、碓ヶ関で363mmという記録的な大雨となりました。



(資料「東北の河川」)

図 4-10 昭和35年 8 月洪水の等雨量線図 (2 日～3 日)

このため、岩木川水系の各河川が増水氾濫し、岩木川改修史上 3 番目の大洪水となりました。

被害は、碓ヶ関村、大鰐町、弘前市及び、金木町、中里町など一帯に広がり、とくに平川筋の碓ヶ関村、大鰐町では大きな被害をうけました。

また、奥羽本線碓ヶ関駅では山崩れのため客車が脱線転覆し、死者 2 名、重軽傷者 32 名を出す事故もあり、奥羽本線が不通になったほか、この時の被害は死者や、家屋、耕地、土木施設など広範囲にわたりました。



(資料「昭和62年度岩木川総合治水計画検討報告書」)

図4-11 昭和35年8月洪水浸水実績模式図

表4-8 昭和35年8月洪水の最高水位表

(単位：m)

河川名	観測所名	零点高	指定位	警戒水位	計画高水位	最高水位
岩木川	上岩木橋	—	—	—	—	42.63
〃	幡竜橋	0.0	14.10	15.00	16.722	16.52
〃	五所川原	4.896	2.70	3.60	5.523	5.15
〃	出精	0.0	5.80	6.80	8.646	8.06
〃	繁田	0.0	3.80	4.70	6.627	6.00
〃	上長泥	0.0	1.10	1.40	2.742	4.44
平川	百田	17.00	8.00	9.50	11.189	4.66

(S35. 8. 3・4 資料「東北の河川」)



避難をする人々 (大鰐町)



新聞の報道 (東奥日報)



無惨に寸断された軌道（大鰐町宿川原）

表 4-9 昭和35年 8 月洪水の被災状況

人的被害 (人)	死 者		行方不明		負傷者		被災者概数	
	15		2		48		27,730	
家屋被害 (戸)	全壊	半壊	流失	床上浸水	床下浸水	非住家		
	85	179	48	4,016	7,344	1,170		
排地被害 (ha)	水 田			畑				
	流失埋没		冠 水	流失埋没		冠 水		
	35		1,363	不明			65	
土木被害 (カ所)	道 路		橋 梁		堤 防		鉄 道	
	67		14		158		40	

い) 昭和50年(1975) この年は、8月6日、20日と2度にわたる記録的な集中豪雨で、大きな被害がありました。

① 8月5日、オホーツク海にあった低気圧は、津軽海峡付近を通り、日本海に延びていました。

また、発達した寒冷前線により、沿海州上空の寒気が北日本に接近してきたため、大気の層が不安定となり、雷雨の発生しやすい状況になっていました。青森地方気象台は、5日18時30分、注意報を発令しました。夜半から雷雨となって、場所によっては断続的な降雨になっていましたが、翌6日午前1時35分に、大雨警報が発令されたところから激しい豪雨となりました。

弘前市の、同日の3時から5時までの2時間の雨量は76mm(『弘前市災害概況報告書』)を記録し、黒石でも1日降水量の最大153mm、1時間降水量65mm(『青森県気象災害誌』)と津軽地方の中・南部に集中的に降り、大きな被害をもたらしました。中でも、中津軽郡岩木町は、岩木山蔵助沢の鉄砲水により一瞬のうちに百沢の民家が押し流され、22名の人命を失ったほか、怪我人、建物、諸施設などに大きな被害が出て局地災害としては、本県災害史上かつてない大惨事となりました。

この時の流域内の災害は、岩木町をはじめとして、弘前市、黒石市などに大きな爪跡を残しました。弘前市では、住家床上床下浸水772世帯、被災人員2,872人、土木関係施設15カ所、農作物被害面積320.8haなど被害額は8億8,854万円に達しました。(『弘前市災害概況報告書』)

一方黒石市では、6日6時までの降雨量は157mmに達し、このため浅瀬石川流域中野川の大川原橋が落ち、同橋下流黒森部落に接する堤防が決壊し、住家全壊1棟、半壊9棟、流失1棟、床上床下浸水2棟の被害が出ました。また、北部にある溜池が決壊したので、十川の氾濫となって、市内全域にわたって床上、床下浸水、1,475戸や、道路の欠陥などで大混乱が続きました。(黒石市『水魔の記録』)

この時の流域の被害状況は、死者行方不明22人、負傷者46人、住家全壊23棟、半壊23棟、床上浸水580棟、床下浸水2,782棟、水田流失・埋没、冠水840.8haとなっています。



⑥ 8月20日洪水

8月6日災害の傷あとがまだ生々しい状況下に、また大水害に見舞われました。

17日サハリン付近を通過した低気圧から、寒冷前線が、北海道北部から南西に延びていました。これが次第に南下して18日には津軽海峡付近で停滞していました。

一方、台風5号崩れの熱帯性低気圧が、19日には前線に乗り東進し、前線活動が活発となり、秋田県境付近で強い雨雲が停滞し、このため、20日早朝から津軽南部及び十和田湖付近に集中的な豪雨をもたらしました。

雨雲は一旦南下しましたが、再び県境付近に停滞し、県中央部では雷雨となりました。

降り始めから21日9時までの雨量は、浅瀬石川上流毛無山で263mmと最も多く、岩木川上流八方ヶ岳245mm、碓ヶ関194mm、大鰐230mm、休屋240mmと津軽南部から十和田湖周辺を中心とした地域に多く降りました。

この局地的な豪雨で、平川、浅瀬石川及び本川上流は急激に水位が上昇し、警戒水位を超える大出水となり、平川筋百田で計画高水位を数cm超える大出水となりました。また、本川の中・下流も警戒水位を大きく上回る出水となり、平川・浅瀬石川及び弘前市内を流れている土淵川等の各河川も氾濫して、6日の水害に引き続き弘前市、黒石市、中・南津軽郡を中心に大きな被害をもたらしました。

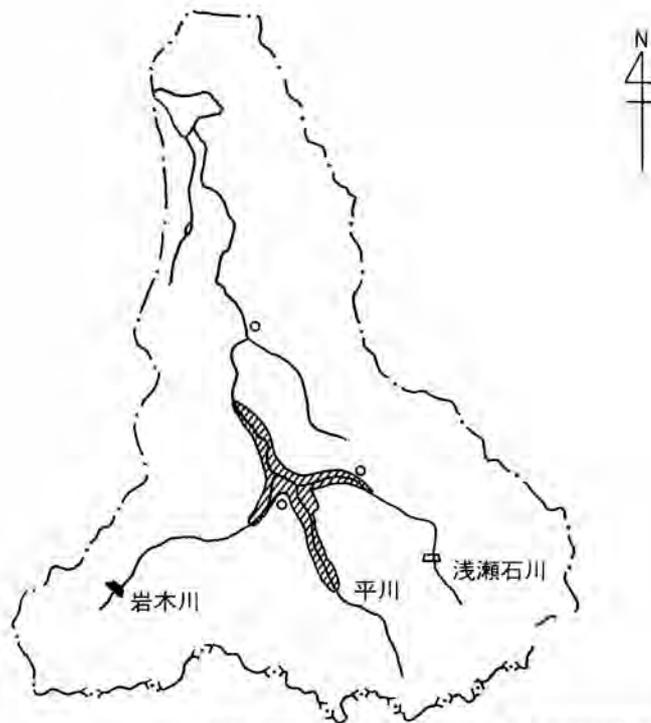


図4-12 昭和50年8月19日9時から
8月21日9時までの総降水量 (単位: mm)

表4-10 昭和50年8月洪水の最高水位表 (単位: m)

河川名	観測所名	零点高	指定水位	警戒水位	計画高水位	最高水位
岩木川	上岩木橋	0.135	41.20	42.10	44.80	43.41
〃	幡竜橋	-0.503	13.40	14.40	17.239	16.86
〃	五所川原	4.893	2.50	3.40	5.523	4.54
〃	繁田	0.145	3.80	4.70	6.479	5.86
〃	上長泥	-0.008	2.50	3.40	5.163	4.66
平川	百田	17.081	1.20	2.30	5.169	5.25

(S50. 8. 19~21 資料『東北の河川』)



(資料「昭和62年度岩木川総合治水計画検討報告書」)

図 4-13 昭和50年 8月洪水浸水実績模式図

表 4-11 気象情報等発令状況

月 日	時 刻	発 令 内 容	
8月19日	18 45	大雨に関する情報第1号	
8月20日	4 15	大雨、雷雨注意報発令	
	5 20	大雨警報に切替え、洪水注意報発令、雷雨注意報継続	
	6 20	大雨、洪水警報に切替え、雷雨注意報継続	
	8 20	大雨に関する情報第2号	
	8 30	水防警報第1号 上岩木橋—水防準備	
	9 05	水防警報第2号 平川橋—水防準備	
	9 50	大雨に関する情報第3号 水防警報第3号 上岩木橋～幡竜橋—水防出動	
	12 15	水防警報第5号 平川橋—水防情報	
	12 45	大雨警報、雷雨注意報解除、洪水警報継続	
	13 50	水防警報第6号 幡竜橋—水防出動	
			雷雨注意報発令、洪水警報継続
		20 10	大雨警報発令、洪水警報継続中
		22 40	大雨に関する情報第4号
	23 15	水防警報第8号 平川橋—水防情報	
8月21日	5 13	大雨警報解除、なお洪水警報継続中	
	13 30	洪水に関する情報第5号	
	19 20	洪水警報解除	
8月22日	15 30	大雨、雷雨注意報発令	
	17 30	大雨、洪水警報発令、雷雨注意報継続中	
	19 00	大雨、洪水に関する情報第1号	
	22 35	大雨、洪水に関する情報第2号	
8月23日	5 50	大雨、洪水注意報に切替え	
	10 20	大雨、洪水注意報に強風波浪注意報追加	
	11 50	台風6号に関する情報第1号	
	15 10	台風6号に関する情報第2号	
	15 30	暴風雨波浪警報発令、洪水警報継続中	
	22 50	台風6号に関する情報第3号	
8月24日	0 00	大雨、洪水、強風、波浪注意報に切替え	
	6 50	大雨、洪水、強風、波浪注意報は沿岸に対する波浪注意報に切替え	

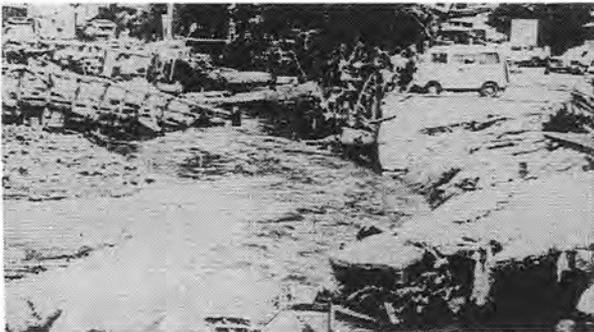
各地の被害状況は、次のとおりです。

○土淵川沿岸

土淵川・大和沢川等の市街地を流れる河川や用水堰が氾濫し、さらに上流部の溜池2ヵ所が決壊したため、下流では家屋35棟が全半壊または流出、3,800棟が浸水するなど、特に土淵川沿岸で大きな被害が出ました。



弘前市川端町の水害状況（土淵川）



土淵川中流沿岸の惨状（西川岸橋下流）（弘前市）



氾濫した土淵川

○浅瀬石川沿岸

浅瀬石川を中心に中小河川が氾濫しました。上流部の橋はすべて流失したほか、被害は沿岸一帯に及び、黒石温泉郷は一時孤立状態になりました。



濁流の浅瀬石川（黒石市温泉地区）



濁流の浅瀬石川（黒石市温湯地区）

○平川沿岸

流域の各支川が氾濫し、特に蔵館温泉街の近くを流れる鯖野沢川が国道7号線を伝わって氾濫し、一帯は浸水して沿岸の町村に大きな被害をもたらしました。

○黒石地区

8月6日の豪雨に続き、黒石市周辺では20日早朝から大雨となりました。特に八甲田系の豪雨で河川は急激に増水し、橋の流出や浸水等が続いておこり、緊急避難命令が出されました。さらに濁流は、道路等公共施設の損壊、耕地の流出、冠水等を引き起こし、ひどい状況になりました。

この時の黒石市の被害総額は、44億7,200万円を超えています。（資料黒石市）

平賀町の18日から20日までの被害額は、約17億8,800万円となっています。（資料平賀町）

また、他の浅瀬石川流域の町村にも多くの被害がありました。



濁流により崩壊した千歳橋（浅瀬石川）

表4-12 黒石市の被害

(1) 建物関係	1,134,750	千円
(2) 土木関係	217,100	
(3) 農林関係	2,960,484	
(4) 上水道関係	17,000	
(5) 温泉供給事業関係	7,000	
(6) 商工観光関係	133,934	
(7) 教育施設関係	1,929	
被害総額	4,472,197	千円



相馬川の濁流（相馬村紙漕沢）



弘前市川端町

○弘前地区

弘前地区は、20日朝から大雨となりました。平野部では、雨は6時過ぎに一時弱まりましたが、山地部で降り続いたため各河川は急激に増水して各所に被害が出始めました。

7時頃になって再び激しく降り、各地河川の氾濫、ため池の欠壊及び道路・建物等に被害が拡大しました。

土淵川流域の住民に対しては避難命令が出され、消防や自衛隊等が積極的な救助活動を行う程で、大混乱となりました。

この時の弘前市における被害総額は、約46億6千万円に達しています。被害状況は、軽傷者3名、住家の全壊流失33戸、半壊29戸、床上、床下浸水3,475戸、水稻被害533.4ha、リンゴ387.2ha、河川7カ所、道路63カ所、橋梁19カ所のほか、多くの被害が出ました。

表4-13 弘前市の被害総括表

項 目	面積等	被害金額 千円	項 目	面積等	被害金額 千円
建 物	4,362棟	1,036,850	土 木 関 係 施 設	89カ所	1,794,341
住 家	3,537棟	913,100	河 川	7カ所	1,376,222
非 住 家	825棟	123,750	道 路	63カ所	173,597
			橋 梁	19カ所	244,522
農林業関係施設		1,519,462			
農 地	126カ所	154,369	商工観光関係施設	—	68,898
田	112カ所	137,654	商工関係施設	—	62,985
畑	14カ所	16,715	観光関係施設	2カ所	5,913
農業用施設	252カ所	765,790	文教関係施設	8カ所	1,911
頭首工	7カ所	48,082	社会福祉関係施設	1カ所	5,000
水路	178カ所	597,068	生活環境関係施設	—	14,734
ため池	12カ所	42,444	下水道関係施設	—	9,909
橋 梁	5カ所	8,589	し尿処理施設	1カ所	2,866
道 路	49カ所	69,266	消 防 施 設	1カ所	1,959
揚 水 機	1カ所	341			
			運輸・通信関係施設	—	202,785
農 作 物	958.3ha	453,160	日本国有鉄道	—	143,506
水 稻	533.4ha	189,360	弘 南 鉄 道	—	31,219
りんご	387.7ha	249,850	電 気 関 係 施 設	—	28,060
平 畑	37.2ha	13,950			
			電気・水道・ガス関係施設	—	10,107
畜 産		7,103	電 力 施 設	—	5,840
家 畜	94頭	2,820	上水道・簡易水道施設	—	2,767
畜 舎	59棟	4,283	都 市 ガ ス 施 設	—	1,500
林 業		139,040	そ の 他 の 施 設 等	—	10,500
林 道	84カ所	139,040	合 計	—	4,664,588

(資料 弘前市)

表 4—15 最高水位表

河川名	観測所名	零点高	指定水位	警戒水位	計 画 高 水 位 m	最高水位m
岩木川	上岩木橋	0.135	40.40	41.60	44.80	43.41
〃	幡竜橋	-0.503	13.40	14.40	17.239	16.92
〃	五所川原	4.893	2.50	3.40	5.523	4.50
〃	繁田	0.145	3.80	4.70	6.479	6.30
〃	上長泥	-0.008	2.50	3.40	5.163	5.24
平川	百田	17.081	1.20	2.30	5.169	4.44

(資料「東北の河川」)

この豪雨により、岩木川、平川、浅瀬石川などの各河川は急激に増水し各地に被害をもたらしました。直轄管理区間では、破堤等の直接的な被害はありませんでしたが、岩木川下流部では、堤防すれすれまで水位が上昇し危険にさらされました。

弘前市では、土淵川支川、寺沢川上流に点在するため池が欠壊したため急激に増水し、死者、行方不明者9名が出たほか、その他建物、耕地、土木施設などに大きな被害があり大惨事となりました。

浅瀬石川流域の被害も大きく、黒石市では死者、行方不明者2名が出たほか、各方面にわたり大きな被害がありました。



(資料「昭和62年度岩木川総合治水計画検討報告書」)

図 4—15 昭和52年 8 月洪水浸水実績模式図

また、平地河川の十川及び浪岡川の各所で越水破堤があり、浪岡町では、町全体が水浸し、国道7号が交通止めになるなど大混乱となりました。この時の被害は、その他各市町村に及び、特に、中弘南黒地方が大きく、流域内の被害総額は、約235億3千万円にも達しました。

その中で最も大きいのは弘前市で、次いで浪岡町、黒石市、岩木町、平賀町、西目屋村、相馬村の順となっています。(表4-18参照)



土淵川の氾濫による弘前市の水害状況



後長根川の氾濫(岩木川)

気象通報発令状況

- 8月5日3時45分 大雨洪水豪雨注意報
- 8月5日5時35分 大雨洪水警報
- 8月5日6時55分 大雨情報
- 8月5日22時40分 洪水警報
- 8月6日16時00分 洪水注意報
- 8月7日11時30分 解除

表4-16 災害対策本部設置状況

設置団体	設置日時	廃止日時
青森県	8月5日 23時30分	不明
鯉ヶ沢町	8月5日 8時00分	〃
浪岡町	8月5日 8時30分	〃
弘前市	8月5日 8時30分	〃
平賀町	8月5日 9時10分	〃
藤崎町	8月5日 11時00分	〃
黒石市	8月5日 18時00分	〃
車力村	8月6日 9時30分	〃

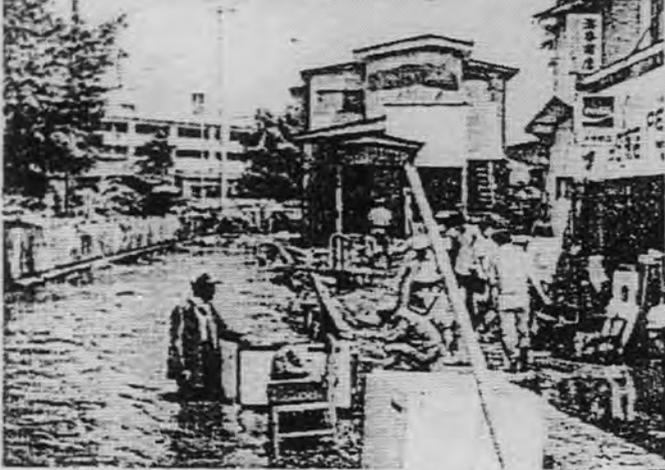
表4-17 災害救助法適用状況

市 町 村 名	適 用 法	適 用 日 時
弘 前 市	災 害 救 助 法	8月5日 23時30分
黒 石 市	〃	〃
滝 岡 町	〃	〃

(資料『青森県被害調査』S52.8.5の集中豪雨による被害)

河 北 新 報 昭和52年6月7日 (日曜)

隠れ河川大暴れ



一夜明け、勇れた家財道具の後片付けをする市民(弘前市津軽町)

津軽の集中豪雨

鉄砲水、一家押し流す

弘前 改修遅れが惨事招く

川のそばもうイヤ

被災者、力なく後片付け

【弘前】津軽川が暴れ、市内に浸水した。被災者は、家財道具の後片付けに力を使えず、涙を流している。市は、河川改修が遅れたことが、惨事招いたと見られる。



河川に押し流され、びくびくした乗用車(弘前市津軽町)

津軽川が暴れ、市内に浸水した。被災者は、家財道具の後片付けに力を使えず、涙を流している。市は、河川改修が遅れたことが、惨事招いたと見られる。

津軽川が暴れ、市内に浸水した。被災者は、家財道具の後片付けに力を使えず、涙を流している。市は、河川改修が遅れたことが、惨事招いたと見られる。

表4-18 一般被害一覧表(1/2)

水系名	岩木川	単位	弘前市	黒石市	五所川原市	木造町	森田村	柏村	稲垣村	車力村	岩木町	相馬村	西目屋村	藤崎町	大鰐町	
人的被害	死者	人	7													
	負傷者	人	20	7						1						
	行方不明	人	2	2												
家屋被害	全壊	戸		4												
	流失	戸		6												
	半壊	戸										2				
被害	床上浸水	戸	1,100	170	3	4	1		11		109	47		62	26	
	床下浸水	戸	2,200	836	152	48	18		138		131	129	40	356	91	
	非住宅被害	戸		555							126	65		310		
耕地被害	流失埋没	ha	1,935	1,708	338	376	5	93	1,770	907	548	229	122	820	566	
	冠水	ha														
	流失埋没	ha	268.2	66.5	45	274	10	153			58.5	31.7	1.9	183	5	
公共被害	冠水	ha														
	道路	箇所	99	87	27						51	6	35	1	13	
	橋梁	箇所	8	5							1		1	1		
公共被害	河川	箇所	181	12	45						6		13		7	
	環境衛生	箇所	178	7						1	1	1	2		1	
	水産商工	件	152	48												
被害	文教	枚	3	1												
	電信電話	回線														
	罹災者概数	人	13,200	4,205	620	208	76		596		960	712	160	1,672	468	
罹災世帯数	戸	3,300	1,018	155	52	19		149		240	178	40	418	117		

※本表は青森県消防防災課の資料による。(昭和52年8月7日15時現在)

ただし、公共被害の道路、橋梁、河川の弘前市、五所川原市分は昭和52年8月8日15時現在である。

※家屋被害の全壊流失および耕地被害の流失埋没・冠水の区別は、現在調査中である。

※公共被害の電信電話関係は、現在調査中である。

摘 要

表 4-18 一般被害一覽表 (2/2)

水系名	岩木川	單位	尾上町	浪岡町	平賀町	常盤村	田舎館村	碓ヶ関村	板柳町	金木町	中里町	鶴田町	市浦村	計
人的被害	死者	人												7
	負傷者	人		2										30
家屋被害	行方不明	人												4
	全壊	戸		3										7
	流失	戸		4										12
	半壊	戸												
耕地被害	床上浸水	戸	12	587	93	113	109		34	8	3			2,492
	床下浸水	戸	77	731	349	294	126		124	83	65	15		6,003
畑	非住宅被害	戸	9	769	147				4					1,985
	流失埋没	ha												
	水田冠水	ha	51	1,370	249	1,100	1,356	2	630	418	511	72		15,176
	冠水	ha	3.5	71.5	38.6	51	10		205			97.4		1,573.8
公共被害	道路	箇所		34	2				2	2	3			365
	橋梁	箇所		5										21
環境衛生	河川	箇所		52	11				6	11	12	6	20	382
	衛生	箇所	1	49	2		2		1	1				247
	水産	件		93	32									325
	文教	校			1									5
罹災者概数	罹災者	人	356	5,300	1,768	1,628	940		632	364	272	60		34,197
	世帯	戸	89	1,325	442	407	235		158	91	68	15		8,516
摘要														

6) 平成期の主な洪水

① 平成2年の洪水 平成に入ってから平成2年、平成3年、平成5年と出水が続いていますが、特に平成2年9月19日～21日の出水は台風を伴った大災害となったものです。

津軽地方を直撃した大型で強い台風19号は収穫直前のリンゴの大量落下、刈取り前の水稻の倒伏などの大きな被害をもたらしました。また停滞していた前線を刺激し流域の南西部を中心に大量の降水をもたらしました。

表4-19 日降水量表

水系名	河川名	観測所名	所属	種類	標高	19日	20日	総降水量	既往最大		既往最大		摘要
									日降水量		総降水量		
									年月日	降水量	年月日	降水量	
岩木川	虹貝川	早瀬野	建設省	テレメータ	130	83	31	114	S.35.8.2	316.2			
	大和川	深山沢	建設省	テレメータ	210	107	31	138	S.56.8.22	131.0			
	大蜂川	弥生	建設省	テレメータ	130	142	35	177	S.52.8.4	137.5			
	浪岡川	浪岡	建設省	テレメータ	25	68	24	92	S.56.8.22	122.0			
	岩木川	五所川原	建設省	テレメータ	9	73	22	95	S.43.8.11	172.8			
	浅瀬石川	浅瀬石川	建設省	テレメータ	130	72	28	100					
	岩木川	目屋	青森県	傍受	231	114	26	140					
	岩木川	八方	青森県	傍受	702	86	18	104					
	岩木川	弁天	青森県	傍受	742	108	24	132					

この豪雨により岩木川、平川、浅瀬石川などの各河川は近年に無い出水となり直轄管理施設のうち護岸20ヶ所延長404mに亘る被害を受けました。青森県全体でも土木関係、農林関係の被害が甚大で総計51億6千万円にも及びました。

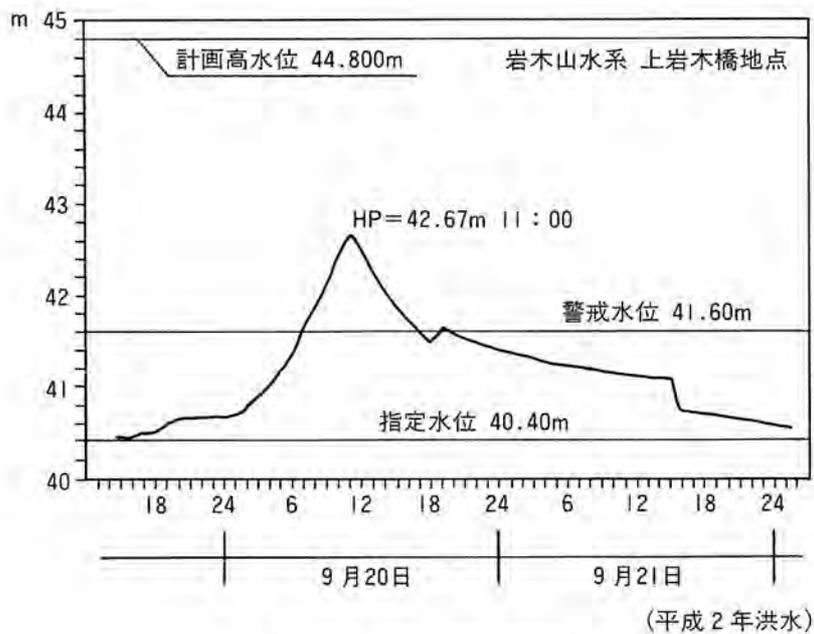


図4-16 水位時間曲線図

図 4-17 水位時間曲線図

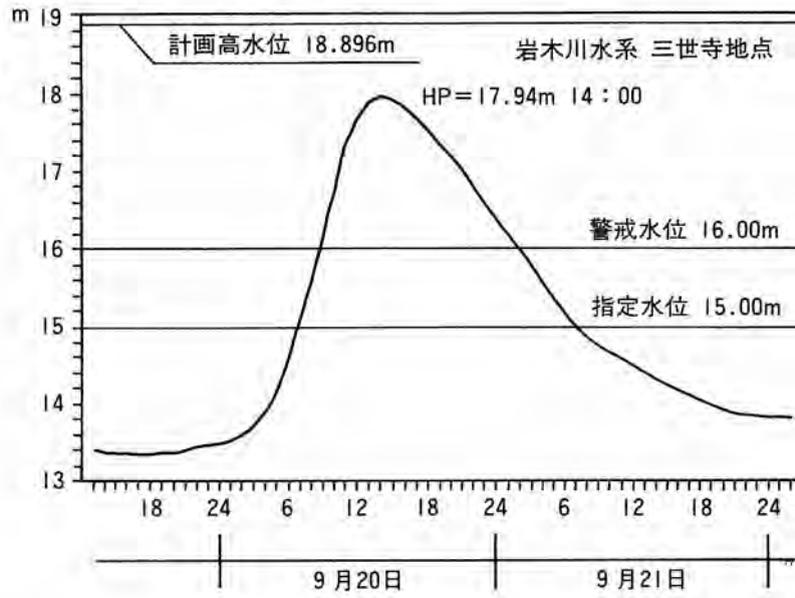


図 4-18 水位時間曲線図

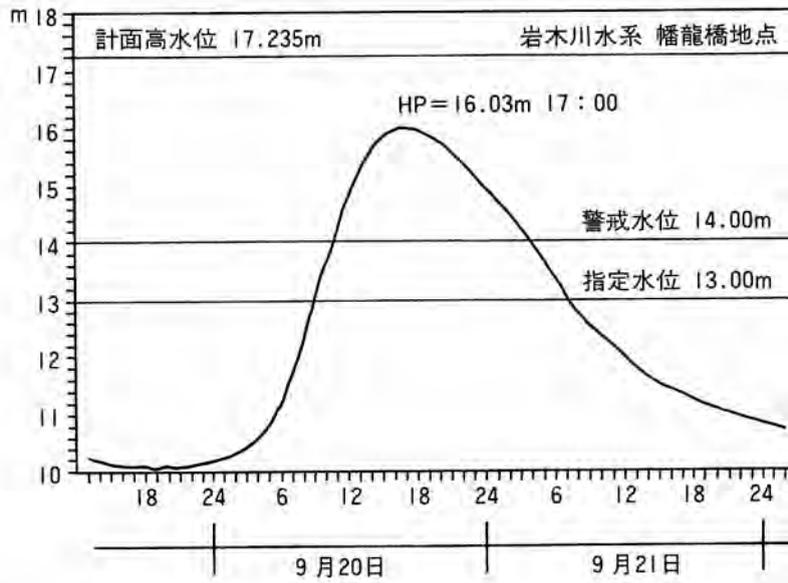


図 4-19 水位時間曲線図

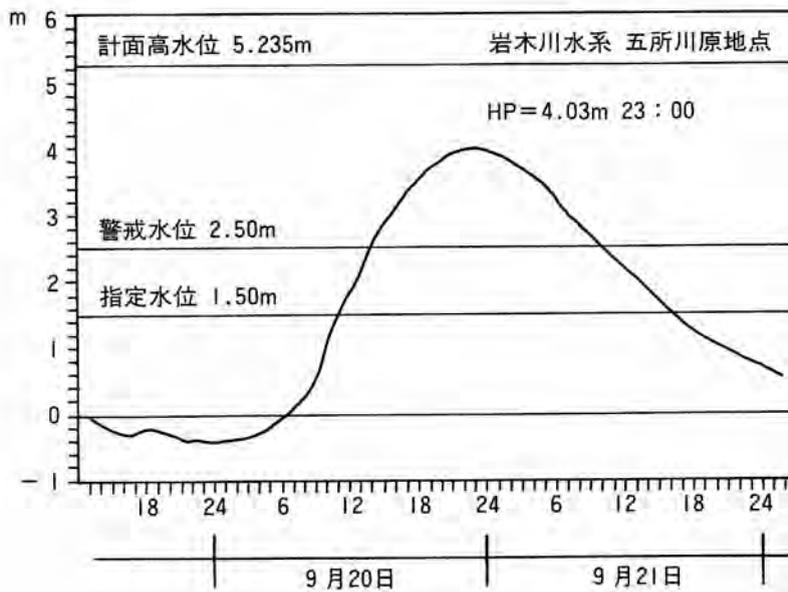


表4-20 水防活動状況一覧表

工 事 事務所	河川名	箇 所	日 時		水防を 行った 原 因	工 種	主要資材	人 員		効 果	摘 要
			開始	終了				出勤	作業		
青 森	岩木川	平川橋左 岸上流	9/20 16:00	18:00	漏 水	月の輪工	土のう	26	26	良	
		藤崎橋左 岸上流	9/20 13:00	15:00	法崩れ	土のう積	土のう	21	21	良	
		安東橋右 岸上流	9/20 不 明	不 明	漏 水	月の輪工	土のう	10	10	良	
		播龍橋右 岸下流	9/20 15:00	不 明	床 下 浸 水	避 難		6			
		川村排水 樋門	9/20 16:00	18:00	漏 水	月の輪工	土のう	60	60	良	
		鶴田第二 排水樋管	9/20 18:30	22:00	漏 水	土のう積	土のう	30	30	良	
		柏第一排 水樋管	9/20 18:00	不 明	内 水	内水排除	ポンプ	3	3	良	
		新津軽大 橋右下流	9/20 22:00	9/21 1:00	漏 水	月の輪工	土のう	15	15	良	
		No.94+200 左岸	9/21 3:00	5:00	漏 水	月の輪工	土のう	20	20	良	

表 4-21 昭和33年以降出水記録一覽表 (管理施設に被害のあったもののみ)

項目	昭和33 9/18~19	35 8/3~4	39 4/1~2	39 8/8~9	42 3/27~28	44 4/14~16	44 8/23~25	47 7/8~10	49 9/9~11	50 8/5~6	50 8/20	52 8/5~6	53 4/15~18	54 3/30~4/1	56 8/23	61 4/19~24	62 7/22~25	平成2 9/19~21	3 7/16~18	5 7/27~30	
出水	193.0 (砂子瀬) 5.33	363.4 (堤ヶ岡) 5.15	63.1 (砂子瀬) 5.52	214.5 (早瀬野) 4.37	44.8 (砂子瀬) 3.40	45.2 (早瀬野) 2.67	157.7 (大野) 3.66	210.0 (目屋) 4.65	157.0 (五所川原) 3.89	157.0 (黒石) 2.26	263.0 (毛無山) 4.54	343 (四兵衛森) 1.80m	37.0 (目屋) 2.23	66 (堤ヶ岡) 2.39	237 (八方岳) 3.78	46 (大野) 0.61	211 (八方岳) 0.76	177 (弥生) 4.03	131 (深山沢) 1.98	160 (八方岳) 2.50	
記録	1,664.09	1,552.4	819.79	898.7	625.9	574.8	958.8	1,310	932.8	506.1	1,667.2	1,757.31	観測なし	観測なし	1142	寒冷前線	梅雨前線	台風19号	梅雨前線	台風5号	
被害状況	護岸欠壊 2ヶ所 (増碁子) 法面崩落 1ヶ所 20m	溢水破堤 1ヶ所 70m	河岸欠壊 2ヶ所 420m	河岸欠壊 2ヶ所 500m	河岸欠壊 4ヶ所 804m	河岸欠壊 5ヶ所 960.3	河岸欠壊 3ヶ所 750m	破堤 2ヶ所 150m 堤防欠壊 2ヶ所 180m 護岸破損 10ヶ所 2422m	護岸欠壊 2ヶ所 540m 法面欠壊 11ヶ所 1351m	護岸欠壊 2ヶ所 450m 護岸欠壊 1ヶ所 200m	河岸欠壊 27ヶ所 3,783.4 護岸欠壊 4ヶ所 355m	海岸堤破損 50m 河岸欠壊 1ヶ所 18ヶ所 2,364m 法岸崩壊 2ヶ所 910m 漏水 300m	河岸欠壊 6ヶ所 1,180m	湖岸堤欠壊 3ヶ所 1080m 河岸欠壊 9ヶ所 1400m	河岸欠壊 2ヶ所 410m	河岸欠壊 5ヶ所 700m	河岸欠壊 1ヶ所 100m 護岸欠壊 20ヶ所 4040m	護岸欠壊 3ヶ所 600m	護岸欠壊 2ヶ所 220m		
死者・行方不明者 (人)	1	14								22	1	11			2						
負傷者 (人)	12	46								46	4	30			3						
罹災者概数 (人)	40,358	27,730						4,317		不明	16,771	34,197			5,650						
建物全壊 (戸)	16	33								22	17	7								1	
半壊 (戸)	21	100								33	34	12			38					3	
流失 (戸)	26	33		1							39	全壊を含む									
床上浸水 (戸)	2,548	2,700	49	72	22				249	467	4,778	2,492			240				93	1	23
床下浸水 (戸)	5,496	2,251	308	229	22				826	2,096	4,528	6,003			1,140				588	11	192
水田流失・埋没 (ha)	45.4	34.3								555.0	225	15,176			14.7				2,719.24	31.1	869.1
冠水 (ha)	8,052	1,363	471	162.2	15				640		29.9				1,180.2						
畑地流失・埋没 (ha)	24.6	不明								113.5	6	1,573.8			946.6				1,485.47	4.0	342.97
冠水 (ha)	1,358	64.4	217	730	25			325			55										
道路損壊 (ヶ所)	15	69	16	11				82		90	56	365			39				126		268
橋梁損壊 (ヶ所)	13	38	2	1				1		26	39	21									4
河川損壊 (ヶ所)	61	不明	94	9				378		138	6	382			140				259		379
非住家被害 (ヶ所)	1,053	22								272	442	1,985									
鉄道被害 (ヶ所)		40									2								39		

表4-22 市町村別被害状況（主なもの）

区分 市町村	死者 行方不明 (人)	負傷者 (人)	全流半 壊失壊 (戸)	住家 床上浸水 床下浸水 (戸)	耕地被害 (水田・畑・リンゴ) (ha)	河川 (カ所)	道路 (カ所)	橋梁 (カ所)	被害額 (千円)
弘前市	9	21	92	4,281	2,317.6	48	113	6	6,755,210
五所川原市				155	571	16	6		302,197
黒石市	2	7	10	1,005	1,705.6	36	58	1	3,267,950
木造町				52	651.5				119,896
森田村				19	15				5,275
柏村					246				61,739
稲垣村				149	1,770				81,800
車力村					907				109,521
岩木町				282	665.7	9	59	1	1,443,299
相馬村			2	170	289.1	23	24	1	1,020,716
西目屋村				40	126.5	42	43	1	1,121,174
藤崎町				418	1,003		4	1	159,269
大鰐町				117	111	7	14		340,342
尾上町				89	243.5	4	2		132,402
浪岡町		2	10	1,331	1,387	101	41	5	5,458,245
平賀町				469	967.6	39	25		1,332,971
常盤村				366	1,181			1	845,570
田舎館村				231	1,388				243,629
碓ヶ関村					42		2		2,500
板柳町				158	880	15	3		335,001
金木町				91	418	15	4		461,790
中里町				68	511	14	4		277,714
鶴田町				32	169.4				40,179
市浦村					10	20			206,880
計	11	30	114	9,531	17,576.5	389	403	16	23,525,269

(資料 青森県「被害調査」S52.8.10 9時現在) 集中豪雨による災害)

表4-23 過去の洪水の記録

●藩政期以前の洪水

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
平安時代	寛治元年	1087	白髪水と言われた山海の大津波。
南北朝時代	延元元年	1336	5月の大津波、十三港町衰退。
	興国元年	1340	8月大津波、藤崎以北全滅死者10万人、十三湖水戸口変形、商家千軒流壊、十三城壊滅。
室町時代	永享1年	1429	大津波にて転退の村あり。
	天文3年	1534	5月大洪水あり、引き続き3ヵ年間洪水あった。
	永禄10年	1567	6月大出水。
	元龜3年	1572	5月4日夜大雨、5月6日は天気だったが、大洪水で諸方の橋多く流出。

●藩政初期の洪水

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
織豊時代	文禄2年	1593	洪水。
	慶長2年	1597	堀越川(平川)洪水。
	〃 3年	1598	6月洪水。
	〃 6年	1601	9月17~19日大雨洪水、諸橋流失。
	〃 7年	1602	大風雨で諸方宮参りの者死傷あり。
江戸時代	〃 11年	1606	降雨打続き堀越川(平川、大和沢川)洪水、町屋まで床に水が上がり、材木類多数流失。
	〃 14年	1609	1月大鱈川筋洪水。
	〃 16年	1611	2月19~20日平川出水。
	寛永元年	1624	2月28日大雨下通り大水。
	〃 11年	1634	11月洪水。
	〃 16年	1639	7月5日雨降り8日までやまず、下の切原子より下の通り金木辺まで破損、田畑残らず泥になり転退に及ぶ。前代未聞の洪水。
	正保2年	1645	正月28日の雨で岩木川洪水、三世寺より下は水深7~8尺。
	慶安元年	1648	正月洪水、三世寺村下通り被害甚大。
	〃 2年	1649	8月16日より17日夜まで大雨洪水、死亡者もあり、大川筋の家多く流れる。
	承応2年	1653	今年洪水で土手町大橋流失。
江戸時代	万治3年	1660	7月14日より長雨、8、9月に至り、洪水甚し。閏8月20日洪水、土手町、紺屋町川沿いは大きな材木、家の内に流れ入り先ごろ架設の仮橋は残らず流失、独狐入口の橋半分水浸し、町田、船水、三世寺は床上三尺に水上がり、舟で往来した。
	寛文2年	1662	8月5~9日洪水。
	〃 4年	1664	7月4~5日大風雨で岩木川洪水。広戸村で破船し6人死亡。
	〃 6年	1666	石渡川洪水、田畑多く荒廃、凶作。
	〃 8年	1668	6月16日大洪水、田畑多く荒廃。
	〃 10年	1670	5月21日及び6月1日出水あり、再度岩木川大洪水。
	〃 11年	1671	10月14日より雨降り、24、25日の大雨で洪水、所々橋流失する。
	延宝2年	1674	8月6日大風雨。家屋、樹木に大被害。
	〃 6年	1678	8月26日大川大水。
	〃 7年	1679	8月26日より9月6日、3度出水し崩れ、人馬多死、家流失、田畑作物は半作となる。
	寛文8年	1680	正月16日洪水、五所川原土居10間破損。8月26日岩木川洪水、下町残らず床上浸水、土手町橋流失、流家75戸、水没35ヵ所、水死人33人、牛馬89匹、田石高4万9000石損耗、白髭水と称す。 『青森県史』では8月から9月まで津軽大風雨洪水、35ヵ村水びたし死者33人、田畑4万9千石の減収としています。

●藩政中期の洪水

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
江	天和元年	1681	正月22日岩木川大水。
	〃 2年	1682	6月6日岩木川洪水。
	貞享2年	1685	3月7日、8日洪水、左組菱沼堤14.5間破損。 3月20日駒越川（岩木川）洪水。
	〃 3年	1686	2月5日洪水、岩木川通り流木駒越近所に流れ来り、一両日中に駒越に拾い上げた。 2月24日昨夜洪水、常より7尺程増水し、石川渡（平川）の橋板9枚流れる。4月4日駒越渡し船流れて小舟一そうだけのため御用人のみ乗り、往来の人々難儀。
	〃 4年	1687	5月28日平川、碓ヶ関川筋洪水。6月15日大風、大雨にて浅瀬石川筋沢で人多く流死し、沖浦の温泉場特に被害があり。
	元禄元年	1688	4月24日駒越川洪水、8分程の出水にて船渡し難儀往来止まる。8月20日所々洪水。
	〃 2年	1689	2月駒越川洪水。8月3日相内川、築野木館川洪水。9月岩木川洪水。
	〃 4年	1691	8月2日夜雨で朝5つごろ（午前8時）駒越川洪水で船渡し出来ず往来止めとなる。 10月24日駒越川、昨夜九つ（午前零時）洪水にて総切橋板3枚流れ、往来出来なくなる。11月30日昨夜駒越川渡し歩行橋水浸し、橋柱倒れ橋落ち往来絶え、石渡へ回り往還。
	〃 5年	1692	7月3日駒越川洪水、板橋、杭板、丸太流失、百姓らより供出の柴木、雑木、丸太も押し流される。
	〃 6年	1693	2月12日駒越川洪水、石渡橋流失。2月13～14日下ノ切地方大雨洪水で溺死者多く、新田を捨て古村へ帰る。駒越川洪水、碓ヶ関鍋倉沢で小子五人溺死。3月4日百石町の後の川洪水。浪岡川、十川、平川も洪水。3月16日岩木川、藤崎川洪水。7月25～29日岩木川、藤崎川7～8分の洪水。3月27日、4月2日、6月14日、8月1日、9月21日と洪水があった。
	戸	〃 7年	1694
〃 8年		1695	夏中連日降雨で大洪水。特に5月10日及び26日の洪水で田の冠水数千町歩。
〃 9年		1696	3月25日辰の刻より洪水、駒越川往還止まり、石渡橋際まで出水。
〃 10年		1697	閏2月6～7日藤崎川、平川洪水。
〃 11年		1698	5月4日より洪水、堰口水門2カ所破損、水除堤11カ所破損、川除出し26カ所破損、ため池水放し1カ所破損、板橋2カ所流失、樋脇8カ所破損、街道3カ所川成、堰留4カ所同様、山堰9カ所同様。田153町歩の苗代、畑53町歩水浸し。6月23日より大雨で、27日七ツ時（4時）より洪水、水底となった田畑は藻川村田7町歩、畑9町歩、川山村田21町歩外。7月23日より大雨、24日大洪水、荒町、石渡、馬屋町橋流れ落ち、駒越土手破損、1軒流失。五所川原堰、藤崎、大留切脇は長さ25間、深さ1丈余、洪水にて破損。
代	〃 13年	1700	1月15日、慶安元年延宝8年以来の大洪水、石渡、駒越、馬屋町、荒町、藤崎その他各所の橋落ち、下の村では多く家屋流失。
	〃 14年	1701	7月～8月大雨洪水、所々の橋落ち、藻川、鶴ヶ岡損害多し。五所川原新田の土手崩れる。 （8月9日より12日まで一時もやまず降りつづき洪水。弘前土手町橋と薬王院の橋流れ落ちる。下在は出穂したが、かがまず、同16日より19日の朝まで降り続き日々五ツ半（8時）より雨風深く。春立より覚えなき大風雨で大川沿い田地不作。）
	〃 16年	1703	6月1日大雨で洪水、上在川通り流屋多く、牛馬の流失も多く、石川村庄屋の家その他流家あり。鶴田村辺より下通りは15日まで青田の上を船、いかだで往来。この大雨洪水で米価騰貴し、諸方餓死者も多く出た。下ノ切の田畑荒廃。
	宝永元年	1704	7月28日大雨、各地の橋流失。8月3日岩木川、寺沢川洪水、土砂、木石流出。
	〃 2年	1705	3月4日岩木川洪水。

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
江戸時代	宝永3年	1706	12月21日岩木川洪水。この年、大水害を受けた神原村を金木川口より移転。
	〃 4年	1707	7月8～9日岩木川、藤崎川、碓ヶ関白沢川洪水、小栗山村領大橋流失。8月19日大風雨、岩木川・石渡川出水、大風で潰家192軒、田畑大被害。
	〃 7年	1710	3月9日大川洪水、紺屋町橋落ち他所々破損、大川材木4万本余り流失。7月15日大雨、藤崎橋流失。
	正徳元年	1711	4月3日大風雨洪水、黒石川、関川出水。4月4日大風雨で被害甚大。 5月9日岩木川出水。紺屋町橋流失、紺屋町、御蔵町床上浸水、所々橋流失。
	〃 3年	1713	12月大みそか夜大出水。石渡、藤崎両所の橋流失、当冬は至って暖かいので、この出水があったと言いつつ合った。
	〃 4年	1714	1月25～26日風雨、6月18日大雨、岩木川洪水。7月12日岩木川大水。所々橋落ち、馬喰町、石渡大家流れ人死あり。種市村辺で出穂の上を舟で往来。
	〃 5年	1715	5月4～5日、5月17～25日大雨で岩木川洪水。
	享保4年	1719	7月6～7日、20年来の洪水。駒越川増水。鶴ヶ岡、藻川、芦野、川口村被害。破船あり。
	〃 8年	1723	3月14日より雨降りで大洪水、流失家屋等多し。
	〃 9年	1724	7月13日より21日まで9日間の雨にて洪水、弘前所々橋流れ、駒越町流家8軒。新田地方数日床上浸水。大川堤防数十ヶ所破損。その他用水樋、橋梁等流失少なからず。
	〃 12年	1727	3月23日、岩木川洪水。3月27日降雨続き流木17万本。
	〃 13年	1728	1月降雨・大水・流木17万本。3月27日大水、流木18万本。5月大洪水。7月27～28日、大洪水。延宝8年以来の長雨で岩木川全流域で大被害。
	〃 14年	1729	3月11～14日、洪水、金木、広須新田被害大、豊島村9人流死、流家7軒、損壊10軒、蒲原村12軒流失、石渡川橋40間流失、十三町人馬多く死ぬ。
	〃 15年	1730	12月4日、大雨で藤崎川橋流失。
	元文2年	1737	7月13～17日、岩木川、平川洪水。大鰐湯の川原橋流失、六羽川沿い四軒流家。金木、中柏木、新田で冠水田多し。
〃 3年	1738	5月23日～6月2日、大雨、洪水。	
〃 4年	1739	8月7日、大風雨、被害甚大。塩辛い雨降る。田茂木町山王堂向いの大木、蔵館大日堂向いの大木吹き倒れる。	
寛保元年	1741	7月2日、大川大洪水、木造新田、五所川原新田水浸し、損耗多く、外ヶ浜通りも田畑損耗、人馬死亡多し。7月9日、大川洪水。 12月24日、岩木川出水、駒越、石渡、藤崎橋落ちる。	
〃 2年	1742	7月2日より大雨で領内大洪水。中山通り下佐村々、損害大。飯詰川の大洪水で、飯詰町屋53軒、蔵3棟流失、人死63人。牛馬の死亡多し。 その他外ヶ浜通りも田畑損耗。人馬多死。	
〃 3年	1743	3月7日、岩木川大洪水。二階堰留切破損、石渡御蔵浸水。ぬれ米千俵余、材木多く流失。5月24～25日大雨洪水。6月24～25日大雨洪水、岩木川7分出水。	
延享元年	1744	3月6日、岩木川7分程出水。5月28日大雨、29日岩木川洪水、下の切、紺屋町、若党町、馬屋町、春日町床上浸水、流木15万8千本流失。 その他川沿いの村々百余軒流失、田畑流失、人馬死亡。弘前南ため池破れ薬王院、和徳の橋落ちる、土手町、東長町橋大破。浅瀬石川大水、温湯家18軒、土蔵1棟流損。 その他川沿い流失107軒、人馬、死亡多く損耗21,522石1斗余。延宝以来の大水という。	
〃 2年	1745	8月18日、12月20日、大雨洪水、諸橋破損。	
〃 4年	1747	6月6日～16日、大洪水、損害多大。7月3日、岩木川洪水、田地水損多し。8月19日暁より大風雨駒越村床上浸水4～5尺ばかり。 流木数10万本、所々橋流失、広田、赤田両組、新田稲葉水中7～8尺の底に没する。	
寛延元年	1748	8月8日～10日、領内大風、田畑損耗多し。	

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
江戸時代	寛延2年	1749	6月30日、平川、十川、岩木川洪水。7月洪水で南ため池石樋全壊。
	〃 3年	1750	3月7日～16日、岩木川、土淵川、洪水で二階堰大だまり破れかかる。石渡街蔵米1千俵余ぬれる。40年以來の大洪水。
	宝暦元年	1751	6月20日、大洪水で追子野木橋流失。7月20日～21日、暴風雨、駒越川洪水。
	〃 2年	1752	6月7日～16日、大川、平川大水。南ため池破れ、弘前、石川など所々の橋流失。その他損害多し。
	〃 8年	1758	7月7日、大洪水。7月12日、洪水。大鰐石川村人家流失。西浜で御廻米5,000俵沈む。
	〃 9年	1759	閏7月2日より7日まで大水。真土領土手300間余切れ、荒町、鷹匠町、馬屋町、三馬屋床に水上がり、若党町、春日町、紺屋町も同様。
	〃 10年	1760	碓ヶ関、大鰐までの村々40軒余流失、人畜の死亡多く用水樋及び堤防等破損多数。損耗高57,000余石、流失家屋278軒、男女65人死亡、橋梁700余流失。延宝2年以來の大水。
	〃 13年	1763	7月11日、岩木川、大童子川洪水。流死2人、山崩れによる圧死4人赤田組田畑230町歩冠水。
	明和2年	1765	6月20日以降、降雨続き洪水。
	〃 6年	1769	7月16日、洪水、荒町、川端町、大鰐辺被害。6月12日、岩木川6分余の出水。

●藩政後期の洪水

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
江戸時代	安永6年	1777	5月29日、岩木川7分の出水で、二階堰残らず崩れる。7月7日～8日駒越川7分の出水。
	〃 7年	1778	1月13日、岩木川、藤崎川洪水。6月28日、岩木川、土淵川洪水、所々被害。
	〃 8年	1779	2月4日、岩木川洪水。5月20～30日洪水、損耗多し。
	〃 9年	1780	6月6日、領内大洪水、岩木川、平川筋で被害多し。7月4日～5日岩木川二重留3ヵ所破れる。大鰐村建物16軒流失、新田、藻川堤防5ヵ所欠壊。
	天明元年	1781	7月4日～5日、平川、岩木川洪水、城下の諸橋流失、死者4人のほか往家、田畑など損害甚大。〃白髭。以來の洪水。
	〃 2年	1782	正月25日、大風雨。27日岩木川大洪水、広田組、五所川原新田赤堀堤2ヵ所、鶴ヶ岡1ヵ所、木造新田堤防多く破損、家屋流失。下在村々押し流され、男女21人、馬176匹溺死、家23軒流失。その外広田飯詰金木3組も水害多し。
	〃 3年	1783	3月、岩木川6分の出水。春中より御国元不順、猛夏中雨降り続き、6月17日、18日、20日、洪水。7月18日、19日、風雨洪水。その後、大風打ち続き霰降り、稲虫付きになり、青もみ多く損耗121万780石。
	〃 7年	1787	3月2日、岩木川、平川、藤崎川、洪水。石川橋流失。
	〃 8年	1788	6月24日～25日、大水、土淵川、平川通り洪水。岩木川7分の出水。
	寛政元年	1789	9月3日～4日、岩木山中より出水、この水で碓ヶ関より大洪水。大鰐、蔵館浸水、岩木川7分出水。
〃 7年	1795	6月21日、暴風雨。岩木川7分の出水。	
〃 9年	1797	6月5日、22～25日洪水。8月28～30日洪水。田舎館、金木、広田、藤代組川沿いの村々、刈取った稲流失。大鰐組村々橋流失。8月31日洪水、所々橋流失。	
			3月22日、岩木川9分の出水。流域の村々浸水、藻川の堤4ヵ所破れる。6月2日、雨降り、3、4日と大雨。5日昼過ぎより洪水。岩木川の上手所々崩れ、駒越町、紺屋町、亀ノ甲町、中町床上浸水、水死人数十人、川々の橋残らず流失。木造新田、金木新田水浸し、木造広須新田の土居35ヵ所欠壊。五所川原村10ヵ所くらい欠壊。

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
江戸時代	寛政10年	1798	人馬おびただしく死亡。十三瀉水戸口閉鎖、金木新田18ヵ村水浸し。前代未聞の大洪水。 3月、新田地方洪水。6月5日、岩木川60年来の大洪水、水の高さ1丈3尺。死者5人、堤防堰等欠損865ヵ所、橋流失293ヵ所。その他、家屋流失、田畑などに甚大な被害。9月、災害復旧に人夫4万5千人動員。
	享和元年	1801	3月29日、飯詰組高野村ため池破れる。
	文化元年	1804	3月4日、土淵川大水、岩木川7分出水。6月24日～27日。8月30日～9月1日、大風：大風雨、岩木川出水、所々破損。
	〃 2年	1805	6月5日、大洪水、弘前下町残らず水押し、水死も出る。 6月20日、岩木川8分の出水。7月21日岩木川9分の出水。
	〃 7年	1810	3月8日、岩木川6分出水。
	〃 8年	1811	閏2月4日、大雨で雪4尺消え洪水・橋流れる。5月24日～26日、大洪水、所々川欠け、あるいは水押しになる。7月16日、洪水、岩木川9分余、平川十分余の洪水、新田在所土居切れ、人家、田畑共水浸し。 広瀬、木造両新田皆無村52ヵ村、人馬流死あり。
	〃 9年	1812	7月17日、岩木川5分ほど出水。浅瀬石川、平川大水。
	〃 10年	1813	7月25日、岩木川洪水、流木あり。
	〃 12年	1815	7月16日、大雨、岩木川8～9分出水、平川洪水、蔵館、大鱈村被害多く人馬流死。 8月18日～19日、岩木川6分の出水、平川も出水多し。
	〃 14年	1817	6月6日、大雨、去月13日より毎日の雨で、木造新田豊川堤7ヵ所、繁田並びに長泥の堤防30ヵ所破れる。広田組藻川並びに金木組福井の堤防破れ田畑の損害多し。石川村家3軒流失。
	文政元年	1818	6月3日、大雨。岩木川6分出水。
	〃 8年	1825	鍛冶町土淵川洪水。弘前の橋々流失、破損。
	〃 10年	1827	7月23日、大雨、岩木川10分出水。7月25日～26日、大雨、岩木川9分出水、土淵川、平川筋も被害。10月7日、洪水で城内破損、家屋流失。水死多数。12月5日、黒石領大風雨、被損。
	天保元年	1830	8月15日～16日、大雨、岩木川洪水、樋口村土手、二階堰欠崩、下田通り一円土居総水浸し、流失家多く死亡39人。同17日、岩木川末流村々流失。平川も大水、所々破損多し。
〃 2年	1831	8月14日、下町大洪水、駒越町荒町家屋流失あり、人馬も多く流死。 悪戸二階堰の堤防破れ、袋宮寺より常源寺坂下、荒町坂下、御城中賀田御門より下の方水付きとなり、およそ下町並びに中町より田茂木町辺まで浸水。	
〃 6年	1835	7月18日、浅瀬石川洪水。	
〃 10年	1839	7月7日、大雨、岩木川9分出水。藤崎川で溺死者9人、田畑、橋、用水樋など破損おびただしく、夜に入り大風で板屋根、垣類大いに痛む。	
〃 11年	1840	5月12日より雨降り、13日岩木川洪水。駒越村船場北側1軒流失、隣家半分くらい崩れ、新田地方土居水付になり、平川筋も出水所々被害。7月13日、岩木川、平川など洪水。岩木川堤防破れ家3軒流失。	
〃 12年	1841	正月初めころ岩木川出水、紺屋町裏通り土居水越し。当夏中出水にて損耗3分3厘。	
〃 14年	1843	平川、浅瀬石川出水、損耗多し。	
弘化元年	1844	7月8日より10日まで長雨やまず、平川水源碓ヶ関村湯ノ沢山中崩れ、溪ふさがり水たまり大沼となるも決壊して洪水一時に流れる。大鱈、蔵館、小金崎諸村人家流亡破壊多数。流死人49人、俗にこの洪水を大鱈流れという。流失した家104軒、押し破られた家174軒、橋流失大小110ヵ所、ケガ人多数、街道欠崩78ヵ所、並木松流失161本、川欠け150ヵ所、田畑石砂上がりあるいは川欠け藤崎まで225町など被害甚大。	

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
江戸時代	嘉永3年	1850	4月3日、岩木川出水。6月岩木川出水。
	〃 5年	1852	3月16日、岩木川、石渡川8分、翌17日9分5厘出水。大久保堰水門破損。
	安政2年	1855	6月1日、大雨にて駒越土場の流木流失。
	安政4年	1857	6月7日、大雨、平常より尺余の出水、田畑冠水。33ヵ所橋流失。
	〃 5年	1858	5月15日より6月16日、17日までの毎日の雨、半日あるいは1日ばかりは降らない日もあったが、平川の橋々が流れる。岩木川は別条なし。
	〃 6年	1859	7月25日～26日、大風雨、碓ヶ関口並木松176本倒れる。
	文久元年	1861	3月21日、境川増水、下大工町、松森町、下米町浸水。
	〃 2年	1862	6月洪水で鶴ヶ岡村6人の水死者を出す。
	〃 3年	1863	2月より5月12日までの大干ばつで田畑大困り。長勝寺で5月6日から12日まで雨ごいの祈禱のところ、13日昼まで大雨となり、駒越川原で流し木流出、東方境関の渡しは往来止め。
	慶応元年	1865	7月10日～16日、17日、大雨、大洪水、被害甚大。10月22日、大風雨田畑冠水949町9反歩被害。 (注) 1、月日はすべて旧歴 2、文中、土居とあるのは堤防のこと。 3、川名に地名を冠しているのが多い。例えば、駒越川(岩木川)、碓ヶ関川(平川)、藤崎川は(平川または浅瀬石川をさしていると思われる。)

●明治期の洪水

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
明治時代	明治5年	1872	4月4日、大川並びに平川通り出水。所々橋流失。
	〃 6年	1873	9月11日頃、岩木川出水。
	〃 7年	1874	9月の暴風雨で二戸、三戸、北津軽の村々の田方稲刈りまで半倒れ。その他諸川出水。堤防、橋破損、稲の水腐れ、田畑川成等少なからず、被害甚大。
	〃 8年	1875	5月末から6月中雨天にて度々出水あり、新田並びに藻川、鶴ヶ岡、度々水浸しに苦しむ。
	〃 9年	1876	9月12日より雨降り続き、川々が出水、田畑の浸水あり。
	〃 11年	1878	7月下旬岩木川5分5厘の出水。8月7日十川氾濫、福島、水木、館ノ越、堤防決壊一円水浸し。9月28日、浅瀬石川出水、付近村々浸水死者3人。
	〃 13年	1880	この年、岩木川暴流。藤崎村白子屋敷を突然30戸余転退に追い込む。1万6千人余の人夫を南津軽郡下より直勤救助させた。
	〃 14年	1881	7月17日より雨降り続き、翌日夜岩木川9分の出水。浜ノ町堤防越水。外瀬村領2ヵ所決壊、清野袋村人家2軒流失、流し木400巻位流失。新町並びに紺屋町で流死人あり。尾太銅山の材木大分流失。7月26日夜より28日朝まで大豪雨大川出水。石川村、橋流れる。岩木川で死者3人。
	〃 16年	1883	7月3日、風雨大水。目屋川、相馬川出水。流し木大いに流れる。所々死者あり、駒越中川原で家屋3軒流失、下湯口村、悪戸村、菟中村、外瀬村領などの堤防破れる。五所川原裁判所、師範学校へ水押し上り船で立退き。
	〃 18年	1885	春季融雪期に大洪水。岩木川沿岸大巻堤防破壊、立木隣村姥菴まで流れ、五所川原村繁華街喰川町船、いかだで往来。藻川村築留堤防決壊し十和田沼出現、繁田村字流木巻地内の堤防650間(約1,170m)破壊し、稲垣、館岡、車力3ヶ村3,630余町歩も海のようになる。
〃 21年	1888	7月9日大洪水。五所川原村炊き出し給与30戸、160人。	

時代	年号	西暦	津 軽 の 洪 水 記 録
明治 治 時 代	明治22年	1889	春季融雪で洪水。出野里村浄土宗無量院前の堤防破損したが、雪滞のため寺院の流失はまぬがれた。
	〃 24年	1891	12月30日の洪水で駒越、藤代の堤防破壊。
	〃 26年	1893	大洪水。
	〃 27年	1894	洪水。
	〃 28年	1895	7月20日大雨、28日に岩木川、十川洪水、三好村の水田大被害。
	〃 29年	1896	5月大水、車力村豊富地内の堤防180m決壊。その被害稲垣、館岡、車力の3ヵ村にわたり1,180余町歩。7月21日午前2時頃より盆を覆すような大雨、岩木川、平川浅瀬石川の諸川増水、大鰐付近平川堤防破損し大鰐弘前間の列車運転休止。9月4日より5日まで絶え間ない霖雨。土淵川は近年まれな出水で徒町、川端町などは水で包まれる。道路の水は4尺にも及ぶ。川沿いの一帯の家々は、襖の引き手まで浸水。その他各方面にわたり被害大。
	〃 30年	1897	2月25日、融雪洪水、高瀬村屋岸まで水押し。7月出水、相内村家屋流失、死者あり。
	〃 31年	1898	4月土淵川、下溝川大水。岩木川の9分5厘の出水。
	〃 34年	1901	7月20日、豪雨のため各川出水、相内村家屋流失、死者5名。
	〃 36年	1903	7月24日、岩木川大洪水、稲垣村大字豊川字中袋地内新堰水門破損、堤防250間決壊、その被害稲垣、館岡、車力、3ヵ村にわたり、3,864町歩。9月6日夜来大雨のため、諸川増水甚だしく、県下至るところ災害多し。
〃 37年	1904	4月1日、岩木川洪水。武田村大字長泥地内堤防65m破壊、その被害武田村182町歩。5月5日夜より6日まで雨で50年来の大水、岩木9分5厘の出水。土居一面の水にて鐘3点、人心恐々。ほか金木川、十川、山田川等堤防破損、被害数万円。	
〃 40年	1907	5月洪水。	
〃 44年	1911	4月6日の洪水にて、飯詰村菴ノ沢溜池堤防崩壊し、飯詰村に水押し寄せ家屋流出19軒、溺死4人。ほか、岩木川の洪水で西北西津軽郡の被害甚大。	

●大正期の洪水

時代	年号	西暦	津 軽 の 洪 水 記 録
大 正 時 代	大正2年	1913	6月28日、全県下に豪雨、流失埋没または、濁流のため収穫皆無になったもの多し。8月27日、県下に暴風雨、雨量坪当6斗4合（2時間半）被害甚大。
	〃 6年	1917	中川、三好地区で融雪洪水と岩木川の逆水で堤防決壊など被害多し。
	〃 9年	1920	8月9日、大雨で県下各河川増水甚だしく、浅瀬石川、平川、岩木川など増水し、損害少なくなかった。
	〃 10年	1921	4月融雪出水。中里村溜池堤防決壊。
	〃 11年	1922	8月、山田川出水、沿岸水田1,000町歩に滞水。
	〃 12年	1923	3月岩木川本支流とも融雪洪水、堤防決壊など損害多し。

●昭和期の洪水

時代	年号	西暦	津軽の洪水記録
昭和	昭和3年	1928	7月16、17日、大雨。県下各河川増水し、岩木川堤防決壊、被害甚大。
	〃 7年	1932	台風の影響により、8月3日夜半から、6日朝までの雨で各河川が大増水。6日までの総降雨量175mmに達した。(弘前工業試験場調べ) 藤崎地内、五所川原堰取入口堤防及び十川堤防決壊、家屋浸水、耕地冠水など各方面にわたり甚大な被害が発生した。
	〃 10年	1935	8月21日からの豪雨で、県内各河川が洪水氾濫し未曾有の水害が発生した。岩木川流域内の総雨量(21日～24日)碓ヶ関333.7mm、黒石303.1mm、弘前298.6mm、板柳291.3mm、五所川原290.6mm、木造276.7mm、金木155.8mm。最も多い所は、十和田湖畔で、休屋457.0mm、十和田村小沢口400.7mmと青森測候所開設以来の記録となった。随所で破堤、越水を生じ、死者、家屋の浸水、流失、耕地、道路の冠水などその被害各方面に及ぶ。とくに大鰐付近は大惨事となった。
	〃 11年	1936	4月20日、融雪期の出水で中里村ため池堤防が決壊して水田の被害甚大。
	〃 12年	1937	8月10、11、12日大雨で平川出水。大鰐町家屋浸水、藤崎町も被害あり。岩木川堤防決壊。降雨量32.5mm。
	〃 18年	1943	8月13日、金木町一帯にまれな集中豪雨。家屋浸水は床上254戸、床下浸水46戸、橋の流失10ヶ所、水田冠水千町歩。金木町降雨量318mm。
	〃 20年	1945	4月14日融雪出水、五所川原地方まれな洪水、交通途絶、十川堤防決壊し鶴ヶ岡排水路の逆流防止水門破損。
	〃 21年	1946	6月24日、大雨出水、西北津軽地方に多大の被害あり。
	〃 22年	1947	4月16～18日、融雪洪水、岩木川流域決壊65ヶ所、冠水耕地1,299町歩、流失耕地215町歩家屋浸水218戸。同流失20戸などの大被害。 6月25日、大雨、十川氾濫、常盤村、中郷村、浪岡町地帯水田冠水。 7月11日、大雨、十川氾濫、冠水千町歩。7月21～23日、県下大雨。被害甚大。特に西北両津軽郡水浸し多し。
	時	〃 23年	1948
〃 25年		1950	4月2日、大雨融雪洪水、北津軽郡低湿地帯冠水1,000町歩、家屋床上浸水24戸。7月19日、大雨。北津軽郡冠水1,200町歩。 10月16日、大雨。津軽地方で稲島流失。
〃 26年		1951	2月22日、大雨融雪洪水、碓ヶ関住家床下浸水3戸。6月16日、新十川の排水悪く、水田冠水11町8反歩。7月18日、大雨、浪岡町正平津川氾濫、水田冠水48町歩、道路損壊、橋流失、住家浸水若干。
〃 29年		1954	6月6、7日、大雨、十川氾濫、水田冠水120町歩。
〃 30年		1955	3月2、3日、大雨融雪洪水、中里川堤防約5m決壊、付近水田20町歩浸水、堆肥流失。3月17、18日、大雨融雪洪水、奥羽線、五能線交通支障あり、津軽地方家屋浸水1,330戸、堤防決壊6ヶ所。 6月22日、大鰐、碓ヶ関方面豪雨来襲、退避警報出る。死者2名、家屋倒壊、流失9棟、浸水14棟、耕地の埋没流失26町歩、冠水105町歩、道路損壊13ヶ所、橋流失6ヶ所。 7月3、4日、大雨。増水急激なため橋の流失多く、中弘地方11ヶ所、その他3ヶ所、道路決壊8ヶ所、堤防決壊延長1,820m、耕地流失埋没20町歩、冠水709町歩。8月23日、雷雨で洪水。西目屋村、岩木川橋脚二基、橋2ヶ所流失、碓ヶ関降水量82.5mm。 9月6、7日、大雨洪水。津軽地方水田冠水157町歩、家屋浸水258戸、橋流失9ヶ所、堤防決壊6ヶ所。
代	〃 31年	1956	3月16、17日、大雨融雪で洪水。大鰐地方家屋浸水6戸、橋流失6ヶ所、堤防決壊3ヶ所、山崩れ2ヶ所、水田堆肥流失1,000町歩余。

時代	年号	西暦	津 軽 の 洪 水 記 録
昭和時代	昭和62年	1987	8月30日、流域南部に100mmを越す局地的豪雨。 8月31日、津軽地方に大雨被害。 9月4日、流域南部及び五所川原に100mmを越す集中豪雨。 7月21～25日、目屋ダム上流域に集中豪雨、八方で211mmを記録。

●平成期の洪水

時代	年号	西暦	津 軽 の 洪 水 記 録
平成	平成2年	1990	9月19～21日、岩木川上流域及び平川上流域に100mmを越す豪雨、特に岩木川南山麓(弥生)で177mmを記録、弘前市を中心に家屋及び農作物に大きな被害をもたらした。
	〃 3年	1991	7月16～18日、岩木川上流域、平川上流域、浅瀬石川上流域に集中豪雨、八方で101mm、深山沢で131mm、滝沢で129mmを記録。
	〃 5年	1993	7月27～30日、流域中央部を北西方向から南東方向にかけて100mmを越す豪雨、特に八方で160mm目屋で149mmを記録。
	〃 9年	1997	5月7日～8日、岩木川上流域及び平川上流域に100mmを越す豪雨、特に目屋で118mm、早瀬野で129mm、記録。また、上岩木橋地点で水位43.71mと観測以来最高を記録。三世寺で18.37m、幡竜橋で16.28mと警戒水位を超えた。



平成9年5月8日洪水
(幡竜橋下流付近)



平成9年5月8日洪水 (板柳地区リンゴ園)

3 その他の災害

1) 凶作

稲作の豊凶は、気象が最も大きく影響しますが、本州の最北端に位置する当地方は、いわゆる「ヤマセ」によってとくに大きな影響をうけています。このヤマセが長く続く年は、苗の成長が悪く6月中旬になってようやく田植えをすることもあり、そのため出穂が遅れ凶作に見舞われることも多くあります。

また、昔は冷害に強い品種がなかったこともその原因の一つといえます。

① 藩政期の凶作(1590~1867)

津軽藩成立後の新田開発奨励推進政策によって津軽平野には、続々新しい村が誕生しました。しかし、新田が開発されたといっても順調に生産が続けられたわけではなく、自然は、たびたび大凶作を引き起していました。その都度人々は、悲惨な暮らしをしてきたのです。

また、「百姓とゴマの油は、しぼればしぼるほど出る」という過酷な年貢米の取立ても、ひとたび凶作に見舞われるとたちまち飢饉が発生する要因となっていたのです。

この時代に津軽藩領を襲った凶作は、実に夥しい数で、天正18年(1590)から慶応3年(1867)までの277年の間に大凶作といわれたものから減収としているものまで77回あったとしている記録があります。これによると約35年に1回の割合となりますが、5年に1回としている記録もあります。この中には、冷害以外の凶作も含まれていると思いますが、いずれにしても打ち続く凶作に農民や町民が飢えに苦しんでいたことは間違いありません。

藩政期に津軽地方で最も大きかった凶作は、元和、元禄、宝暦、天明、天保の凶作で、これを津軽の五大凶作といっています。

(イ) 元和期の凶作。この年代は、元年、2年と続いています。

① 元和元年(1615)、津軽藩が成立してはじめて大凶作に見舞われました。

この年農民たちは、春から弘前城の南にある茂森山の削平工事に駆り出されていたため、農作業が遅れていたのに加え、初夏頃までヤマセが吹き荒れ、作物の生育がはかばかしくありませんでした。

6月になって訪れた暖気ようやく出た稲穂も、16日の大霜(雪という説もある)で枯死し皆無作が決定的となりました。

国許の重臣たちは、領民が餓死しはじめた12月に至って、江戸に出府中の藩主信枚の元へ急使をたて指示を仰ぎました。

信枚が、急ぎ帰国の途につき大間越に着いた12月27日には、領内に多数の餓死者が出たあとで、道々に累々と餓死者が横たわり、まるで地獄図絵と化していました。信枚らは、この死体を「飛び越え飛び越え、入城したといわれています。

② 翌元和2年(1616)もまた寒冷な天候続きで、飢饉に苦しみ他領へ逃散する者が続出しました。しかも、難民救済のため幕府から借りた2万5千俵が到着したのは5月に入ってからで焼け石に水でした。

また、この年は不作でしたが、昔から津軽にあった赤稲(早生種)だけは成実し、これを上納した者83人は、信枚によって士分に取り立てられたという。これを「赤稲83騎」といったといわれています。

この前年からの飢饉で餓死者が多く出ました。「弘前城のほとりばたに餓鬼山ができる」と伝えられています。また、この年領内で生まれた子供がわずか4人で他はことごとく流産したといわれ、飢饉の物凄さを物語っています。

(ロ) 元禄期の凶作。この年代は、5年(1692)の天候不順による「青立ち飢饉」といわれた凶作からはじまりました。

7年からの寒冷な気候は、8年に至っても続き、いよいよ大凶作となりその惨状はますます深刻なものとなりました。

また、この年代は、たびたび発生した大洪水と重なり人々は悲惨な暮らしを続けていたのです。

③ 元禄8年(1695)は寒冷な天候が続き、早くも7月3日、4日と大雪が降り、7日と14日は、厚霜が津軽一円を覆いました。8月に入っても不順な天候続きで、上田といわれている通常収穫量の高い水田でも、半分出穂のうち3割はシダ、中田では、3分の1ほど出穂のうち2割がシダ、下田は全くの皆無作であったといわれています。(注、シダ……結実しない稲穂)しかも、藩の重臣たちが、6月までの稲作状況から、この年の作柄を見誤り、蔵米の大半を売り払っていたために、領内には、出来秋を待つ飯米しか残らず、他領から逆輸入しなければならぬ状態で、米価は高騰しました。

江戸にいた藩主信政が領内大凶作の報告をうけたのは8月13日でした。そのころ、領民は飯米確保に走り回り、また、貧農や生活困窮者は、山に入ってワラビの根など掘りはじめていましたが、9月に入って間もなく降雪があったため、この月の末から餓死者が出はじめていました。

信政は、幕府に救米3万俵を願い出て許されましたが、雪のため運ぶことが出来ず、代わりに8千両を借り受け、

他領米の買付けを計画しました。しかし、この年は、全国的な不作で容易に買い求めることが出来ませんでした。また、買い得たとしても雪に妨げられて輸送することが出来なかったのです。

在方の飢餓人は、救いを求めて弘前城下に殺到しました。藩はこれらも収容するために非人小屋を設け、1日1人粥1合を与えるなど救済に当たりましたが死者は続出しました。また、弘前に救いを求めに行けない年寄りや子供、病人などは、秋ごろから続々と死に絶え、領内のいづこも餓鬼地獄となりました。その上、飢饉につきものの疫病が流行したためさらに死者の数を多くしました。

このような状況で、10月から12月までの死者の数は、3万人にも及んだといわれています。

長い冬が過ぎた翌年3月24日、酒田米が、さらに4月2日、秋田から5艘の穀船が到着し、領民は一刻の危機をしのぎました。しかし、前年(8年)8月から9年8月まで1年間の餓死者は10万人、荒田1万2千町歩、空家7千軒という歴大な被害を残してこのときの大凶作は終わりました。

また、この年代には、14年(1701)「この秋凶作、むかしも巳の年、ことしも巳の年とうわさする」。15年(1702)「津軽領天候不順、この秋凶作飢饉」「8月凶作のためお祭りにも見物人なし」と2年連続凶作があったことが記録にあります。

(イ) 宝暦5年(1755)の凶作。この年は春から寒冷続きで、8月初旬に鱈の漁があったり、鷹や鴨が飛来するなど、季節にあわない現象が多く、老農の間には、大凶作が必ず来るとうわさがありました。

第一級の凶作といわれたこの年に、餓死者が出なかったのは、17才の藩主信寧に代わって藩政を預る家老津軽主水の素早い対応によるものでした。

主水は、積極的な飢饉対策を練り、8月に領内の稲作を調査させたところ、当時29万余石の内商だった津軽領は、わずか4万6千石余しか見込めないことから、諸税の免除、田畑の耕作自由とし、裕福者らの貯米を調達させて領内の米穀確保を図り、同時に幕府へも凶作を報告して米一萬石の救助を求めました。

また、藩政の改革にも手を加え、家臣の給禄を均等に配分し、諸事儉約令を出すなど、官民挙げてこの凶荒に当たったので、領内には、相互扶助、協力一致の気風が生まれ、これを乗り越えることができたのです。

翌6年(1756)には、貸借無差別の令を発し、他領からの借金は、藩が立替えて返済し、また、春から夏にかけて、月に2~3度、1村ごとに20~50俵の救米を与えるなど情のある政治を行ったので、重い借金や飢えに苦しんでいた人たちは、一様に元気を取り戻し、平年とあまり変わらない生活を続けることができました。

(ロ) 天明期の凶作。この年代の凶作は2年から始まり、3年大凶作、4年凶作、5年凶作と続き、6年に至っても餓死者の白骨死体が山野に満ちて大凶荒の惨状の跡をとどめていたと伝えられ、この飢饉のことを、「神武以来の大飢渴」といい、津軽最大の災害としています。

6年奥羽を旅行して津軽に入った橘南溪の見聞記の一節には、次のような惨状が記されています。

「予が奥州に入りしは午年(天明6年)の春なれば、もはや国豊かに食もたるべく思ひしに、卯年(天明3年)餓饉京都にて聞しに百倍の事にして、人民大方其時餓死尽して南部津軽の荒涼たる誠に目もあてられぬ事どもなり。(中略)夫より津軽の地に入ては枯骨甚だ多く田の中、畑の上、溝の中、軒の下などに満ちて珍しからぬ事也、何人の形なるや、あはれと云ふも餘りあり。(注、何人の形であるだろうか、余りにも哀れである)(中略)外ヶ浜など通行せし時も、向に見ゆる村こそ家建も大に見へ、家数も数百連れば、行て休息せんとするに煙立つ住家は一軒もなく、只、茅葺の屋根のみ残り、風雨に壁崩れ障子破れて、籠(かまど)のあたりと見ゆる所に例の鬻饉ころころと残り、或は夫婦と見え、或は親子と見ゆれども、誰取収むる者もなく其のあわれ中々いふもさらなり」。

また、女鹿沢という所に泊ったとき、そこの主人が語ったところでは、「卯年餓饉に及び、五穀既に尽て千金にも一合の米を得る事能はず(注、天明3年からの凶作飢饉で穀物はすべて食い尽してしまった、いくら金があっても米1合も買う事が出来ない)草木の根葉其外藁糠或は犬、猫、牛、馬、鼠(ネズミ)鮑(イタチ)に至るまで、力の及ぶ程は取り尽し食い尽して、後には道路に行倒、みちみちたる死人の肉を切取食ふ事になりけるに是も日久しく饑て(飢えて)、自然死たる人の肉故、既に腐たるも同然にて、此近隣にも家内追々餓死して親一人むすこ一人のみになれり、時に其父一つの計策を案じ出し、其隣家に行ていふやう(注、隣の家へ行って言った)借(さて)も御互に空腹なることなり、我家にも家内みなみな死うせしに、御覧の如く今は男子一人のみ残り、是も殊の外にかつへたれば(注、非常に腹がへった)二、三日の間には死すべし、とても死ゆくものいたずらにせんよりは、息のある間に打殺し食せんとおもへども、さすがに肉親の恩愛手づからうち殺すにしのびず此故に其許へ頼申也、(注、そこであなたに頼みます)我子を打殺し給わらば、其御礼には肉半分を贈申しべしと、誠しやかに頼むにぞ(注、ほんとうらしく頼んだという)

隣家の男大によるこび、半分の肉をただ給らば、いと安き事なりと、やがて有合ける。

鉈を携行してうちけるに、さなきだに死せんとせしむすこ、只ひとうちに息たえぬ。(注、隣の家の方は、半分の肉をいただけるならばと、さっそく承知し、鉈(ナタ)をたずさえてゆき打ちつけた。そうでなくても死にそうなる)

こは、ただの一打ちで息が絶えた。)

さらに、これを見ていた人も打殺し、早速料理し塩漬にして置き、1ヵ月ばかりしのいだという。

人肉をむさぼるばかりではない。白昼公然と追はぎ、殺傷、強盗などが行われ、また、毎日、毎晩放火が続いたといわれています。このように天明の大凶作飢饉は、言語に絶する。まさにこの世の地獄さながらであったのです。

㊤ 天明2年(1782)、この年の作柄は4分作でした。藩では餓死者が出る心配があったので、領内の米をすべて上納させ、酒、みそ、しょう油の製造節減、米の他領売出し禁止などの対策を講じ、港々に役人を派遣して厳重に監視させました。

㊦ 翌3年(1783)、この年は、雪の消えるのが遅く寒冷な天候でした。8月中旬頃までヤマセが吹き、ほとんど日が出ない雨天が続き、6月の土用中でも綿入れを必要とするような寒さで、農作業が遅れ凶作が予想されていました。

8月に入り、12日の大風と15日の大霜で、出穂していた稲は枯れ果て、一切実らず凶作が決定的となりました。そのため米価は高騰し、領内の世情は不穏な状況となっていました。

このような世情を無視し、藩庁は、前年の上納米や貯米まで次々と他領へ移出したのです。そのため領内の貯米は、一気に平年の5分の1に減ってしまいました。

港々で移出阻止のための騒乱が起こり、打ち壊しや、訴願の徒党を組んで貯米の返還を強訴する者も現れました。これらの多くは失敗に終わっていますが、これが津軽藩内での民衆の支配階級への初めての抵抗行動といわれています。

江戸にいる7代藩主信寧が、国許の飢饉を知ったのは9月14日で、鱒ヶ沢町莊厳寺住職の訴願によるものでした。信寧は直ちに救済策を講じましたが、すでに遅く、餓死者は毎日何十人となく出る有様でした。

この飢饉で餓死した人の数は、当時の領内人口の約3分の1に当たる8万1,702人と記録されておりその多くは、3年暮から4年春先までの間に死亡し、極寒期には1日千人の割合で死んでいったといわれています。

生き残った人たちは草葉を食い尽し、犬・猫、牛・馬は勿論、人肉まで食ひ、それが肉親の間にあったと伝えられていますから、その惨状は筆舌に現わすことの出来ないものであったと思います。また、他領への逃散者もあとを断たず、3年8月から11月の間だけでも1万人を超えたといわれています。

㊧ 津軽領の飢饉がその極に達していた天明4年(1784)閏正月、信寧が江戸で急死し、翌2年長子信明がその跡を継ぎ8代藩主となりました。

信明は、直ちに救済策の実行にとりかかり、幕府からの借り受け金1万両をもって米の買い付けを急がせましたが、諸国とも不作、または凶作で買い付け量はごくわずかでした。しかも、その米は積雪のため輸送は雪解けを待たなければならなかったため、せっかくの仁政も効果がなかったといわれています。

そのうちに春になり、農作業の時期に入りました。信明は、田畑を荒れたままで放置しては飢饉がさらに続くことになるので、在方の豪農たちを耕作仕付方に任命して耕作を督励させました。しかし種モミの確保も容易でなく、また、食糧不足や悪疫流行で百姓は疲れ切り、さらに、廃田が多かったためこの年領内の作柄は半作となりました。

2年、3年と続いた飢饉で津軽藩内の死亡者は8万1千7百余人、死んだ馬、1万7千2百10頭、水田の荒廃1万3千9百97町余、畑の荒廃6千9百31町余。死亡者は、4年を加えると実に10万2千余人。また、他国へ逃散した者は3万人の多くにのほりました。(『柏村郷土史』)

別の記録(『ふるさと西目屋』)では、2年、3年の大飢饉による藩内の状況として、餓死者12万2千人余、病死3万余人、他領へ逃亡8万余人としています。要するに天明の飢饉は、想像を絶するものであったのです。

このような有様で、天明4年は、田畑を耕すにもその人がいませんでした。

信明は、飢饉につきものの疫病が流行したため、数十人の医師を領地に巡回医療に当たらせたり、朽骨を拾い集めさせて自ら草した弔文を捧げ、手厚く葬りました。また、たびたび農村に出向きその惨状を見廻ったほか、この飢饉は多分に人災の要素があるとして大幅な人事異動を行うなど、「聡明で果敢な名君」と称せられた実行力を発揮しました。



『ふるさと西目屋』より

この藩主の積極的でまじめな態度が領内に浸透しはじめ、領民の間には、ようやく生気をとり戻すようになったといわれています。

④ 天明5年(1787)、飢饉の連続で人々は大いに難儀していたが、この年もまた夏中寒冷で作柄は7分作となりました。

信明は藩士の禄高を3分の1に減じ、また、耕作仕込世話方として、地方の者76人、町の者50人を命じ、不耕地の減少に努めるとともに、弘前に難民収容施設をつくり、ここで生き残った農民を郷里に帰し、庄屋引き請けで耕作に当たらせるなどしました。

しかし、天明の飢饉は、凶作に対する準備がなかったため、救済策はほとんど効を奏しませんでした。

このような反省と信明の見聞とが、凶作時に対する根本的な対策を立てるきっかけとなり、後に備荒貯蓄制度が設けられるようになったのです。

(※) 天保期の凶作。津軽藩(黒石藩を含む)は、天明期の大凶作を訓戒として年々の収穫米から、備荒貯穀(注、凶作時に備え穀物を貯えておくこと)を奨励していたため貯糧量が多く、天保の初め頃には、貯糧35万俵、組貯、村貯7万俵余、郡所貯糧1万2千俵余、その他に新田方にも備え米があったとされ、一時的な凶作は切り抜けられるものと考えられていました。(注、組・現在の市、町、村。村・組を構成する部落に当たるもの。郡・昔の平賀、田舎、鼻和郡(庄)など)

ところが、3年からはじまった大凶作は、5年を除いて10年まで続き、俗に「7年飢渴」と呼ばれ、天明の大飢饉に匹敵する程の惨事となりました。

⑤ 天保3年(1832)この年は、奥羽地方一帯が凶作で、津軽藩の作柄は「御損毛5分6厘7毛」と幕府に届けたとありますから、5分作以下の劣作でした。

⑥ 3年の凶作は、隣藩久保田領(秋田)がひどかったらしく、天保4年(1833)早々から難民が津軽領に救いを求めて入り込んできました。

津軽藩は、これら難民を弘前の旅籠に預け、米や銭を与えるなど救助の手をさしのべました。これは、天明の大飢饉の際、同藩へ逃散した難民を救った久保田領民へのお礼の意味も含まれているといわれています。

この年は、春から不順な天候が続いていました。4月から雨天続きでほとんど快晴を見る日がなく、5月に至っても苗の成長が2、3寸しか延びず、6月から寒冷な天候で凶作が確定的となりました。

7月に入り貧窮者の逃散がはじまり、8月半ばには、早瀬野(現大鰐町)の山奥に多数の餓死者の死体があったという。これは、津軽に見切りをつけた領民が、秋田などの他領へ地逃するため山越へをしようとしてこの地に至り、遂に餓死した者の末路の姿でした。

藩庁は、他国米の買い入れと、備蓄米の放出を決めて窮民対策にのり出しました。10月17日大坂屋敷で買い集めた西国の米麦3万2千541俵が到着し、これに備蓄米を加えて配分したので領内はようやく安定した状況になり逃散の動きも止まるようになりました。

しかし、このような情勢にありながら藩主信順は、「ネブタ」を作らせて見物するなど、失政の多かった藩主といわれています。

この年の作柄は「春秋の間、不殊続きにて、古田、新田共御収納皆無」であったと記録されています。

⑦ 天保5年(1834)2月に加賀米1万2千俵が到着したので、領民は大いに藩の重役を信頼したといわれま

す。5月になり藩庁は、農具までなくしていた者に対し、鋤、鎌などを新造させて配付しました。

このように、前年の凶作にもかかわらず藩庁の施政により廃田もなく、しかも天候に恵まれたので、収納米が15万2千余石にも達する豊作になったといわれています。

⑧ 天保6年(1835)、またまた大凶作がはじまりました。

この年の天候は、4年の天候とよく似ていて、春から低温が続き、8月にはすでに凶作のきざしが見えはじめていました。

備荒貯米は、4年の大凶作で放出し尽し、ほとんど空蔵となっていました。また、農民の手持ち米も少なかったので秋口から飢渴がはじまり、やがて凄惨な生地獄と化していきました。

しかしこの惨状は、まだ発端に過ぎず、翌7年から10年にかけて連続し、領民を徹底的に打ちのめしたのです。

⑨ 天保7年(1836)、前年からの飢渴の様相は一段とけわしくなり、多くの農民は、農耕作期になっても、飢えと、疲労で農作業に従事できず、田畑を捨てて逃散する者が続出したので荒廃田が多く出ました。

この年の藩の収納米は、平年の4分の1、4万7千800石でした。この収納米の大部分は、平賀庄と、鼻和庄の一部の上納米で、貧農などは鍋釜を売り払って調達した蒸米または、煎米であったといわれています。

このような状況で、9月には「鬼沢村(現弘前市)百姓、全村あげて徒党、200人亀甲門で強訴」がありました。(「相

馬村誌』また、「10月飢饉による他散の者2千人にのぼる。重臣ら江戸詰にて無策」の記録もあります。〔『新釈青森県史資料編』〕飢饉の原因は、天候の影響によるものばかりではなく、藩の政策にも大きな要因があったのです。

④ 天保8年(1837)、1月末までに秋田領へ逃散した者は1万人余ともいわれ、世情は悪化していましたが、この年の天候はほぼ順調で、耕作にとり組む農民も少なくありませんでした。

作柄は予想よりも良作で、この年藩が収納した年貢米は平年の3分の2に当たる9万7千余石とされています。

しかし、この年の検見は、非常に高く(注、収穫量は非常に多くあると検査した)村々では大騒ぎになりました。年貢米を完納できない小農の多くは、縄懸りになったといわれています。(注、年貢米を納めきれない多くの小作農民は逮捕されて牢に入られた。)

また、藩庁は、年貢米のほかに、領内の米を買い占めて流通の円滑を図り、あわせて利潤を稼ごうとして藩札を発行しましたが、これは見事に失敗しました。

⑤ 天保9年(1838)、この年も春から天候不順で人々は暗い毎日を過していました。加えて疫病が猛烈な勢いで広まったので、衰弱者は次々と死んでいきました。

また、前年発行した藩札は不換紙幣となり、流通はほとんど停止し、領内は大混乱となりました。

8月に入り凶作は確定的となりました。新田地方や、上磯(外ヶ浜)地方の窮民は多数逃散し、金木村などでは、一村に2~3軒しか残らなかったといわれています。

長びく凶作で人心は荒れ、領内の治安は極限に悪化しました。強盗、火付けが横行したので、手に負えない不法者の処分は村々におかれた自衛団にまかせられました。

この年、藩庫に収納された年貢米は、4万7千130石余でしたが、これも平年に比べてかなりの高年貢でした。中には、8月の途中で家中の持ち米がなくなっていたのに前納米を割付けられたので、青稲を刈り取って蒸米または、煎米にして1軒につき1升から5升、6升ほど上納したのもあったといわれています。

士、農、工、商と武士の次に農民を置きながらこのような時期に、年貢米を取奪するやり方は、昔から領主たちの「百姓は天下の根本也、是れを治むるに法有、先一人一人の田地の境目を能く立て、扱て一年の入作物を見積らせ、其の余を年貢に収むべし、百姓は財の余らぬ様、不足なき様治る事道なり。」〔『相馬村誌』〕という農民の人権を無視した差別思想は、津軽藩として例外でなく、要するに百姓は、殺さぬよう、生かさぬようという時代で、年貢を納める道具でしかなかったのです。

⑥ 天保10年(1839)、この年もまた春から不順な天候続きで人々は不安におののいていました。加えて、備荒貯蓄米の名目で1斗から20俵までの上納米が命ぜられ、農民の生活はますます深刻となりました。

領内の世情は相変わらず不穏で、方々の空屋が焼かれ、毎晩2・3ヶ所から火の手があがったといわれています。

5月15日、「暗君」といわれた信順が隠居し、黒石藩主順徳が11代津軽藩主となりました。この人は、老中松平信明の三男だけに、諸政に英断を下す名君でしたので、領民はその善政に期待をかけていました。しかし天候が回復せず半作の凶作となりました。

以上のように天保期の大凶作は連綿と続き、死者3万5千616人、逃散者4万7千43人、空家1万3千76軒、廃田9千480町歩、死んだ馬1万9千989頭、という大きな傷跡を残して終わったのです。

② 明治期の凶作(1868~1911)

慶応3年12月9日、王政復古の大号令により、幕府が廃止されましたが地方では、旧来どおり藩政が行われ、政治の実態は封建時代とほとんど変わったところはなく、津軽藩も、黒石藩も存在していました。

明治2年6月17日、知藩事制が施行され、旧藩主は、新政府の知藩事として行政を担当することになり、いよいよ近代国家へと移行して行きました。

このようなさ中に明治2年の大凶作が発生したのです。

明治期の凶作は、2年をはじめ、17年、35年、38年が上げられます。

(イ) 明治2年(1869)の凶作。明治の兵火がようやく鎮まったこの年は、夏まで悪天候が続いたので、弘前藩では8月に、凶作の見通しをたてました。

9月には、東西海岸通りや新田地方は皆無作と見定めたといわれています。

記録によると〔『新釈青森県史資料編』〕津軽藩凶荒、緊急対策として米1,000俵、施与、諸士の家禄も100俵4分5厘の割で均減す。明治3年1月17日、弁官への凶作報告商274,482石のうち、203,116石の損耗(7割4分)としています。

この年の弘前藩の収量は、7万1千4百余石とされていますから、平年作の2割6分に過ぎない数量でした。当時の人口は、25万7千959人といわれているので、1人年間の飯米1石としても18万石余の不足となったのです。

そこで、郷蔵の貯糶を放出し救米にあてましたが、それとて貯糶全部を放出したわけではなく、翌年の作柄の見通しがつくまで保留されたのもあったので大変な困難があったものと思われる。

(ロ) **明治17年(1884)の凶作**。明治の凶作は、2年と35年が大凶作であったと一般にいられていますが、記録によるとこの年も「県下全般平均5分作、その惨状見るに忍びざるものあり」(『ふるさと西目屋』)という程の凶作でした。凶作に加えて、経済不況と米価下落により、農村は大いに疲れきっていました。

このときの状況を視察した内務省の御用掛(注、内務省からの命令で視察に来た人)は、次のように報告したとされています。

「県下窮状の原因は、一般の不景気と米価の下落によるものであるけれども、近因は明治17年の凶作にある…(中略)特に西津軽郡と上北郡では、土地を所有しない者は勿論のこと、少し土地を所有する者も、17年の凶作のために打撃を受け、漸く種籾を得るに過ぎず、中には収穫皆無のところもあった。(中略)県下農村の中には、夜着蒲団を持たず、藁藁を敷き、藁を被って寝に就くもの多く、東津軽郡では常食として、蕎麦を皮のまま摺り砕いたものを練って用い、(中略)これさえ、4～5月に至れば尽きんとする状態である。かくて、青森県の住民は、概してほとんど牛馬と同様な生活を送るもの十中七、八にして、その状況を目撃すれば驚愕の外なく(後略)」。

この年の県の収穫米は、31万6,000石で、平年作より4割5分の減収であったので、農民の窮状は充分にわかりますが、半作程度の作柄は津軽藩においては常にあったことで、それほど驚くことではありませんが、中央から来た視察官にとっては、非常に驚くべき生活程度だったのです。

(イ) **明治35年(1902)の凶作**。この年は、月早々から歩兵第5連隊が雪中行軍で199名の凍死者を出すという大惨事があり、春先から人々の心は穏やかではありませんでした。

気温も低温続きで、6月～8月の平均気温は17.5°Cという低さであったため、青森県は5分作とされ、反収は6斗2升でした。西津軽郡では、7割の減収で、平均反収が4斗5升しかなかったといわれています。

(ニ) **明治38年(1905)の凶作**。この年は、宮城、岩手、福島 の3県は大凶作で、1～3分作とされていますが、青森県では、西津軽郡及び上磯地方が最も惨状を極めたといわれています。

③ 大正期の凶作(1912～1926)

近代化の波は、市民の間に新しい生活様式を植え付けていたとはいえ、農村では相変わらずの生活が続いていました。

ひとたび凶作になると、大きな苦難をなめさせられていたのです。

(イ) **大正2年(1913)**、この年は、春から近年に例のない天候不順で米作への影響が心配されていました。

作柄予想も第1回が75万3千石、第2回が46万9千石と低くなり、ついに実収は18万3千石と、県の平均指数は22%となりました。

津軽地方では、弘前市が64%と一番高く、次いで中津軽郡の41%、南津軽郡が27%、西津軽郡が24%で県平均より高く、北津軽郡では21%と低い指数でした。

この凶作で多くの人々は、昔から飢饉時の食糧としていた草や木の皮、あるいは、米を少々入れた干菜汁、大根などで飢えをしのいだといわれています。

この地方に、「泣く子も鍋の中を見て泣け」ということわざがありますが、この年の農村の生活は、まさにこのことわざにピッタリとあてはまる惨状でした。

しかし、各地からの義捐金や救済物資が続々と寄せられ、それに県や市町村も救済事業をおこしたため、餓死者は出ませんでした。健康低下によって疫病が流行し、また、犯罪や娘の身売りがいたるところで見られたといわれています。

④ 昭和期の凶作(1927～1988)

昭和に入ってから20年までは、経済不況、戦争、そして敗戦と、人々は苦難の生活を送っていました。

このような時期に幾度も凶作に襲われたのです。

(イ) **昭和6年(1931)の凶作**。この年は春早々から天候不順で種まきの時期が例年より遅れ、苗の成育が大きく遅れていました。

低温が7月中も続いたため、稲の株わかれが少ない上に出穂成熟が20日以上も遅れてほとんど未熟米となり、ついに凶作となりました。

津軽地方では、約2割の農家が7割の減収、2割3分の農家が5割の減収で、中でも東・西両津軽郡は大きな被害がありました。

一般の農家は、たちまち飯米に困り、11月頃になると未熟米を粉にして馬鈴薯、みそを混ぜて食べたり、さらには、野草や海藻などで命をつないだといわれています。

また、小学校の欠食児童が日に日に増加し、貧しい農家の娘の身売りが続出するなどその生活は悲惨なものとなりました。

県外に売られた娘の数は、2千4百余人にものぼり、その傾向は翌年まで続いたといわれています。



凶作時の老いたる農民の姿 大正3年1月
〔ふるさとのあゆみ 南津軽〕津軽書房



冷害凶作を嘆く農民 大正2年
〔ふるさとのあゆみ 北津軽〕津軽書房

県は、政府手持米の低価払下げをうけ、翌7年3月から配給をはじめましたが、価格は、月を追って高くなり農民の不平を買うようになりました。払下げ量は、15万7千石余にも及びましたが、その代金2百数十万円は結局農民の負債となって残ったとされています。

(ロ) 昭和9年(1934)の凶作、この年は、6年の凶作よりもさらに収量が低く、大正2年以来の凶作といわれました。県の推定実収高は、59万8千413石で、津軽地方では、とくに東、南両津軽郡で大きな被害がありました。

この時の県内の救済を要する農家数は、3万7千余戸にも及んだといわれています。この凶作地帯に寄せられた義損金は41万6千円余だが、これも焼け石に水で、欠食児童や娘の身売りが続出しました。

『青森県近代史年表』によると「県下欠食児童1万600名、この年本県売春婦5,125名」とあり、大きな社会問題となりました。

(ハ) 昭和16年(1941)の凶作。続いていた日中戦争が、日米開戦となり、国内は臨戦体制で経済統制がきびしく、作物への肥料や農薬なども充分ではありませんでした。

この年は、春から天候不順で稲の成育が遅れ、収穫皆無が県全体で1万981町歩にものほり、71万石の減収となりました。

特に、県が新品種として指定し、植え付けを奨励した、農林16号がほとんど青立ちで実入りがなかったことが被害を大きくした一因であったといわれています。

(ニ) 昭和20年(1945)の凶作。長い戦争は、日本の敗戦という結果で終わりました。

この年は、全国的な不作でした。青森県の予想収穫高は、72万5千500石で前年より70万4千余石少ない半作、平年に比べても51万7千余石の減収で5分8厘の作柄でした。

このため、秋から、日本全土の食糧不足はますます進み、農家には、供米の強権が発動され、飯米を残してすべて政府米として供出しなければならなかったのです。中には、自分で米を作りながら「供出米」として取られ飯米にも事欠く農家も多くありました。

(ホ) 郷蔵

津軽地方では、「ごうぞう」を郷蔵と書き、「ごじょ」と呼んできた。凶作に備えて穀物を貯蔵する蔵のことを郷蔵という。当時は現在ほど農業技術が進んでいなかったために、異常な低温が続いたり、水害があったりすると必然的に米が不作となり、食糧難に遭遇していた。郷蔵に貯蔵された穀物は、農作物が不作になったときに使われ、凶作年に有効に利用されてきた。

郷蔵は津軽藩の時代にすでに見られ、1700年代前半には、各村(当時の各集落ごとの単位)ごとに郷蔵が作られ、そのなかにはおよそ1軒3升の割合で粃が貯蔵されていた(弘前藩政事典刊草稿)。貯蔵された穀物には粃のほかに、そば、麦、稗などもあった。1830年には富豪鶴屋が米300俵を寄贈している(鶴屋文書)。郷蔵は県政に入っても続き、青森県は、大正2年、昭和5、6年の大飢饉では郷蔵が役に立ったことから、それ以降、郷蔵の建造を進めた。

郷蔵の運用、利用に関する管理責任者は村の長であり、開閉は厳重に行われてきていた。五所川原市原子にある郷蔵(後述)の規約には、郷蔵の開閉には区会議員2名以上の立会いを要し、収入役がこれを行うが村長の命令がないとできないことになっており、また、乱俵あるときはこれを整俵しなければならないとしている。郷蔵の維持管理が厳しく行われていたことがこの規約からも伺える。

藩政時代には純粋な備凶貯穀の郷蔵であったが、近代に入り、貯蓄貸出型の郷蔵になり銀行的・高利貸的性格を持つようになり、利用の仕方も変わり、次第に衰退の道をたどった。戦後は住宅として貸し出したりして、次第に郷蔵はなくなり、現在では、五所川原市に唯一「原子・俵元・羽野木沢郷蔵」が残っている。この郷蔵は約100年前に建てられたものである。

表4-24 過去の凶作記録

時代	年号	西暦	津軽の凶作記録	
江戸	元和元年	1615	大凶作。初夏頃までのヤマセに加え、6月16日の大霜で皆無作が決定的となる。12月頃より餓死者が出始める。	
	〃 2年	1616	前年に続き大凶作。飢死者、逃散者多数。赤稲だけは成実、これを上納した者83人士分に取立てられた。	
	寛永17年	1640	凶作。餓死者が多数出る。	
	〃 18年	1641	8月頃より冷雨続きで凶作。他領米の買付けと貯蔵糧があったので死人少し。	
	〃 19年	1642	3年続きの凶作で餓死者多し。	
	元禄5年	1692	天候不順、凶作。「青立ちの飢饉」といわれる。	
	〃 8年	1695	7月3、4日雪降る。14日、厚霜一円を覆ふ。大凶作となる。 疫病流行と重なり死者続出。	
	〃 9年	1696	凶作。前年8月から1年間に餓死者10万人、空家7千軒、荒田1万2千町歩。	
	〃 11年	1698	作柄7～8分。	
	〃 12年	1699	天候不順、凶作がみ。	
	〃 14年	1701	この秋凶作。	
	〃 15年	1702	天候不順、この秋凶作。「卯の日の彼岸入りは不作とうわさあり」。	
	宝永2年	1705	夏ヤマセ、秋凶作飢饉、米の売り手なし。	
	〃 4年	1707	冷雨大風で大飢饉。	
	戸	〃 7年	1710	春より凶作気配。米、モミ、売る者なし。
享保元年		1716	凶作。	
〃 5年		1720	凶作。大雪のための農家秋じまい不能。赤田・広田組に救米。	
〃 14年		1729	天候不順。ぬれ稲積上げる。	
元文5年		1740	大凶作。弘前に乞食小屋を建て窮民を救う。	
寛延2年		1749	大凶作。巳の年とさわぐ。乞食、非人捨え子多し。青森、深浦、新田地方餓死者山のごとし。	
時		宝暦5年	1755	春から寒冷続き凶作。藩家老の素早い対応で餓死者なし。
		明和3年	1766	この年凶作。
		〃 4年	1767	津軽領不作。
		安永元年	1772	夏中寒く東風吹き続き5～6分の作柄。
	〃 5年	1776	凶作。春から天候不順。土用中快晴の日とてなく、東風吹き続け、稲は立ち枯れ。	
代	天明2年	1782	天明2年～5年と続いた大凶作は、餓死者の白骨死体が山野に満ちるなど、大凶荒の惨状の跡をとどめた。 2年は、4分作のため、米をすべて上納させ、酒、みそ、しょうゆの製造節約、米の他領売り出し禁止等の対策を講ずる。	
	〃 3年	1783	この年、春から寒冷続き。8月12日大風、15日大霜という天候不順のため凶作。米価高騰。世情を無視した藩は貯米を他領に移出。 移出阻止のための騒乱、強訴する者が現わる。 藩主信寧が救済策を講じたが、時すでに遅く、犬・猫・牛馬・人肉まで食う、さながら生地獄が出現。餓死者8万1,702人(当時領内人口の1/3)、逃散者1万人。(3年8月～11月)	
	〃 4年	1784	前年の凶作救済策として幕府から1万両を借り受け、米の買い付けを急いだが、諸国不作のため買い付け少量。春には飢饉を防ぐため耕作の奨励や、疫病流行のため数十人の医師を領内巡回医療に当たらせる。しかし、田植えのおくれ、干害、風害や多くの廃田のため作物は半作。 3年続きの凶作で、水田荒廃1万3,997町歩余、畑の荒廃6,931町歩余、死者10万2千余人、逃散者3万人、死んだ馬1万7千2百頭余。	
	〃 5年	1785	夏中寒冷のため7分作。	
	〃 6年	1786	凶作。要するに天明時代は凶作続きであった。	

時代	年号	西暦	津軽の凶作記録
江戸時代	文化10年	1813	天候不順6分作。百姓一揆起こる。6月22～26日大光寺、尾崎、猿賀の諸組強訴。28日木造、広須、藤代、高杉の諸組2,000人亀甲門に押しよせ強訴。11日亀甲強訴の首謀者藤田民次郎斬罪。
	天保3年	1832	凶作。津軽藩の作柄、5分6厘7毛。
	〃 4年	1833	春から天候不順で凶作飢饉。7月に入り逃散者出はじめる。8月半ばには、多数の餓死者出る。
	〃 6年	1835	春から天候不順、凶作飢饉。
	〃 7年	1836	大凶作飢饉。飢渴の相様けわしくなる。他領への逃散者続出。百姓の強訴あり。
	〃 8年	1837	凶作。逃散者出る。領内の治安ますます悪化。
	〃 9年	1838	天候不順凶作。疫病流行、死亡者多数、治安極度に悪化。
	〃 10年	1839	天候不順で凶作。人々不安におののく。
	〃		天保の凶作は、3～4年、6～10年と続き、死者3万5千616人。逃散者4万7千43人、空屋1万3千76軒、廃田9千480町歩。死んだ馬1万9千989頭という大きな傷跡を残した。
	〃	慶応2年	1866
明治時代	明治2年	1869	春より天候不順で大凶作。
	〃 17年	1884	この年凶作。経済不況と米価低落により農民大いに困る。県下の収穫米31万6,000石で、平年より4割5分の減収。住民の多くは牛馬同様の生活を送る。
	〃 35年	1902	大凶作。明治2年の凶作とともに明治の二大凶作といわれている。
	〃 38年	1905	凶作。青森県の西北両津軽及び上磯地方とくに惨状極める。
大正時代	大正2年	1913	天候不順で大凶作。草や干菜などで飢えをしのぐ。
	昭和元年	1926	この年凶作。
昭和時代	〃 6年	1931	早春から天候不順、出穂が遅れ、ほとんど未熟米となり凶作。津軽地方でも5～7割の減収となる。小学校の欠食児童増加、貧農の子女身売り続出。
	〃 9年	1934	天候不順により凶作。貧農の子女身売りが続き、社会問題となる。本県の売春婦女5,125名。
	〃 16年	1941	本県冷害凶作。71万石減収、皆無作1万981町歩、リンゴも不作。
	〃 20年	1945	稲作前年の半作。農家に供米の強権が発動され、飯米に事欠く農家もあり。 (注、明治5年以前の月日は旧暦)

2) 岩木山の噴火

岩木山は、遠い昔からの火山活動によって現在の形となっています。

太宰治の作品、『津軽』の中の一節に「…岩木山が素晴らしく見えるのは、岩木山の周囲に高い山が無いからだ。……」とあるように、単峰で標高1625m、本県の最高峰ではありますがけっして大きい山ではありません。

しかし、その円錐形で美しい姿は、“霊峰、あるいは、“秀峰、と呼ばれ古くから津軽の人々の、信仰の対象とされ、親しまれてきました。津軽民謡や多くの学校々歌に岩木山が歌い込まれているのは、それを物語っています。

また、風をさえぎり、水を恵み、農作物の生産に大きな役割を果たしてきました。反面、度々噴火を起こし人々を苦しめてきたことも事実です。

古い時代の岩木山は、頻りに火を噴き、石を飛ばし、灰を降らせていたものと思いますが、記録に残るものをまとめると次表のとおりになります。

この中のほとんどは、その内容が詳細ではありませんが、慶長5年(1600)6月「岩木山大爆発、上崩れ、土石雨の如く、冥暗2夜3日」、寛永17年(1640)7月15日「岩木山鳴渡り、灰降る事3日、国中闇の如し」、天明3年(1783)正月元旦「岩木山噴火煙立ち始め、それが続いて、2月10日、ついに噴火、ものすごい溶岩を吹き飛ばす」、などは、かなり大規模の噴火があったものと推測されます。

岩木山の噴火は、文久3年(1863)を最後になりました。



岩木山と岩木川（五所川原市より望む）

表4-25 過去の岩木山の噴火記録

時代	年号	西暦	津軽の噴火記録	
織 豊 時 代	天正17年	1589	噴火のため岩木山神社火災	
	慶長2年	1597	正月石、砂、灰降る。	
	〃 3年	1598	正月、岩木山が噴火した。	
	〃 5年	1600	6月、岩木山大爆発、上崩れ土石雨の如く冥暗2夜3日。	
	〃 10年	1605	10月2日、岩木山上より怪光とぶ。	
江	元和4年	1618	正月、灰降る。	
	寛永17年	1640	7月15日、岩木山鳴渡り灰降る事3日、国中闇の如し。	
	貞享2年	1685	2月29日、夜より3月1日夜まで怪光西より飛来す。	
	元禄7年	1694	5月、岩木山大噴火。	
	宝永6年	1709	3月、岩木山硫黄坑噴火。	
	宝暦9年	1759	7月灰降る。	
	〃 10年	1760	怪光とび勢、雷の如し。	
	明和7年	1770	正月8日、鳴動。	
	戸	安永元年	1772	7月怪光西より飛来。
		〃 8年	1779	6月神宝とぶ。
天明3年		1783	正月元旦、岩木山に噴煙が立ち始め、それが続いて2月10日、ついに噴火、ものすごい溶岩を吹き飛ばす。	
時	寛政2年	1790	5月灰降る。	
	〃 5年	1793	2月22日、岩木山噴火。	
	〃 6年	1794	3月3日、岩木山噴火。	
	〃 12年	1800	4月18日、岩木山噴火。	
	文化4年	1807	2月25日、岩木山硫黄山噴火。	
	天保4年	1833	4月11日、岩木山噴火。	
	代	弘化元年	1844	4月7日、岩木山噴火。12月13日、岩木山硫黄吹き出る。
		〃 2年	1845	2月28日、硫黄を吹き出して8月まで続く。
		安政3年	1856	4月17日、岩木山噴火。
		文久3年	1863	2月5日、岩木山噴火、溶岩を吹き飛ばす。
			(注、月日は旧暦)	

3) 地震

地震国日本は、大昔から地殻の変動や、火山活動により大地は揺れて多くの被害をうけてきました。津軽地方を襲った地震については、有史以前は別として、多くの記録があります。

① 藩政期以前の地震

記録に見られる古いものでは、応神天皇の時代？(西暦800年代)「山津波、海津波あり、陸地陥没して日本海と、陸奥湾出現する」。応徳3年(1086)堀河天皇の時代「津波(白髭水)起こり、津軽平野陥没して入海となる」(以上『新釈青森県史資料編』)と陸地が陥没して海が出現したとしていますからいずれも大地震があったものと思われる。

また、興国元年(1340)8月、繁栄を極めていた、十三村一帯が、潰滅したと伝えられる大津波は、その原因が、台風によるものか、地震によるものかは明らかではありませんが、藤崎以北全滅、死者10万人といわれているので地震もあったものと想像されます。(注、この津波については「あるいは延元元年ともいう」としている記録もあります。『岩木川物語』には、「興国元年(1340)山海の津波にて津軽は入海となる。六郡の内、奥法、江流末、馬郡其他ともに山崩れ、津軽は転移すと云へり。此節外ヶ浜南部の間も海となり(後略)」と記されているので地震も想像されるところです。)

② 藩政期(1590~1867)の地震

藩政期に入ると慶長5年(1600)「岩木山大爆発、大地震あり、土石降る」をはじめとし数多くの記録が見られます。主なものとして、明和3年、寛政4年の地震があげられますが、この他にも「近年覚えなき強震」あるいは、「大地

震頻発」などの記録があります。

(イ) 明和3年(1776) この年正月28日午後6時頃未曾有といわれた大地震が津軽地方を襲いました。その震動は翌日の明け方まで120回を数え、領内は、惨憺たる被害をうけました。

この時の被害状況について次のような記録があります。(『柏村郷土史』)

「この地震で、潰れ家、焼失家屋共6,343軒、死亡者1,311人、斃馬(注、死んだ馬)401頭と記録にある。尚この地震のため、下古川村大阪三郎兵衛の酒倉が潰れ流れた酒は、川をなした…。」

被害は、とくに青森・板柳地方が大きかったらしく『板柳町史』には、赤田組(板柳地方)の被害は、「一、板屋野木蔵3押潰れ、両蔵残らず押潰れ、一、潰れ家671軒、潰れ土蔵8、焼失家11軒、焼失蔵10、一、潰死男63人、女66人、焼死男14人、女17人、一、潰死馬19匹、一、板屋野木村観音堂大破、竜淵寺1軒潰れ、社家1軒潰れ、長延寺1軒潰れ、大善寺1軒潰れ焼失、正休寺1軒潰れ焼失、男1人、女1人焼死、一、鶴田村称光寺庵外1ヶ寺潰れ、一、木筒村修験2軒潰れ」と書かれており、当時の赤田組の戸数、およそ8割の被害で、ほとんど廃墟になったものと思われるとしています。

また、各所で地割れが生じ、田畑、土木施設、用水堰などにも大きな被害がありました。

このような状況で人々は皆仮小屋を建て、5月頃まですごしたといわれています。

藩では、この大地震のため幕府から4千両を借り入れ救済に当てました。

(ロ) 寛政4年(1792)12月28日午後2時頃、20年来といわれる大地震が発生しました。西浜では、潰れた家154軒、焼失した家17軒、死者12人という大きな被害がありました。

大戸瀬の千疊敷は、この地震で露出したといわれています。

③ 明治以降の地震(1868～1988)

明治に入ってから大正までは、津軽地方で被害の出た地震の記録はなく、昭和期に集中しています。

記憶に新しいところでは、昭和43年、同58年の地震が挙げられます。

(イ) 昭和43年(1968)の地震(十勝沖地震)。5月16日午前9時49分頃、北海道十勝沖を震源地とした大地震が発生しました。

震源の深さ20km、地震の規模はマグニチュード7.8で、本県の青森・八戸で震度5、弘前では震度4を記録しました。

被害区域は、北海道南部と東北北部に及び、本県の被害は、太平洋沿岸地帯で大きな被害がありました。

当事務所管内の被害は、道路関係がとくに大きく、岩木川の被害は、圍繞堤に亀裂がありましたが大したものではありませんでした。

この時の県内の被害状況は、東奥日報の集計によると次の図4-21、表4-26のとおりとなっています。

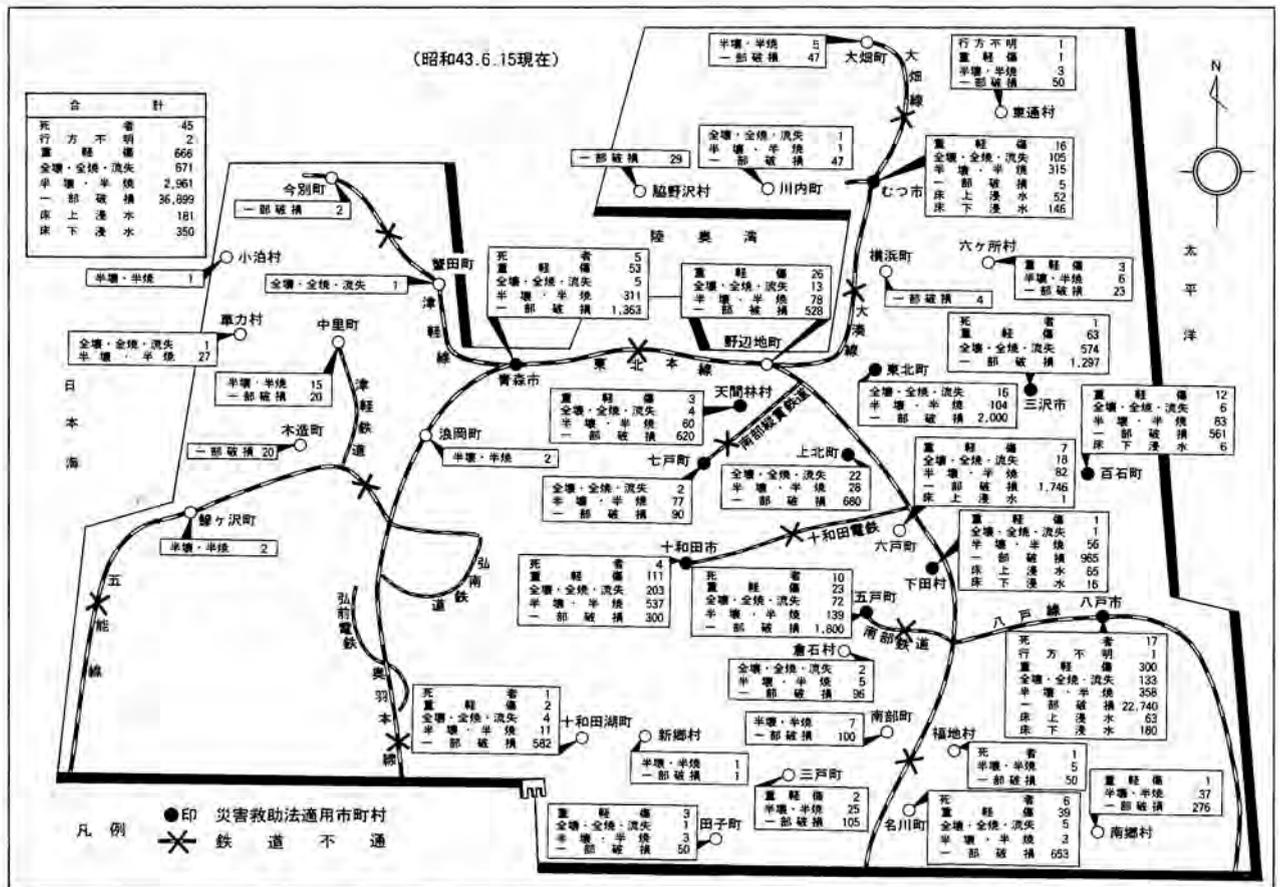


図4-21 十勝沖地震県内被害状況

表4-26 県内被害額一覧表

県内被害額一覧

(昭和43年6月15日正午現在 単位千円)

被害金額総額467億6645万7千円

区分	金額	区分	金額
◇建て物被害	6,823,142	鉱山施設被害	52,711
◇土木関係被害	4,634,910	観光施設関係被害	14,834
土木施設被害	3,004,287	◇民政労働関係被害	76,671
泥汚施設被害	1,478,400	社会福祉施設	40,334
都市計画施設被害	151,290	その他の施設	21,076
その他の施設被害	933	診察施設	11,240
◇農林関係被害	11,874,308	行政機関等	4,021
農地農業用施設被害	6,049,900	◇衛生関係被害	3,621,017
開拓施設被害	23,850	◇文教関係被害	
林業施設被害	2,508,693	(国立八戸高専の被害266,449を含む)	1,736,031
農作物関係被害	1,760,068	◇公営企業施設関係被害	63,095
畜産関係被害	101,253	◇鉄道施設関係被害	5,084,000
共同利用施設被害	593,975	◇電力、通信施設関係被害	1,786,000
果樹施設被害	66,469	◇建設省関係施設被害	760,000
農地、農業用施設等小災害被害	563,100	国道関係被害	450,000
◇水産商工関係被害	10,221,652	河川・海岸関係被害	310,000
商工業関係被害	9,274,083	◇営林局関係施設被害	84,821
漁港施設および海岸施設被害	363,650	合計	46,766,457
水産業被害	456,074		
京庄ガス、都市ガス施設被害	60,300		

(ロ) 昭和58年(1983)の地震(日本海中部地震) 5月26日12時、秋田西方沖を震源地とした大地震が発生しました。震源の深さは約40km、地震の規模はマグニチュード7.7で、各地の震度は深浦・むつ・秋田で5、青森・八戸・江差(北海道)・盛岡・酒田で4を記録し、その規模は、日本海側で発生した地震としては昭和39年の新潟地震を上回り過去最大のものでした。

日本海側では、津波の発生は少ないといわれていましたが、この地震では、津波により大きな被害がありました。本県の犠牲者17人は、ほとんど津波によるものでしたが、地震発生から7分後に、深浦で津波の第1波が観測されるなど、津波警報が間に合わないほどの早さであったのです。

この地震による被害総額は、青森県被害対策本部の調べによると、518億円を超えています。その内容は、土木関係が146億34万円余が一番多く、次に多いのは農林関係・建物関係で、いずれも100億円以上となっています。

当事務所管内の被害は、河川・海岸及び道路と担当事業全般に及びましたが、特に岩木川下流部に集中しました。被害をうけた堤防のほとんどは、旧岩木川の河道部、あるいは旧河川を締め切った上に築堤した箇所でした。岩木川下流部は、岩木川によって運ばれた堆積物によって造られた湿地帯で、堤防は、このような軟弱地盤の上に大正末期から昭和初期にかけて施工されたものです。

当時の岩木川は、蛇行をくり返して流れていました。この蛇行を修正するため川を締め切る形で築堤した箇所は、あちこちに見られます。

今回の地震では、こういう所がすべて被害をうけており、横断亀裂や陥没などその程度は、他に比べて非常に大きくなっています。

表4-27 日本海中部地震青森県内被害状況 (被害額千円単位)

区分	被害者	被害の内訳																					
人的関係		死者17名、負傷者25名(重傷者7名、軽傷者18名)																					
建物関係	10,165,095	住												家		非住家							
		全壊			半壊			一部破損			床上浸水			床下浸水			公共建物	その他建物					
		棟	世帯	人員	棟	世帯	人員	棟	世帯	人員	棟	世帯	人員	棟	世帯	人員	棟	棟					
		被害数	447	447	2,012	865	865	3,805	3,018	3,018	13,042	62	62	228	152	152	685	2,582					
被害額	3,129,000			3,027,500			3,621,600			21,700			15,200			350,095							
環境保健関係	1,393,010	区分	医療施設			ゴミ処理施設			し尿処理施設			環境衛生営業施設			水道施設			保健衛生施設					
		被害数	61 施設			13 施設			5 施設			29 施設			525(41市町村) 箇所			1 施設					
		被害額	695,578			52,911			16,458			143,553			481,510			3,000					
商工労働関係	7,395,154	区分	商工業等			観光施設																	
		被害数	4,931 件			13 件																	
		被害額	7,371,254			23,900																	
農林関係	10,397,511	水稲関係		畑作野菜関係			畜産関係			共同利用施設関係		農地・農業用施設関係		林業関係									
		区分	浮苗	苗下	海水浸水	陥没隆起等	陥没隆起等	家畜	飼養施設	牧草	共同利用施設	倉庫	農地	農業用施設	崩壊地	治山施設	林道	林産施設	林産物				
		被害数	ha	ha	ha	ha	ha	頭	カ所	ha	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所				
		被害額	654,288	37,281	1,077	240,067	22,178	492	52,919	228	622,147	15,945	750,000	6,920,000	550,097	230,849	158,723	71,600	9,620				
水産関係	5,271,296	区分	漁船	漁具等	漁港施設	共同利用施設	非共同利用施設																
		被害数	853 隻	4,445 件	76 箇所	28 箇所	38 箇所																
		被害額	2,345,852	1,380,600	1,274,200	96,530	173,114																
土木関係	14,634,275	区分	河川	砂防	道路	橋梁	港湾	海岸	下水道	公園	公園住宅												
		被害数	244 箇所	31 箇所	711 箇所	49 箇所	44 箇所	11 箇所	5 箇所	5 箇所	5 箇所												
		被害額	3,737,016	588,146	8,487,924	1,052,759	545,390	100,200	16,200	9,200	95,440												
教育関係	2,503,792	区分	幼稚園	小学校	中学校	高校	盲・聾・養護学校	社会教育施設	教育関係施設	文化財													
		被害数	5 園	152 校	70 校	41 校	7 校	74 施設	5 施設	16 件													
		被害額	14,160	697,059	870,842	105,091	4,483	277,994	4,380	529,783													
県庁舎等関係	35,269	区分	県庁舎	合同庁舎	公所																		
		被害数	1 箇所	3 箇所	35 箇所																		
		被害額	8,577	1,218	25,474																		
警察関係	19,554	区分	庁舎	駐在所	公舎	交通安全施設																	
		被害数	9 箇所	6 箇所	4 箇所	206 箇所																	
		被害額	13,934	608	525	4,487																	
合計	51,814,956																						

(資料 青森県災害対策本部対策連絡部)

青森工事事務所では、地震発生後速やかに対応し、応急復旧工事を開始し、さらにその後、本復旧工事を行い、翌59年11月末に全工程を完了させました。

また、出水期が迫っていたので、直ちに復旧工事を行い、二次災害の防止に努めたことに対し地元関係者から高い評価をうけました。

表4-28 青森工事事務所所管施設の被害

(単位：千円)

区分	被害箇所	被害額	被害内容	
河川	岩木川	29カ所	2,020,609	堤防、高水護岸、囲繞堤等
	馬淵川	1	10,154	樋管護岸及び水路
	計	30	2,030,763	
海岸		8	126,747	堤防沈下、離岸堤
道路		1	4,070	橋台
合計		39	2,161,580	



陥没した道路 (西津軽郡木造町)



被災状況 (西津軽郡森田村)



(昭和58年5月27日 東奥日報)



避難を始めた釣り人達

①北突堤海岸線を津波が越流



避難が間に合わず津波にのみ込まれた釣り人と避難を始めた車。

②水戸口内に津波が流入



津波に追いかけれられながら、ようやく間にあった車と津波にのみ込まれた釣り人の乗ってきたバイク。

③南突堤が津波で水没

日本海中部地震で十三湖水戸口を襲った津波の連続写真
(市浦村役場職員が撮影したもの)

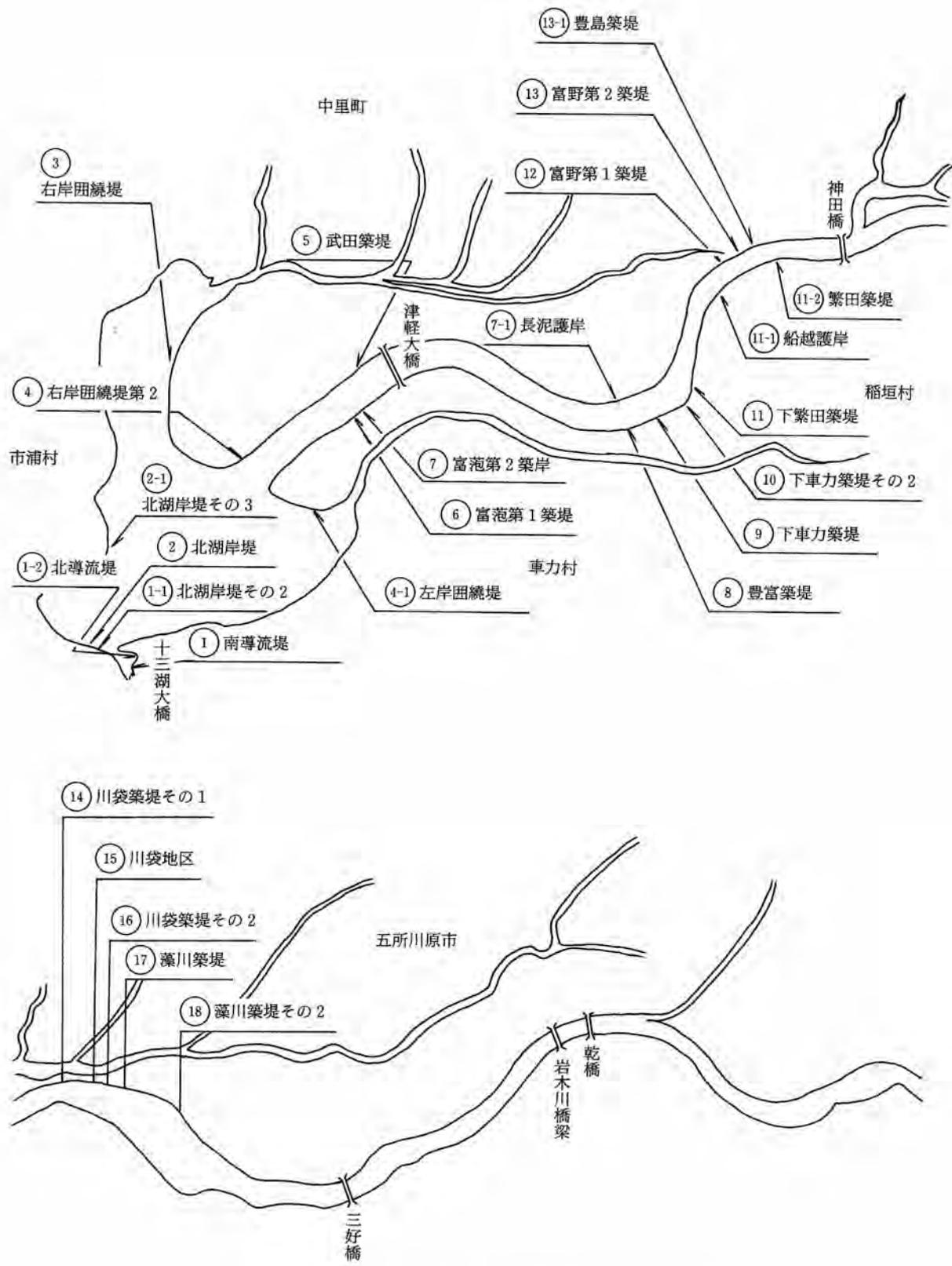
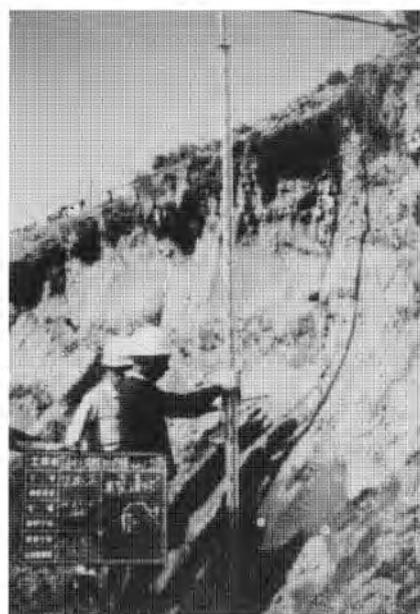


図 4-22 日本海中部地震による岩木川被害箇所位置図

岩木川堤防被災状況及び復旧状況写真



堤防天端の縦断亀裂（藻川築堤）



堤防堤内側亀裂深確認（繁田築堤）



右岸囲繞堤のブロック破損



応急復旧、土のう施工（豊富築堤）



法覆工施工（右岸囲繞堤）



富港第2築堤



二重締切の中詰土砂敷均し状況（川袋築堤）



豊富築堤被災状況（裏小段の亀裂）

表4-29 過去の地震記録(1/2)

時代	年号	西暦	津軽の地震記録	
織豊時代	慶長5年	1600	6月13日、岩木山の南方が崩れ、1晩中地震があった。	
	寛永4年	1627	2月、地震、地面割れる。	
江戸時代	// 15年	1638	6月14~15日、大地震、岩木山鳴動し、昼灰降り夜のごとし。	
	// 17年	1640	7月14日より、大地震、昼夜20回ゆれる。	
	承応2年	1653	12月18日、領内大地震。	
	寛文2年	1662	5月1日、大地震。	
	// 12年	1672	閏6月5日、地震あり、岩木山の南方が崩れる。	
	延宝3年	1675	5月9日、津軽地方に大地震。	
	// 4年	1676	7月13~19日まで深浦付近に大地震。	
	// 5年	1677	1月25日~7月大地震頻発。	
	天和元年	1681	4月、大地震。	
	// 2年	1682	10月14日、11月14日、大地震。	
	貞享3年	1686	2月、大地震。	
	元禄5年	1692	5月中下旬、大地震頻々。	
	// 7年	1694	5月27日に大地震あり、四方の山が鳴動し、岩木山硫黄平へ大石が転び落ち、四方が火事になった。29日まで20回位。各地で亀裂。	
	宝永元年	1704	4月24日夜半、大地震あり、酒屋のつぼから酒がこぼれるほどの揺れ。深浦、能代地方では死者58人、焼失家屋758軒、壊家435軒。その他領内では堤防の決壊や田畑の被害があった。深浦の海浅くなる。	
	戸	正徳元年	1711	元旦に大地震。
		// 2年	1712	4月22日、大地震。
		// 3年	1713	3月~4月、地震頻発。8月大地震頻発。
	享保16年	1731	2月1日、大地震。	
	// 17年	1732	5月、時々地震。11月5日、大地震、城内所々破損。	
	// 18年	1733	3月29日、大地震。	
	元文2年	1737	1月~2月、時々地震。	
時	// 4年	1739	7月12日、大地震。	
	寛保元年	1741	7月19日、津軽に大地震、津波あり、殊に西浜、小泊、三馬屋付近の被害大。被害は西浜で流失家屋82戸、死者8人、船破損53隻、魚網1,300把。小泊で流失家屋43戸、丸木舟20隻、大船8隻のほか死者も多数あり。	
代	寛延元年	1748	9月14日、大地震。	
	宝暦12年	1762	12月24日~25日、強震、弘前では堀の水がはねるほどで、元禄16年の地震に劣らず。	
	// 13年	1763	正月中地震頻り、弘前最勝院で祈禱。	
	明和元年	1764	大地震。	
	// 2年	1765	2月11日、大地震。	
	// 3年	1766	1月28日、夕方から大地震があり、板柳、飯詰村の被害甚大。壊家、焼失家屋合わせて6,342戸、死者1,383人、死馬401頭。	
		// 6年	1769	6月9日、強震。
		// 7年	1770	正月地震。岩木山鳴動す。9月5日、天水おけの水こぼれるほどの強震。
		安永元年	1772	4月26日、強震。5月、時々地震。
		// 6年	1777	3月8日、強震。
	// 8年	1779	5月29日、弘前強震、地、雷のように鳴る。	
	// 9年	1780	6月19日、早暁強震。	
	天明元年	1781	2月13日、強震。	
	// 2年	1782	8月5日、強震、岩木山鳴動。	

表4-29 過去の地震記録(2/2)

時代	年号	西暦	津軽の地震記録
江戸時代	天明4年	1784	1月2日、強震。
	〃 8年	1788	4月11日、よほどの強震。
	寛政元年	1789	6月11日、近年覚えぬ地震。この月、時々地震。
	〃 4年	1792	12月28日、西海岸に大地震。つぶれた家154戸、焼失家屋17戸、死者12人。大戸瀬の千疊敷が露出。
	〃 5年	1793	1月1～12日(除6日)正月中地震頻発。
	文化3年	1806	2月中、時々地震。
	〃 5年	1808	閏6月16日、強震。
	〃 9年	1812	8月26日、地震。
	文政元年	1818	8月3日、強震。
	〃 4年	1821	8月16日、強震。
	天保3年	1832	2月中旬、時々地震。
	〃 4年	1833	10月26日、鯉ヶ沢付近に地震。
	〃 14年	1843	3月25日、地震非常に多く、近年覚えぬ地震。4月毎日強震頻発。 10月4日、強震。
	強化4年	1847	12月8日、地震起こり、黒石、猿賀付近は最も強く。
	嘉永5年	1852	5月9日、強震。
安政元年	1854	閏7月、当月地震多し。	
〃 3年	1856	4月23日、津軽海峡を震源とした地震があり、津波を伴った。	
〃 5年	1858	5月28日、8月23日、強震。	
万延元年	1860	6月10日、青森強震のため安方町の半蔵つぶれ、善知鳥神社内の大木5～6本倒れる。 明和以来の大地震。 (注、月日はすべて旧暦)	
昭和時代	昭和6年	1931	3月9日、県下大地震。
	〃 39年	1964	5月7日、青森県西方沖地震M6.7。
	〃 43年	1968	5月16日、十勝沖地震発生、本県では郡部地方の被害多く、津軽地方は軽微。
	〃 48年	1973	5月5日、岩木山地震、弘前震度4、被害なし。
	〃 53年	1978	6月12日、宮城県地震、弘前震度3、被害なし。
	〃 54年	1979	10月17日、西海岸で局地地震3回。
平成時代	〃 58年	1983	5月26日、12時、秋田西方沖を震源地とする日本海中部地震発生。 津波により17人死亡。建物全壊447棟。半壊865棟。1部破損3,018棟のほか土木関係の被害多く、被害総額は518億円を超した。岩木川堤防、圍繞堤など21億6千158万円の被害を受けた。
	平成6年	1994	12月28日、八戸で震度VIを記録するマグニチュード7.5の地震が発生、三陸はるか沖地震と命名された。 岩木川水系には被害は無かったが、八戸市を中心に南部地方に甚大な被害をもたらした。

三陸はるか沖地震による被害は1994年12月28日の本震によるものと1995年1月7日の最大余震によるものが主である。

2つの地震による、4月27日現在で青森県総務部消防防災課がとりまとめた青森県内の被害状況の内訳及び被害額は表4-30の通りである。

表4-30 平成6年(1994年)三陸はるか沖地震の被害(本震及び余震の被害額の合計)(1/2)

区 分	被 害 額	被 家 内 容 (被害額単位：千円)										
人 的 被 害	—	死者3人 負傷者783人										
建 物 関 係	12,258,420	区 分	住 家									非住家
			全 壊			半 壊			一 部 破 損			
		棟 数	世帯数	人 員	棟 数	人 員	被害額	棟 数	人 員	被害額	棟 数	
		被害数	72	101	247	427	446	1,421	9,009	9,586	30,663	231
被害額	925,716			2,428,048			8,663,178			241,478		
総 務 関 係	29,930	区 分	庁舎関係		公舎関係		社会福祉会館					
		被害数	3件		6件		3件					
		被害額	27,236		1,122		1,572					
生 活 福 祉 関 係	126,248	区 分	社会福祉施設			県施設関係						
		被害数	51件			1件						
		被害額	123,248			3,000						
環 境 保 健 関 係	1,944,724	区 分	医療施設	看護婦養成施設		水道施設	廃棄物処理施設		と畜・食鳥処理場			
		被害数	178箇所	2箇所		11箇所	10箇所		8箇所			
		被害額	912,276	14,861		666,203	181,786		114,025			
		区 分	火葬場		県施設関係							
		被害数	4箇所		10箇所							
被害額	24,528		31,045									
商 工 労 働 関 係	47,704,323	区 分	商業関係		工業関係		そ の 他	観 光 施 設	県施設関係			
			建物、什器備品等		建物、什器備品等		商 工 関 係	関 係	建物、備品等			
		被害数	12,194件		1,731件		3件他	35件	12件			
被害額	30,252,632		17,096,547		31,500	76,745	246,899					

表4-30 平成6年(1994年)三陸はるか沖地震の被害(本震及び余震の被害額の合計)(2/2)

農林関係	2,336,449	区分	農作物関係		農業関係施設	農地	農業用施設				
			荷崩等の品質低下		米倉庫等	畦畔法面崩壊等	水路法面崩壊等	農道路肩崩壊			
		被害数	りんご27.6t他		63件	89箇所	62箇所	40箇所			
		被害額	12,930		372,978	618,000	537,000	248,000			
		区分	農業用施設		林業関係		畜産関係	卸売市場			
			ため池堤体破損		林地崩壊	林業施設等	鶏卵破損等	路面陥没等			
		被害数	7箇所		0.1ha	23件	13t他	3件			
		被害額	191,000		60,000	24,240	83,504	143,000			
		区分	県施設関係								
			農産物加工指導センター他								
被害数	21施設										
		被害額				45,797					
水産関係	380,516	区分	共同利用施設		共同利用施設	地方公共団体施設	漁船	漁港施設			
			さけふ化場等		漁協事務所等	アワビ栽培施設等	小破				
		被害数	8箇所		2箇所	11箇所	2隻	22箇所			
		被害額	21,100		1,500	110,716	2,200	245,000			
土木関係	7,395,590	区分	県工事				市町村工事				
			河川	道路	橋梁	下水道	河川	道路	下水道	橋梁	
		被害数	3箇所	28箇所	3箇所	3箇所	5箇所	69箇所	75箇所	3箇所	
		被害額	72,000	624,000	55,000	57,200	41,500	936,600	1,041,400	211,000	
		区分	港湾空港関係		都市計画関係		砂防関係	県営住宅関係	市営住宅関係	道路公社関係	
		被害数	65件		20件		4箇所	10件	32件	53件	
	被害額		3,365,000		397,170	255,000	3,680	35,040	301,000		
公営企業関係	135,000	区分	工業用水道								
		被害数	7箇所								
		被害額	135,000								
文教関係	3,148,540	区分	県立学校・施設		公立学校・施設等		私立学校		専修学校		
		被害数	40校10施設		200校79施設		20校		1校		
		被害額	1,041,281		1,874,974		227,685		4,600		
警察関係	35,378	区分	警察施設	警察車両	備品						
		被害数	28箇所	22台	10件						
		被害額	22,716	1,994	10,668						
合計	75,495,118										

表4-31 被災状況一覧（建設省八戸出張所）

No.	河川名	箇所・施設名	被災区分・状況
①	馬淵川	河原本地先	堤防天端亀裂、幅3～5cm 延長300m
②		碓河原排水樋管	堤防天端亀裂、幅3～5cm 延長300m 高水護岸亀裂、格子枠に3～4cmの間隙
③		長苗代第一排水樋管	高水護岸亀裂、格子枠に3～4cmの沈下
④		長苗代第二排水樋管	高水護岸亀裂、格子枠に3～4cmの沈下
⑤		古川排水樋管	堤防天端亀裂、幅2cm、延長2m
⑥		一日市排水樋管	川表階段亀裂、幅3cm
⑦		工業用水水管橋	漏水による堤防法面洗掘

4) 干ばつ・病虫害・風害

津軽地方を襲った災害は、水害・冷害・地震ばかりではなく、干ばつ・病虫害・大風も度々発生し、その都度大きな被害をうけることもめずらしいことではありません。

貯水池など、灌漑施設が整備されていなかった昔は、「日照りが10日も続けば水ケンカが起きる」といわれていたように、度々水の奪い合いがありました。

また、「日照りにケガジ（飢渴）なし」ともいわれますが、これは、用水の確保が容易にできて、良好な天候が続いたときのことで、水不足は、稲の生育に大きな影響を与えていたのです。

科学的な防除方法がなかった昔は、度々病虫害がまん延して作物に大きな被害を与えていました。

これらの被害から逃れる手段として、神社やお寺で雨乞い・悪虫退散の祈禱を行ったり、村々では“虫送り”を行っていました。

寛永4年（1627）の記録に、「6月初頃より、稲虫夥敷在々虫祭仕る、然る処南光坊天海僧正へ仰せ付けられ御祈禱7日有り。」と津軽領内に稲虫の大発生があったことを伝えています。

虫送りは、新田地方に多く見られ、今ではこの地方の名物で五所川原市では、観光行事にしていますが、今なお、この風習があるのは、稲虫被害の凄じさを物語っています。

また、享保10年（1725）には、日照りのため、全弘前の修験僧による雨乞いの祈禱が行われ、板屋野木（板柳）、前田屋敷（現田舎館村）では、水の奪い合いでケンカがあったと伝えられています。

雨乞いの行事は、昭和の初め頃までありました。

リンゴの病虫害も度々発生しています。明治の初めに移入されたリンゴ樹は、他の作物に比べて収益性が高いことと、気候に適合したこともあり、栽培面積は拡大していきました。

ところが、綿虫などが発生し、その被害が広まるようになりました。そのため、袋かけ方法が普及しはじめ、やがてボルドー液などの薬剤散布が行われるようになったのです。

風による被害記録も多く見られます。とくに台風の場合は、雨を伴うので、水害を発生させたり、稲の倒伏や、リンゴの落果など被害を一層大きくしています。

岩木川下流部では、強い西風が吹くと、塩水が遡上して稲に被害を与えたことが度々ありました。



虫おくり（五所川原の観光行事となっている）

表4-32 過去の干害、病虫害、風害等の被害（1/2）

時代	年号	西暦	津軽の記録	
織豊時代	天正17年	1589	浪岡付近に虫害あり、虫祭りを行う。	
	元和4年	1618	地震強く地割れ、水不足。稲虫害。	
江戸時代	寛永4年	1627	地震、地面割れる。春より水少ない。この年、稲虫おびただしく、在方にて虫祭り行う。	
	〃 7年	1630	春立より水不足。	
	〃 17年	1640	水不足、大凶作。餓死者多し。この年地震。	
	明暦2年	1656	津軽地方大風。この年飢饉。	
	万治元年	1658	この夏、大日照り。凶作により酒造制限。	
	寛文11年	1671	11月25日大水大風。	
	延宝元年	1673	8月6日、大風雨、家屋樹木に大被害。	
	〃 2年	1674	8月風強く、作物吹きこぼれ半飢饉。	
	〃 7年	1679	6月から日照り、不作・日照り飢饉といわれる。この年は新検地と日照りのため農民苦しむ。	
	宝永4年	1707	8月19日、大風雨、岩木川、石渡川出水。大風で潰家192軒、田畑大被害。	
	〃 5年	1708	9月11～15、16日、大風、東通り外ヶ浜、飯詰より下、稲嶋立飛ばされる。	
	正徳元年	1711	4月4日、大風雨にて被害甚大。	
	〃 4年	1714	1月25、26日、風雨、岩木川洪水。	
	享保7年	1722	7月25、26日、大東風、たばこ、あい損害。	
	〃 10年	1725	大日照りのため全弘前の修験僧雨ごいの大祈禱。効験なく落首あり。6月日照りのため板屋野木、前田屋敷で水げんか。しかし、この秋は豊作となり、1俵は錢360文の大安値となる。	
	天文4年	1739	8月7日、大風雨、被害甚大、塩辛い雨降る。田茂木町山王堂向いの大木、蔵館大日堂向いの大木吹倒れる。	
	延享元年	1744	5月下旬まで大日照り。弘前、大円寺のため池で雨ごい祈禱。このあと6月から大雨あり。	
	時	〃 2年	1745	稲にスエシロ虫つく。虫祭り行われる。
		寛延7年	1748	8月10日、大風雨、畑作皆無。
宝暦10年		1760	領内3分1日照り。米1俵11匁。町小売り四升1匁。	
宝暦12年		1762	虫つき稲多く在々虫祭り。作柄は相応。	
〃 13年		1763	4月17日、大風、碓ヶ関街道並木倒れる。	
明和3年		1766	8月28、29日、大風、近来未曾有の大荒れ。	
〃 4年		1767	9月29日、大風、新田通り損耗多し。	
〃 5年		1768	地震のため日照りとなり、その影響で不作、虫つき。「地震のあとは日照り」といううわさ、しきりに立つ。	
〃 6年		1769	4月5日、大風降雹、死者47人。	
安永2年		1773	日照続きで減収11万5千石。領内に災異続きのため近衛家から除厄守札拝位。	
天明2年	1782	春以来天候不順。洪水、風雨、あられ、虫害のため凶作。減収12万2千石。虫害のため長勝寺で大施餓鬼祈禱。天明年間は冷害続き、悪疫流行などにより大飢饉となった。		
寛政元年	1789	夏中日照り。6月から寒冷、7分作。農村の二、三男、離農して都市に集中、農村裏微の傾向あり、津軽藩、その対策を訓令。		
〃 3年	1791	8月20日、大風雨。領地家屋損壊178戸、死者1人。		
〃 4年	1792	3月4日。4月2日。6月26日。7月14日。春より夏にかけて大風頻発。		
〃 8年	1796	5月24日、大風、破損大。7月14、15日、大風、諸所破損、倒木。8月5日、大風、碓ヶ関街道の並木1750本倒る。		
〃 10年	1798	風水害のため6分作。		

表4-32 過去の干害、病虫害、風害等の被害（2/2）

時代	年号	西暦	津軽の記録
江戸時代	享和2年	1802	6月8日、10～12日、暴風。
	〃 3年	1803	9月5日、風雨の雷、東根大鰐から浪岡とくに強し。
	文化元年	1804	6月24～27日。8月30日。9月1日。大風、大風雨、岩木川出水所々破損。
	〃 2年	1805	2月26～28日、大風、所々破損。
	〃 11年	1814	7月12日、大風、寺社の杉倒れ田畑にも損害。
	文政6年	1823	田方湯水につき、東照宮にて神采四社、百沢下居宮にて祈禱。
	〃 10年	1827	12月5日、黒石領大風雨、破損あり。
	天保10年	1839	6月7日、大風雨、岩木川9歩余出水、藤崎川で溺死9人。
	弘化2年	1845	12月30日、大風雨、城下の被害甚大、10軒に7～8軒屋根剥れる。
	安政6年	1859	7月25、26日、大風雨、碓ヶ関口並木松、176本倒れる。
慶応2年	1866	8月8、9日、大風で作毛皆無。高10万石のうち損耗7万余石、ほかに新田損耗17万1千余石、壊家25軒、半壊40軒。土蔵5ヵ所。	
明治時代	明治10年	1877	津軽地方の水田に虫害頻発。内務省官吏、来県して駆除を指導。
	〃 13年	1880	6月14日、稲虫駆除規則。警察署検査手を制定。
	〃 15年	1882	リング綿虫発生。以後まん延して明治期最大の虫害となる。
	〃 31年	1898	リング綿虫大発生。以後、廃田続出。
	〃 35年	1902	リング腐乱病まん延。廃田続出。
	〃 39年	1906	津軽一円にリングの袋掛け普及。
昭和時代	〃 41年	1908	津軽のリング園にモニリア病大発生、皆無作園も出る。翌年も大発生。
	昭和15年	1940	7月15日、台風でリング大量落果。
	〃 19年	1944	9月20日、暴風でリング155万箱落果。
	〃 24年	1949	8月のキティ台風でリング70万箱落果。水田、畑1,500町歩倒伏。
	〃 29年	1954	9月26日、台風15号でリング618万箱落果。（洞爺丸台風）
	〃 30年	1955	10月1日、台風22号でリング18万箱落果。
	〃 40年	1965	9月30日、台風23号でリング100万箱落果。
	〃 51年	1976	10月21日、県下に強風、リング359万箱落果。
	〃 54年	1979	10月19日、台風20号でリング200万箱落果。
	〃 56年	1981	8月21日、台風15号のリング被害6万1,000t、228億円。
〃 60年	1985	9月、台風13号でリング9万5,000t落果。 (注、江戸時代までの月日は旧暦)	
平成時代	平成2年	1990	台風19号。

5) 疫病

疫病は、太古から人間社会にとっては、切っても切れない宿縁で結ばれ、しばしば人間の集団を襲い絶滅の危機に陥し入れるという人間社会にとっては最も恐ろしい存在の一つです。

津軽地方でも、古くから疫病が流行していたと思いますが、藩政期以前の事については、記録がなく、その実態は不明であります。

藩政期に入ってから、領内に流行した疫病を、疱瘡、麻疹、風邪、天然痘などとはっきり病名を記したものや、単に、疫病流行、悪疫流行、あるいは瘧疾流行としたものも多く見受けられます。

凶作・飢饉が続くと、必ずと言ってよい程疫病がまん延しました。食糧不足が健康低下となり、それが疫病をまねき、多くの餓死者と病死者が出る結果となったのです。

天明4年には、広き田野に白骨と化した死体がゴロゴロしていたと、夥しい死者のあったことが伝えられています。飢えと、治療をうけられないまま、死に至ったあわれな姿でした。

当時の状況の中に、次のような記録があります。

- ① 享保3年（1718）、夏より疫病流行、みんなこれに罹り、働く者がなく作業が難儀した。

② 享保6年(1721)、疫病流行、身分の軽い者ばかり罹り、死者多数。藩主が長勝寺に百人余の僧を集め、時疫退散の祈禱をやらせる。

③ 明和7年(1770)、正月より咳気多く流行、老若男女を問わずこれに罹る。これは、みかんを移入した際異人が上陸し、このときより国中に咳気が流行した。人々は、これを“みかんカゼ”と言った。

④ 安永2年(1773)2月、湯治に行った梅田村の酸ヶ湯の者が、えたいの知れない悪疫に罹り、湯治半ばで村に戻ったところ、あつという間に村中に広がり、さらに領内一円にまん延した。藩では山伏に悪疫退散の祈禱をさせたが、この山伏達数人もこの病気に罹った。

翌年になっても「時疫いやましに流行」して、一軒もこれに罹らないものはなく、隣近所の行き来が止まった。この病気は、4年、5年と続き、猛威を振り死者数万人出る。という正体不明の猛烈な伝染病であった。

⑤ 天明3年(1783)、大凶作後、領内一円に疫病大流行、翌年になっても止まず、死者多く出る。

など、一旦流行し出すとはびこる一方で止まることを知らなかったのです。

この時代の医療知識では、疫病が流行すると、とても適確な対策も立てられず、藩主をはじめ、神仏への悪疫退散の祈願祈禱しか行われず、一般の人々に至っては、さまざまな俗信仰によって病厄から逃れようとするだけでした。

漢方薬はあったものの、誰でも入手できるものでなく、多くの人々は、付近に生えているわずかな薬草に頼るしかありませんでした。これとて、病気の軽いうちはそれなりの薬効はあったかも知れませんが、重くなると神仏の力に頼るしかなかったのです。また、迷信による療法や、予防法が行われていました。

変わった療法では、ヘンツ（便所）の掛けムシロを煎じて飲めば腹が丈夫になる。便所の溜り水はヤケドに効く。眼病に罹ったときは、カミサマ（神社、お寺、霊媒者）からもらったおふだを水や、お宮の神池にひたして洗うとなおるなどがあります。

予防法では、近年でも見られる百万遍の念仏があります。村々の入口や村はずれに百万遍の石塔が建っていますが、春先や、秋口に村のオガサマ達が集まって念仏を唱えている姿をよく見かけます。これは悪疫退散、村への侵入を防ごうと祈っているのです。また、これと似ているもので、シメナワに唐辛子、ニンニク、炭、スルメ、ご幣などをはさんで門口にさげ、同じものを村はずれに張って疫病の侵入を防ぐ。5月5日に、ショウブと、よもぎを屋根にあげ、軒にさす。などたくさんありますが、現在では、無知、不衛生というしかないことが行われていました。

藩政末期になって、藩では一部で種痘を行っています。一般にゆきわたったのは明治10年代後半頃になってからです。

明治維新後には、ドイツ医学が入って医療技術が進歩しましたが、それでも、明治時代は一般に衛生思想が低かったため、いろいろな疫病が流行し多くの死亡者が出ています。今日では生活様式も改善され、衛生思想も向上しているので昔のような事態はなくなりました。



飢と疫病の農村（大正初期）

【ふるさとのあゆみ 北津軽】津軽書房

表4-33 疫病年表(1/2)

時代	年号	西暦	疫病の記録	
織豊 時代	慶長6年	1601	この年、領内一般に疫病流行。	
	寛文4年	1664	12月時疫流行死亡多し。	
江	〃 6年	1668	6月16日、洪水で田畑荒廃。疱瘡流行小児死亡多し。	
	〃 12年	1672	今年腹疫流行死亡多数。	
	延宝3年	1675	年内疱瘡流行、餓死者多数。	
	〃 4年	1676	4月疱瘡流行。	
	〃 8年	1680	疱瘡流行子ども死亡。	
	元禄元年	1691	麻疹流行。	
	〃 8～	1695～	領内悪疫流行。	
	9年	1696	下ノ切の8割は死に絶えた。	
	宝永5年	1708	麻疹流行。	
	〃 6年	1709	〃	
	享保元年	1716	疫病流行。	
	〃 2年	1717	夏中疫病流行、死亡者多数。	
	〃 3年	1718	疫病流行により在町・九浦に施薬。	
戸	〃 5年	1720	疫病流行。	
	〃 6年	1721	9月～10月時疫流行。 身分の軽い者ばかり罹り、死亡者多数。	
	〃 7年	1722	白道院にて疫病除の百万遍施餓鬼。	
	〃 10年	1725	7月疫病流行。	
	〃 15年	1730	10月20日すぎより咳気流行。麻疹流行。死亡者多数、疫病も流行。	
	〃 16年	1731	麻疹流行。	
	〃 18年	1733	7月、山のサルまでカゼをひくといわれた悪疫流行、死亡者多し。	
	寛保元年	1741	春、時疫流行死者甚だ多し。1月犬病流行大部分死ぬ。犬にかまれた人も死ぬ。	
	延享元年	1744	疱瘡流行。	
	〃 4年	1747	夏から悪疫流行、一軒に5～6人の病人、農事おくれる。	
	寛延元年	1748	前年から疱瘡流行、子ども多く死亡。	
	時	宝暦3年	1753	4月～5月、諸国手足しびれる疫病流行。
		〃 8年	1758	疱瘡。
〃 12年		1762	6月頃脚気流行、死亡者多数。	
明和元年		1764	疱瘡流行。	
〃 2年		1765	11月頃「なんばくろう」という風病流行。	
〃 5年		1768	3月時疫流行。	
〃 7年		1770	1月移入みかんと共に異人上陸、そのためカゼ流行「みかんカゼ」という。	
安永元年		1772	1月中旬より疱瘡流行。	
〃 2年		1773	領内悪疫おとろえず数万人死亡。	
〃 3年		1774	12月、時疫やまず四隣の往来絶える。藩で医師を巡回させる。	
〃 4年		1775	前々年からの時疫なおやまず、春激しく死亡数万人。	
〃 5年		1776	三年越しの時疫なお猛威を振るう。夏からハシカ流行。	
〃 7年		1778	時疫流行。	
代	天明元年	1781	春より疱瘡流行、10月強勢、11月止む、子供多く死ぬ。	
	〃 3年	1783	凶作後の疫病流行、死亡者多し。	
	〃 4年	1784	6月津軽領内悪疫流行。	
	〃 8年	1788	瘧疾流行。	
	寛政元年	1789	時疫流行。6月瘧疾。咳気流行。	
	〃 3年	1791	去年より疱瘡流行して止まず。	

表4-33 疫病年表(2/2)

時代	年号	西暦	疫病の記録
江戸時代	寛政6年	1794	8月～9月疫病流行。
	〃 10年	1798	8月疱瘡流行、小児の死亡。
	文化4年	1807	3月、5月、10月時疫流行。
	〃 11年	1814	8月時疫流行、死人出る。
	〃 12年	1815	2月時疫流行。
	〃 13年	1816	疱瘡流行、3月～4月頃より重症の風邪など流行、貧困の者に死亡多し。
	〃 14年	1817	時疫流行死亡者多数。
	文政4年	1821	7月痢病、猖獗 <small>シヨウケツ</small> を極む。
	〃 6年	1823	疱瘡流行。
	〃 7年	1824	5月麻疹流行。
	〃 11年	1828	秋、五所川原、木作で疱瘡最中。
	〃 12年	1829	4月7日天然痘流行、注意の訓令あり。4月頃疱瘡流行。
	天保3年	1832	この年時疫流行、閏11月～12月中風邪大流行。
	〃 5年	1834	疱瘡流行。
	〃 9年	1838	悪疫流行、多数の死者出る。
	〃 12年	1841	4月、先月より流行の瘡猖獗。
	〃 13年	1842	6月、春より瘡病流行。
	弘化4年	1847	3月22日、去年冬よりこの頃まで疱瘡流行、子ども死亡多し。
	嘉永4年	1851	時疫流行。
	〃 5年	1852	唐牛昌道、牛痘種を5人の子どもに試みて成功。
安政3年	1856	8月、時疫患者多し。	
〃 4年	1857	4月、時疫猖獗「隣松寺風」流行。5月麻疹患者多数。8月下旬「隣松寺風」流行。9月時疫猖獗。	
〃 5年	1858	疱瘡。	
文久2年	1862	夏、麻疹流行死亡多し。	
慶応元年	1865	津軽領疱瘡流行。	
〃 3年	1867	6月、津軽領疱瘡流行、種痘実施、かつ大行院において安全祈禱。	
明治時代	明治10年	1877	9月コレラ流行。
	〃 12年	1879	コレラ流行により興行物禁止。
	〃 19年	1886	コレラ蔓延、患者弘前地方2,373人、死者1,318人。西海岸は、6,564人、死者3,774人、腸チフス、痘瘡も発生。コレラ罹災者密行で騒ぐ。
	〃 20年	1887	天然痘流行、患者5,311人、死者1,015人。
	〃 25年	1892	天然痘流行、患者1,151人、死者303人。
	〃 26年	1893	〃 患者1,529人、死者382人。
大正時代	〃 28年	1895	コレラ流行、死者4万150人。
	〃 32年	1899	赤痢大流行、患者16,366人。
	大正2年	1913	腸チフス、発疹チフス流行、死者多数。
	〃 3年	1914	1月腸チフス大流行。
昭和時代	〃 7年	1918	11月30日県下の流感患者30万人。
	〃 11年	1922	2月県下に流感まんえん。
	昭和21年	1946	赤痢流行。
	〃 25年	1950	2月25日、県下4万名の小中学生のトラホーム罹患率25.32%
〃 32年	1957	2月、インフルエンザ全県にまんえん、5月再発	

— 参考文献 —

- 1) 工事報告書 (岩木川改修(工事)事務所)
- 2) 岩木川改修事業概要 (青森工事事務所)
- 3) 改修計画 (東北地方建設局)
- 4) 岩木川治水対策連絡会資料 (東北地方建設局)
- 5) 岩木川調査書 (内務省第2区土木監督署 明治30年)
- 6) 東北地方水害写真集 (東北地方建設局)
- 7) 岩木川洪水記録(大正13年～昭和38年) (津軽工事事務所 昭和38年)
- 8) 東北の河川 (東北地方建設局 昭和62年)
- 9) 岩木川物語 (長尾角左衛門著 函書刊行会 昭和61年復刻版)
- 10) 昭和10年8月青森県水害実記 (東奥日報社)
- 11) 昭和52年8月「語り継ぐ災害の体験」 (社全国防災協会 昭和56年)
- 12) 青森県気象災害誌(昭和31年～52年) (青森地方气象台 昭和53年)
- 13) 日本海中部地震災害復旧工事の記録 (青森工事事務所 昭和60年)
- 14) 平成4年岩木川・水戸口・十三湖水環境調査解析業務報告書